
呪われぼっち

みゆ貴茂

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

呪われぼっち

【Nコード】

N5205D

【作者名】

みゆ貴茂

【あらすじ】

呪い、それは人のもつ負の力の具現であり、心の闇。他人の呪いを肩代わりする特殊な職業、呪われ屋の不破大智。これは世界に蔓延る呪いと、日夜戦い続ける少年の物語である。

ヒロトカゲゝ纏れた風ゝ

行き過ぎた科学を人は「魔術」と呼んでいた

業深き「魔術」を「呪い」と忌み嫌った

「進化の指針」

彼のものからの

墮落故にと

知る由もなく

ただただ怯えボクらは「呪い」を拒み続けている

たった一つの外典「呪われぼち」を除いて

「あばぎや べいろしゃのう

草木も眠る丑三つ時。

「まかぼだら まに はんどま

煌々と炎が灯る祭壇の上でいささか怪しげな呪文を唱えているのは不^ふ破^わ大^{だい}智^ち。そう、スパ 霊能高校生であるこのオレだ。

今、オレは目の前に陰気臭く……じゃない神妙な顔で座禅を組むおっさん もとい、お客さまをお救いするためにお仕事真っ

最中。

「はらばりたや うん」

真言（呪文みたいの）を唱えつつ金剛杵という手持ちの法具を大げさに振り回す。べつにそれほど必要なことでもないがハツタリとパフォ マンスはどここの業界でもオマンマの糧、相手に真実みを植え込むには大切なことなのだ。

で、結局オレが何をやっているのかと云うと呪咀移しの儀式を行なっていたりする。

みんなは呪われ屋というのは知っているだろうか？

呪いというのは云うまでもなく、負の願いで人に災厄を齎らそうとする術のことだが、近年この呪いを使うアンポンタンが急増している。

そこで登場するのがオレたち呪われ屋である。呪いというのはずばりイメ ジ通りとても粘着性の強いもので、短期間では抜うことが難しい。そこでオレたちみたいなやくざな霊能者がその呪いを肩代わりするというニュー タイプな職種が隙間産業として活躍し始めたのだ。

「はあああ のうまく さんまんだ ばざらだん かん 我、金剛に帰依す。一切の禍を滅さんと、衆生の業を括り給え！」

気合い一発張り上げる声。だからといって炎がでかくなったり、雷が出たり何の効果もないのが虚しいところ。

「おん」

呪咀移しは完了した。オレは依頼人に深々とお辞儀する。

「あなたの呪いは確かに引き受けました。もう安心してください」
オレの言葉を耳に依頼人は脱力したようにため息を吐く。きつとここに来るまで散々な目にあったんだろう。さつさとオレんここに来りゃ酷い目に合わなくて済んだのに。

みんなっ！呪いかな？って思ったら、即この不破大智の呪われ屋に来てね

安い、早い、安全、お客さまは仏様（なんか縁起悪いのは何故？）

がモット 的不破大智をよろしく!!

2

「ふわあああ」

朝日を浴びてオレは思いつきり背伸びをする。気持ちのいい晴れで良かった。

今日は二日ぶりに学校へ行ける。いったん呪いを引き受けたら被うまで本堂から出ることが出来ない。なんせ呪いは不運が連続みたいなものから病や死に至るものまで様々である。そんな状態で神聖な境内から出てしまったら、幾らオレが空前絶後のスパ 靈能力者といっても身が持たないからだ。

籠もっている間、高校は「護法天童」が代わりに行ってくれる。

護法天童とは靈能者が使役する使い魔のことで、ぶっちゃけて云えばパ ンのコピ ロボットみたいなのも思ってた方がいい。

「おはようさん、大智」

幼なじみで同級生の上条隆盛かみじょうたかもりが迎えにやってきた。

この男、特に運動をやってるわけでもないのに長身で無駄に屈強なガタイをしている。オレはかなり小柄なので一緒にいるとよく兄弟に間違えられるのがとっても癪だ。

「おっ今日は本物だな」

「やっぱ隆盛にはばれるな」

オレがそう云うと隆盛はゲラゲラ笑い始める。

「はっはっはっ 分かるもなにもお前の式神ドジすぎるし。道を歩けば転け捲るわ、まだ女子がおるのに体操服に着替え始めて変態扱いされるわ、先生のことお父さんとか間違ってる云うわ、ホントいい天然だぜあの式神」

「式じゃねえ護法天童だっ!」

「式神の方がなんかカッコいいじゃん。そんなことよりさっさと行こうぜ」

「……………」

くそっ！護法の奴め。後でたっぷり扱いてやる。

「それはそうと大智。最近、仕事しすぎじゃなねえ？今月に入って三回目だろ？体もたねえぞ無茶してたら」

「うゝみゆ……そうは思うんだがちよつと事情があつて」

深刻に云うオレに眉を顰める隆盛。

「事情？」

「ああ」

「なんだよ事情つて」

「金がいるんだ」

「はあ？」

「来月欲しいゲムソフトが五本も出るんだよ。それに冬物の服買いたいし、駅前でシルバアクセの激カックイイの見付けて。それからDVD BOXで」

「お前、煩惱断ち切る明王の僧侶のくせに物欲ありすぎ……」
呆れる隆盛。

そりや自分でも、ちとさもしいかなとか思うけどでもしうがな
いじゃん。だって世の中素敵なものが溢れているんだもん。ああ、
あれも欲しい、これも欲しい、全部欲しい。そのためには金が必要。
ちよつとくらい無理したつてオレは負けない。なぜならそこに素敵
なご褒美が待っているから。

オレが夢の世界にトリップしていると、隆盛が急に立ち止まって
オレは奴の背中にぶつかつてしまう。

「おい、痛えだろ？止まんな」

「なあ大智、あの娘……」

隆盛は険しい顔で前を歩いてた少女を指差した。見かけない娘
だ。でもオレたちと同じ高校の制服を来ている。

「あの娘、なんか憑いてねえ？」

「あっほんとだ」

その少女には何か不穏な気が取り憑いているように感じる。

隆盛は一般庶民のくせに何故か昔から靈感が強い。その感覚はオレよりも鋭いようで、よく先に何かに気が付くことが多い。ちよっぴりむかつく。

「何が憑いてんだろ？なんにしてもあの娘に目標を絞ってる感じだから呪いの類だよな」

よく霊とかを見たりする人がいるがあれはかなり特殊なことで、実際は視覚や触角とは違ったそれこそ第六番目の別の感覚でそれを感じ取ることが普通である。オレたちもそうで、その感覚は他のものより不確かなため霊などを感知するときはどうしても手探りな感じになってしまう。

「生霊？……いや、狐とかか？」

と隆盛。

「狐憑き？それじゃあもしかして、先祖代々呪われてるってやつとか？」

「うーん……どうだろ？なんか微妙に違和感が　分かりにきいなあ」

霊感の鋭い隆盛にしてはいささか頼りない返事である。

まあ、なんにしてもあの娘が危ないに変わりない。金にはなりそうにないが、りっぱな正義感もあるんですよオレは。

情けは人のためならず。きつといつか金になるって意味だ。微妙に違うか？

「おーい」

オレは少女に駆け寄り声を掛けた。彼女がこつちを振り向く。おつ、なかなかの美人。大きめで猫みたいな目が魅力的である。

「オレ、この近所の不動尊寺ってこのもんなんだけど」

「不動尊寺？」

少し冷たい印象の声で彼女は訊いてくる。こういう反応する人ちよつと苦手なんだよなあオレ。

「あつ……えと、その　云いにくいんだけど、あんななんか呪われてるみたいなんだけど　」

「知っています」

「へっ？」

少女は鋭い眼光でオレを見下ろしながら云った。

「これは生れ付きなんです。それがなんですか？」

「そのなんだったら被います？今なら格安でいい」

「ほっといてくださいっ！」

行き成り怒鳴りだす彼女。美人なだけにすんげえ迫力。

「これは私の問題です。お坊さんだかなんだか知らないけど関わらないください」

そう云うと走って行ってしまった。なんなんだった？人が親切で云ってやったっていうのに。

茫然としていると後から来た隆盛がオレの肩をポンと叩いた。

「まっこんなこともあるわな」

「うーん……なあ隆盛。悪いけどあの娘のこと調べてくんない」

「今日の昼飯おごってくれるなら」

「うっ」

隆盛はホントにお前人間か？と疑いたくなるほどの大食漢である。

金が……。オレはため息混じりに承諾した。

一時間目と二時間目の間の休み時間、隆盛が少女について調べたことを報告する。相変わらず仕事が速い。

「鬼灯風音。ほおずきかごね夏休み開けの始業式の日、双子の姉、なぎさ風紗と共に一年F組に転校してみたんだ」

一個下の転校生なら見かけなかったのも無理はない。しかし、双子の姉がいるとは。

「その風紗って娘も呪われてんのかな？」

「そこまではまだ」

チャ～チャララララ

隆盛の携帯電話が派手な音を立てて鳴り始めた。着メロが『ボレ

口』って趣味悪い。

「お前に仕事の依頼のメールだぜ」

「ん？」

隆盛から携帯を受け取る。

呪われ屋の客は大概インタ ネットのホームページと電子メールで承っているのだが、いかんせんオレはパソコンが使えないし携帯も持っていない。だから隆盛にそういうことを全て任していたりする。当然バイト代は払ってんよ。（因に先日客は駆け込みだったので隆盛を経由せず仕事をしていた）

「なにに『呪いと思われる症状で息子が死にそう』か」

オレはメールに載っていた電話番号に掛けてみる。

「もしもし、不動尊寺の不破大智ですが」

『あつよかった。お願いです。勇太が、息子が死にそうなんです。助けてください』

母親と思われる依頼人が今にも泣きそうな声で懇願してくる。オレは落ち着くように云ってから訊ねる。

「症状とかを詳しくお聞かせください」

『数週間前から息子の体に急に発疹が出来て高熱が出て』

「あの、医者には見せましたか？」

呪いが流行っているせいか、たまにただの病気なのに呪いと決め付け医者にも見せずに駆け込んでくる奴がいたりする。

『見せました。お医者さんに点滴とかしてもらったんですが全然だめで、それでそちらさまに見てもらうように云われて』

「分かりましたすぐ伺います」

携帯を切って隆盛に返す。

「仕事？」

「ああ。すぐ行かにならん」

オレは鞆から一枚の護符を取出す。

「うゝと……のうまく さんまんだ ばざらだん かん」

真言を唱えて護符を放るとあらびっくり、この世の者とは思えな

いほどの美少年が現われる。オレそっくりの。これが護法天童である。

「今から仕事だ。後は頼む」

オレがそう云うと護法はにっこり笑って応える。

「大変でちゅね。頑張ってくださいね」

どうにかならんか言葉遣い。隆盛め、腹抱えて笑うんじゃない。

「オレも付いていっていい？」

笑いすぎで涙を溜めながら隆盛が訊いてくる。

「なんで？」

「だって昼飯おごってもらわな」

「……まっいいけど、授業どうすんだ？」

「じゃん、これなんだ？」

そう云って隆盛は制服の内ポケットから一枚の護符を取り出した。

「あつそれ、仏壇の中に隠しておいたやつじゃん。なくしたと思つてたら、てめえが盗つてやがったのか」

「ははは、メンゴメンゴ。大日如来の札なんて超レアと思つて」

「そんな理由で盗むな。それ国宝級だぞ」

「まあまあ、えくと確か…… おん ばざら だと ばん」

護符が隆盛そっくりの護法天童に変わる。何故に大日如来の真言なんぞ知つとるんだ隆盛。てか、靈感が鋭いだけじゃなくてこんな芸当までできるとは。

隆盛は自身の護法天童のできに満足気に頷く。

「任せたよん。式神くん」

「かしこまりました。ご主人さま」

うわ、丁寧にお辞儀してるし。己れ隆盛。一般人のくせして。オレの護法との格差は実力の違いかよ！？

「どうちたんでちゅか、ご主人たま？プルプル震えてまちゅよ」

「うるせえ。出来損ないっ！」

殴る蹴る。思わず護法に八つ当たりしちゃった！！

「うおうでつけえ屋敷」

タクシ ですつと飛んで依頼人の家までやってきたオレたち。当然必要経費だよん。

依頼人、御陰邸はそこら辺にある家の三・四件分ぐらいあるお屋敷だった。

「ふっふっふ、こりや期待できそうだ」

「ああ、いけないんだ。ぼったくる気だ」

嬉々として攻めてくる隆盛。てめえのアルバイト代がどこから出ると思つとるんだこの男。

「オレは貧乏人からはそれなりに、金持ちからはお心遣いを頂いてるんだ」

「それをぼったくりつて云うんじゃねえの」

「分かってないっ！オレは尊敬するブラック ヤック先生よろしくだな」

「あおう」

オレたちが云い争っていると背後から声を掛けられる。後ろを振り替えると、

「うおっ山姥っ！？」

そうとしか思えない老婆がそこに。驚くオレの頭を隆盛が小突き、失礼だぞ大智。よく見ろ、ただの砂かけ婆あじゃないか」

真顔で云う。

「この家の使用人のキクにございますが」

着物姿の自称使用人は困った様子で自己紹介してきた。どう見ても妖怪婆あみたいだ。

「それじゃあ、あなたが呪われている方ですか？」

「いえ……私ではなくて坊っちゃんです」

いや分かつてるけど、あんたが背負った負のオラを前に聞かずにはいられなかった。

「奥様がお待ちです。どうぞこちらへ」

使用人キクはオレたちを屋敷内に案内し始めた。彼女の後ろを歩
きながら隆盛がオレに耳を近付け訊いてくる。

「なあ大智。死妖人^{しやうじん}なんて妖怪いたっけ？」

「……さあ」

この男、本気か！？まあ気持ち分からんでもないけど。

「こちらでございます」

長い廊下を行き部屋に通されるオレたち。中には小学一年生くら
いの男の子がベッドの上で苦しそうに寝ている。その横で若い女性
が心配そうに付き添っていた。たぶん彼女がその子の母親なのだろ
う。

「ようこそおいでくださいました。法師さま」

彼女はそう云って頭を下げると助け船が来たとばかりに寄ってく
る。隆盛に。

「あの、オレは助手みたいなもんでこっちが法師さま（？）だよ」

隆盛はオレの頭をポンポン叩いて云う。それを見た御陰婦人の顔
に不安の色が。どうせオレはガキっばいよ。

心で腐れながらも、大人なオレは笑顔で云う。

「霊能力は年齢を重ねればどうこういうものではありません」

本当は少し関係あるが、でもオレは特別だし。強いし、偉いし、
めげるな自分！！

「こっに見えてもキャリアを積んだプロです。安心してお任せくださ
い」

「そうですか」

それでも半信半疑といった婦人。オレは無視して呪いを掛けられ
た男の子に近寄る。確か勇太とか言ってたな。もともとは色が白く
て可愛い子なのだろう。しかし、今は顔の半分に異状な発疹ができ
ていて、その中心が黒ずんできて見るも無残な姿になっている。

「ヘルペス？」

「いや」

オレの問いに首を横に振る隆盛。

「恐らくアレルギー だろう。俺も靈力過敏症だから分かる。この子、もともと凄い靈的防御力が高いらしい。でも呪いそのものが強すぎて」

「そうか、自身の靈的防御力がかえって体に悪影響を及ぼしてる。どちらにしろ、この呪い かなりの靈能力者によるものだな」

オレは隆盛の言葉に続けた。

しかし、これはやっかいだ。強い靈能力者の呪いを抜くのは普通の何倍も力が要る。

「どうする？」

隆盛に訊かれ、オレはそこはかとなく悟った笑みを浮かべて云う。
「来るものは拒まず、去るものは追うがオレの心情だ」

「追わずだろ？」
うつ間違った。

「まっ、まあようするに救えるものは救いましょってことだよ」

「ふん」

ふう誤魔化した。

オレは婦人に向き直り云う。

「お母さん。呪いを抜く手順を説明します」

「はあ」

インフォ ムドなんたら。オレはできるだけ仕事内容を依頼人に説明するようにしている。

「この呪いは強力なもので、二・三日私自身の靈力を整える必要があります。それまでお子さんは境内に結界を張って安静にして頂きます。これは呪いの進行の抑制と緩和のための処置です」

オレの説明に婦人は一つ一つ丁寧に頷く。

「その後、自分の準備が整いしだいお子さんの呪いを移します。お布施は必要経費別途で全額成功報酬とし50万円頂きます。以上のことを納得して頂いたら、契約書にサインをしてください」

オレは鞆から契約書を取り出す。婦人は契約書に目を通すことなく、すぐさまそれにサインした。息子のことで動転してるとはい

えあまり感心したことではない。よい子のみんなは契約を交わすさい、きちんと書類を隅々まで確認してね。

「では、自分たちは先に行って結界の準備をしてきますので三〇分後くらいにそこに書いてある住所まで勇太くんをお連れください。では後程」

オレは契約書を受け取りペリペリつと力　ボン用紙が裏に付いた上の一枚を剥いで控えの方を婦人に渡す。そして隆盛と部屋を後にした。

「なあ、大智ホントに受けるつもりかよ」

屋敷を出たところで隆盛がオレに非難めいた口調で訊いてくる。

「ああ」

「でもさあ、昨日まで呪い被ってたんだろ？体力持つのかよ」

「見た目よりは丈夫なんですよ。華奢で悪かったな」

自分が巨漢だからっていい気になるなよ、こん畜生。

「いや、そういうこと云ってるんじゃないくてだな……。お前、靈力整えるって断食するんだろ？」

「うむ」

靈力の行使の方法は人によってまちまちである。

オレの場合、靈力の質がかなり変わっていて、他者或いは周囲の靈力を飲込み、自身の細胞の異常活性を発生させるという性質を持っている。これを放っておくと際限なく周囲の靈力を飲み込こんで自身の細胞が活性し続けて下手すれば栄養失調に陥ってしまうので普段は不動尊の靈力を使って自身の靈力を封印していたりする。そして問題はここからで呪咀移しは不動尊の靈力にほぼ依存しているの、今回のように強い呪いを移すためには断食してオレ自身の靈力を減らし、封印に使っている不動尊の靈力を術の行使に回せるようにする必要があるのだ。

「ただでさえお被いした後は体力落ちるのに断食なんかしたらきちいだろ？」

「まあ、そうだけど。でも仕事しなきゃ食っていけねえし」

「よく考えるよ。オレは大智の事を思つて云つてゐるんだ。今はまだ大丈夫でもその内疲れが溜まつて病気になるぞ。だいたい、大智が月一でいらんもん大量に買物するのつてその反動だろうが。こんなこと続けてたらいつかストレスで死んじゃうぞ」

「うゝみゆ」

オレはわざとらしく口を尖らしてみせた。

「だって、もう契約しちゃったし」

上目遣いに見上げるオレに、隆盛はため息を吐く。

「今度からは気をつける」

「はい!？」

隆盛つてばオレが拗ねてみせると絶対折れるんだよな。扱いやすい。

「ご主人ちやま」

夜。本堂で一人座禅を組んでいたオレのところに護法がやってきた。今の姿は自分と同じだと紛らわしいので別人に変えてある。

「男の子、結界が効いてきたみちやいで安定してきたでちゅ」

「そうか。母親は？」

「疲れてたみちやいだつたから、帰ってもらつたでちゅ」

「わかつた。お前は引き続き勇太くんを見張つてろ」

「はい」

元気よく返事をする護法は勇太を寝かせている祭壇のあるお堂に向かった。

「.....」

しばらくは目を瞑り座禅を組んでいたが、どうにも集中することができない。

「くそつ隆盛がよけいなこと云うから」

オレは頭を掻いて立ち上がる。

隆盛が云うことはもっともだ。このところ仕事のしすぎで体重が

減ってきている。体力も。でもなあ………ついつい、仕事入れちゃうんだよ。なんか仕事してないと落ち着かないって云うか。ちよつとばかりヒロ コンプレックスの気があるのかもしれない。

「……尊……」

オレは本堂に置いてある不動尊の像に目をやった。

本尊は大柄な人くらの大きさで、嘘か真かヒヒイロカネとかいう伝説の金属で出来ているらしい。炎に包まれ厳しい顔で石の上に座している。幼い頃から見慣れている猛々しいその姿は、オレにとっては暖かさで包み込んでくれるような父性の象徴であつた。

「不動尊。オレは間違っているか」

思わず像に語りかけてしまう。しかし、すぐにそんなことをしている自分が滑稽に思えた。

「バカか、オレは」

魔と戦い続ける宿命を背負つた不動尊に訊ねることじゃない。なんにしても、自分にできることはやっておきたいんだよな、結局のところ。

3

ぐりゅぎゅるぎゅる

オレの腹の虫が授業中の教室に響き渡る。護法に勇太を見張らせ、オレが学校に来たのだが、失敗した。逆にすりゃよかった。

「さつきからうるさいぞ。不破大智くん」

数学教師の渡部^{わたべ}りか子が黒板からオレの机にやってくる。

こいつ、なにかとオレに構ってくるんだよな。しかもなぜかいつもボディコンとか着てるし。胸がでかいことをそんなに自慢したいのかよ。教師が高校生挑発してどうする。色魔でも憑いてんじゃないの？

「キミは何匹お腹に虫を飼ってるのかな？ウン？」

オレの机に腰掛け教鞭でペシペシオレの頭を叩く渡部。みんな笑

ってるし。勘弁してくれ。

キンコンカコン

そこで終業時間を報せる鐘が鳴った。

「よかったわね。これでお待ちかねのご飯だぞ。起立、礼」

渡部はオレのでこを人差し指で突っ突くと腰をくねらせ教室から出ていった。

はあ、やつと解放された。でも全然お待ちかねじゃないんだよ。寧ろ地獄。

「大智、大丈夫か？」

隆盛が訊いてくる。

「オレ、食堂行くけどお前どうする？」

「行くよ。行きます。行ってお前が美味しそうに食べてる姿を指唧えて見てますよ」

自暴自棄。人間腹減ると悪人になる。普段と変わらないとか云わないように。

「いっただきます」

手を合わせ、隆盛は定食四人前に手を着け始める。くそ、今日も変わらず嬉しそうな顔で食べやがって。

「で？どうだ、様子は」

隆盛はくちやくちや咀嚼しながら喋る。もう慣れてるが品がないことこの上ない。

「なにが？」

「勇太だよ。その後どんな感じだ」

「ああ。なんか安定してきたよ。あの子、もともと呪いに対して抵抗力が強かったわけだし。本尊の霊力とも相性が良いみたいだから結界の中に入れて点滴うつてたら結構治ってきたんだよ。だから今夜にでも呪咀移しの儀式に入ろうかと思う」

「そうか」

頷く隆盛。

とにかく腹減った。水飲んで誤魔化そ。オレは席を立って冷水機

のところまでいく。

「ねえ、聞いた？F組の鬼灯さん」

「ええ、また怪我したんでしょ」

水を飲んでいると不意に隣でくっちゃべっていた女の子たちの会話が耳に入ってくる。

「今日は調理室で包丁が滑って手を怪我したんですって」

「その話し詳しく聞かせてくれないか？」

オレは何かに憑かれていた鬼灯風音のことが気になって、女の子たちの話に割っていった。彼女たち曰く、風音は転校してきてから毎日のように怪我や不運な目にあっているらしい。さっきも怪我をし、今は保健室に行っているということだ。

「サンキュ」

オレは女の子たちに礼を述べて、保健室に向かうことにする。それを見た隆盛が後ろから声を掛けてくる。

「おいどこ行くんだよ」

「……………」

オレは答えず無視してさっさと進む。隆盛は仕方ないと、食べ掛けの飯を無理やり口の中に詰め込んでオレの後を追ってきた。皿とか、かたづけろよ。

「のあ、どくういくんどよ」

隆盛が口をもぐもぐいわせながら訊いてくる。

「保健室」

「なんで？」

「昨日の鬼灯風音。なんかやばそうだ」

「……………」

走って保健室まで行くオレたち。途中、渡部に出くわす。

「きみたち、廊下は走っちゃダメ。いやあゝんな、お置きしちゃうぞー！」

うるせえ。緊急なんじゃ色ボケ。てめえの存在自体が違反なくせして、人に教えを説くな。

オレたちは某美少女戦士のポズなんぞをとっているバカ女をスビドアップでやり過ぐす。

「はは、りか子ちゃんってばいつもノリノリだな」

「廊下を走ることがタブで、あいつの存在を許している校則をオレは認めない」

そんなこんなで保健室まで辿り着くオレたち。

「失礼します」

戸を開けて中に入ると腕に包帯を巻いた風音がいた。用事でもしているのか保健医の姿はない。その代わりに、風音の横に彼女そっくりな少女が付き添っている。その娘が双子の姉、風紗なのだろう。

「あなたは」

風音がオレに気付く。それを見て風紗が彼女に訊ねる。

「知ってる人？」

「近所のお坊さんらしいです、お姉さま」

「えっお坊さん？」

そう云ってオレと隆盛を交互に見る風紗。

「僧はオレだけだ。こいつは助手」

「へえ、ちっちゃいのにすごいのね」

平気で人を傷つける奴だ。気にしていることを云いやがる。

「体のかさは関係ないだろうが。だいたいオレはお前らより先輩だぞ。敬え」

「えっ？マジ。ぜんぜん見えない」

この女ア。妹は突然キレるし、姉は無礼者とは最悪な双子だ。

「もういい。それよりその妹に憑いてるもんを抜きたいんだが」
オレが無然と云うと風紗が嬉しそうにはしゃぐ。

「えっ！抜ってくれんの！？よかったじゃん風音！！」

「しかし、お姉さま……」

躊躇う風音の背中を風紗はポンポン叩く。

「いい機会じゃん。ね？」

風音は俯き加減で考えてから、

「わかりました。よろしく願います」

オレに頭を下げた。おお、そうやってしおらしくされると可愛いじゃん。

「じゃあ今日はもう早退して、オレんとこ来い。ぱっぱと被っちゃ

」

「おい、大智。ちょっとこっち来い」

行き成り隆盛がオレの手を強引に引いて保健室の外へ連れ出す。

「なっなんだよ。隆盛」

「被うつて、お前今日勇太の呪咀移しすんだろっうが」

叱り付けるように云ってくる隆盛。

あっそうだった。もしかしてダブルブッキング？　いいや。

「あの程度のやつなら本堂でお経でも詠めばなんとかなるだろうし。その後、勇太くんの呪咀移しをしても全然問題なしだよ。ノ　プロブレム、ハハ」

オレは笑ってみせるが、隆盛の顔は依然険しいままだ。

「確かにそれほど霊力が強いって感じはないけどな、でも正体がばやけてはつきりしないんだ。いつ豹変するかわかんねえぞ」

「心配ないって」

「おいっ！？」

隆盛がオレのカッタ　シャツの襟首を掴んできた。

「ちよっ！？　やめろっ！！」

隆盛からこんなことされたことは今まで一度もなかった。

ちよっ恐っ！！

オレは少し狼狽える。

「お前、昨日オレが云ったこと覚えてんだろっうな」

「体が大丈夫かってことか？」

「それだけじゃねえ。オレは大智のことを思っつて云っつてることだっ！？」

「わかつてる……でも」

」

「でも、やるのか？」

「……………」

オレは隆盛から目を逸らして頷いた。隆盛は掴んだ襟を放し、
「ちっ！勝手にしろ。なにがあってもしらんからな」

そう云ってどっかへ行く。オレは隆盛の背中に向かって、

「ああっ勝手にするよっ！勝手にすりゃいいんだろっ！オレが決めて、自分でするんだ。文句はねえだろっバカ」

思いつきり幼稚な悪態を吐いた。隆盛は振り返らずどんどん歩いて去っていった。オレは壁に向き直り、

「バカ」

壁相手に頭突きした。

バカはオレだって分かっている。分かっているけど、自分にできることをやらないで何かが起きてしまうのは耐えられないんだ。父さんのときみたいに。

オレはちよつとだけ自分を痛めつけてから保健室に戻る。

「あの、なんか喧嘩してなかった？」

風紗が訊いてくる。オレは自嘲気味に笑ってから云う。

「いや、なんでもねえ。風音は責任持って被ってみせる」

「あつ、ええお願い」

オレの顔が変だったのか、風紗は真顔になって頷いた。

「風音。行こう」

オレは風音と二人で校舎を後にした。

「あの」

寺までの道。数分ほど歩いたところでそれまで黙っていた風音が声を掛けてくる。

「先輩は不動尊寺の方なんですよね」

「ああ」

「じゃあ、^{くニす}黎須法師さまの？」

「えっ 親父のこと知ってるのか？」

思いがけないところで父さんの名を耳にしオレは驚きで歩を止めた。風音も足を止めオレの方を向く。

「昔、お世話になったことがあるんです。そういえば面影がありますね」

「世話つて……」

「はい……このことです」

「それどういうことだっ!？」

焦りが口から飛び出てくる。思わず風音に詰問してしまった。そんなオレとは対照的に風音は飽くまで冷静な態度を崩さず答える。

「私たち姉妹は幼い頃に両親と死別し、施設で育ちました。二人とも生まれ持つて呪われていたのでいつも何かしら不幸に付き纏われていたんです。そんなだからみんなから後ろ指差されるような生活が続いていて あっ 関係ない話ですね」

「いや」

生れ付き呪われて育った人間の苦しみがどれほどのものなのかオレには想像できない。きつと生き地獄と云うに相應しい人生を彼女たちは歩んで来たのではないだろうか。

「私たちが小学六年生のころ、学校の帰り道に私が転んでしまつて靴が片方脱げてどぶ川に落ちたんです。私は泣いてしまつて、姉がそれを取つてくると云つてくれました。しかし、川堀の梯子を下りている途中で姉は足を滑らせ落ちそうになつたんです。そこにたま通り掛かった黎須さまがとっさに手を取つてくださり間一髪のところでは姉は助かりました。その後、黎須さまは姉を救いあげるとご自身の着物が汚れるのも構わず私の靴をどぶ川から取つてきてくださつたんです。そして礼を述べた私たちに『もし困ったことかお願いごととかがあるならうちのお寺にくるといい』と仰つてくださりました。黎須さまには私たちが呪われていたことが分かつてらしたんですね。それでも私たちが不安を感じないようにそんな云い方をしてくださつたんです。私たちがお寺を訪ねると黎須さまはいろんな楽しい話を聞かせてくれて、最後に呪い封じの術を教えてく

れました」

「呪い封じ？」

呪い封じとはその名の通り、呪いの効力を一時的に封じる方法である。オレが呪咀移しで他人の呪いを引き受けた後とかに、自分が酷い目に遭わぬよう呪いを抜いきるまでの間行なう術であり、その場凌ぎの防御手段のようなものだ。

「本当に呪い封じを？ 祓ったんじゃないくて」

「はあたぶん。私たちは霊力が強いので呪い封じができるといったようなことを仰ってたと思います。梵字を手の平に指で描いて飲み込む方法です。それを毎日行なうようにと云われて実行したら、その日から嘘のように厭なことが減ったんです」

「今まではそれで凌げてたということか。風紗もそれで防いでいるんだな？」

「はい。でも、数カ月前くらいから私だけ急に効果がなくなっただけで。また、昔みたいに不幸なことが度重なって。前の学校もそんな感じで転校せざるえなくなっただけです」

「じゃあ、なんですすぐにうちに来なかったんだよ」

オレの問いに風音は俯いた。そして、蚊の鳴くような消え入る声で答える。

「私たちが呪い封じを教えて頂いて少し後に黎須さまが亡くなられてしまったのを知ってたから恐かったんです。もしかしたら私たちの身代わりになったのかもって思ってた」

「……………」

だから昨日、オレが声をかけたときもそれで取り乱してしまったのか。オレが息子だと気付き、どう対応していいか混乱して。

「親父が死んだこととあんたたちのことは関係ない。気にしないでくれ」

風音は俯いたまま頷く。もしかしたら泣いているのかもしれない。長い髪に隠れてうかがい知ることが出来ない。

「あと、悪いけど祓うのを数日延期させてくれないか？そして、そ

れまで境内の中で過ごしてほしい。そしたらいくらか緩和されると
思うし」

父さんはオレと違って呪咀移しをしたことはなかった。でも、それは移すまでもなく短時間で呪いを祓うだけの法力を持っていたからだ。それなのにこの姉妹には一時凌ぎである呪い封じの方法を教えただけで祓わなかった。となるとなにかしらの理由が存在するはずだ。それを見極めなければ危険かもしれない。

「明日からは土日で休みだけど、その後も少し学校休んでもらうことになるかも」

「お任せします」

風音がお辞儀する。アスファルトにぽたりと雫が零れた。

その日の夜。

「これより呪咀移しの儀式に入ります」

オレは祭壇で寝ている勇太と付き添っている御陰婦人にお辞儀する。

今、オレは両手に金剛杵という法具を持っている。これはそれぞれ不動尊が持つ降魔の利剣と羅策（縄）に見立てているのだ。そして清めたその身に法衣を纏う。自分の体型に合わせてわざわざ特注して買ったのに、全然似合っていないから頗る悲しい。

「お母さん。緊張せず、ただ息子さんの無事を願っててください」

「はい」

オレの言葉に真剣に頷く婦人。

「おん あばぎや べろいしゃのう まかばだらまに
儀式はつつがなく進む。」

しかし、勇太は本当にすごい。こうしている間にも無意識のうちにどんどんと本尊の霊力を体内に取り込み自力で呪いを祓おうとしている。これを霊能力者の器とでもいうのだろうか。

「はあああ のうまく さんまんだ ばざらだん かん 我、

金剛に帰依す。一切の禍を滅さんと、衆生の業を括り給え！」

勇太に憑いた呪いを我が身に移すことに成功した。

「おん」

オレは立ち上がり勇太に近寄る。彼はまだ薬が効いて寝ているが、心なしか表情が楽になったような気がする。

「これで息子さんの呪いは自分が引き受けました」

「本当ですかっ!？」

「ええ。後は医療を続けてしばらく安静にしていれば完治するでしょう」

「ありがとうございます」

婦人は泣きながら息子の手を握り締める。しかし、問題はまだあった。嬉しそうな彼女に告げるのは酷だが致し方ない。

「ただ、勇太くんに呪いをかけたのは霊能力者です。だから、もしかすると呪咀移しを行なったことがそいつにばれて、もう一度呪いをかけてくる可能性があります」

「そんなっ!」

婦人の顔がショックで固まる。

「どうすれば」

「落ち着いてください。これを勇太くんが寝ているベッドの傍に置いておいてください」

オレはそう言って懷から木でできた小さなヒトガタを婦人に手渡す。

「これは？」

「これは一種の身代わり人形です。一時的なものです。勇太くんが呪われればそれを代わりに受けてカタカタと揺れ始めます。ですからそうなったときすぐにここに来てください。呪いの儀式をしている最中であれば、それを行なっている相手の居場所が掴めると思えますので、自分が相手にやめるように交渉します。わかりましたか？」

「はっはい」

それでも婦人の顔は浮かないままだった。

当然だ。なんでこんな幼い子が呪われなければならないのだ。

婦人は礼を述べ勇太を連れて自宅へ帰っていった。聞いたところによると彼女の夫は数年前亡くなられてしまったらしい。いくら使用人がいるようなお屋敷の人間だとしても、子供を一人で育てていくのは大変なことだろうな。

さてと、オレはこれから本堂に籠もって勇太から移した呪いを祓わなきゃならない。呪い封じをしてあるから、勇太みたいな目には遭うことはないけど、これが一苦労である。オレは本堂に入ると、扉の鍵を下ろして誰も出入りできないようにする。そして本尊の前で座禅を組みお経を詠む。お経自体、真言のように力を発揮するものではないが精神を集中させるにはちょうどいいのだ。

「爾時大会 有一明王 是大明王」

そついや、隆盛あれから顔を見せてこなかったな。ちょっとくらい様子見にきてくれりゃいいのに薄情もん。

……いや、自分でも我侂だってことはわかってるよ。でも今日はなんか心がぞわぞわするから隆盛に愚痴を聞いてほしい気分だったんだ。

「是経 皆大歡喜 信受奉行」

ああ、なんか集中できん。

暗闇の中に妙に響いて浮き出る自分の声がなんか無性に腹ただしく感じる。

「のうまく さんまんだ ばさらだん せんだま」

久しぶりに父さんの話をきいたからだ。そのせいで思い出したい、自分の馬鹿さ加減に触れてしまつてイライラしているんだ。

もう二度とあんな思いをしたくないのに、いつまで付き纏つてオレを責めるんだ。

あれは四年前、

「うんたらた かん まん」

オレが中一の秋のことだった。

「おかえり大智」

学校から帰ってきたオレに父さんが挨拶してくる。父さんは境内の庭で落葉を箒で掃いていた。疲れていたオレは適当に頷いて部屋に上がった。部屋で寝ていると父さんがノックして入ってきた。

「大智。悪いが今日の夜、一件お祓いのお勤めがあるんだが手伝ってくれないか？」

「はあ？」

オレは露骨に嫌な表情をする。

「オレ、今日体育祭の練習でくたくたなんだよ。だいたい、ただでさえ朝の修業で眠いのにな夜まで手伝えない」

「はは、そうだな。すまんかった、無理云って」

父さんは自嘲気味に笑って部屋を出ていった。

なんなんだよ、いったい。

自分が父さんを傷つけたみたいなのがしていやな気持ちになる。

オレはそのころ父さんに反抗ばかりしていた。本当に疲れてもいたが、正直のところ父さんの仕事の手伝いなんかしたくなかったんだ。別に父さんのことが嫌いだからとかそんなんじゃない。オレは母親を物心が着く前に亡くしているので知らない。だから父さんは唯一の家族だし、叱られたことがないくらい優しい人だから嫌いになれるはずがない。ただ、そのころ自分の持つて生まれた霊能力に対して思うことがあって、そのイライラを昇華しきれず父さんにぶつけていたんだ。

小さいころは上手に自身の霊力を封印できずによく病気になっていた。最近是不動尊の霊力の制御になれてきてそんなことはなくなったが、それだって座禅組んだりお経詠んだり、毎日毎日いやになるような修業をしているからだ。なんでオレだけがこんな辛い思いをしなければならぬのかと、どうしようもないことをぐだぐだ悩んでいた。

「……ん……」

いつのまにか寝ていた。目が覚めるともう夜中だった。

「みゆう」

眠気眼でしばらくぼうつとしてしていると急に胸がざわざわしてきて、いやな予感が膨れ上がってきた。

「父さんっ!？」

オレはベッドから跳ね起きて本堂へ向かった。

きやああああ

その途中で女の悲鳴が聞こえてきた。本堂じゃない。その奥の祭壇があるお堂からだ。

「ああああ」

お堂の戸を開けると中にいた中年の女が苦しそうにのた打ち回っていた。こいつがお祓いの相手なのだろう。

「うつ」

やがて女の動きが止まる。事切れたのだ。

「親父っ!」

恐怖に戦く間もなく、父さんが祭壇の上で倒れているのが目に入ってきた。オレは父さんに駆け寄る。

「親父、おいっ!しっかりしろ!」

だめだ、もう死んでいる。嘘だっ!なんでだよ

オレは混乱する頭を掻き耑る。

お祓いに失敗した?そんな、まさか父さんに限って。

何が何だか分からなかったオレは、そのときはただ父さんの死に顔を前に茫然となるしかなかった。

翌日、警察が事情聴取でやってきたがどんな対応をしたのか憶えていない。その後隆盛が来て何か云ってきていたが、オレがわめき散らして追い返す。

一人になる。何もしなかった。

少し時間が経って数人の僧がうちを訪ねてきた。父さんの葬儀を本山で行うといったようなことオレに告げてきた。オレにも本山に

来るように云ってきたがオレは断った。子供が親の葬式に出ないというのはおかしい話ではないかと云われたが、この家を一步でも出ると全てが終わってしまうような気がして恐かった。親父はたしかに死んだ。でも何かが自分の中で違うような感じがしていた。結局わめいて彼らを追い返した。

また、一人になる。オレはふらつく足で本堂に行き木の床の上に寝転がる。本尊がそんなオレを厳しい顔で見下ろしている。

「……尊……」

オレは不動尊を目にした一番古い記憶を思い出した。

『どうしてこの人怒ってるの？』

まだ、三歳くらいの頃だった。父さんに抱っこされたオレは不思議を口に出す。父さんは愉快そうに笑っていた。

『はは、恐いか？』

『ううん。恐くないよ』

不思議と本当に恐くなかった。怒っているように見えるけど、それは自分にはないのだとなんとなく感じていたからだ。

『不動尊さまはね。みんなを悪いものから守ってくださっているんだよ』

『ふおう……ふおう……そんなまえらいんだね』

不動尊が言えなかったから尊だけを取って呼んだ。

『みんなが幸せになれるように戦ってくれてるんだからね』

『かつくういんだね。そんなさま』

父さんはそんなオレを愛しそうに見つめていた。

「……尊……」

オレは起き上がり本尊に縋る。

「尊……どうして親父は死んだんだ！どうして
くれよ、不動尊っ！？」 答えて

なんで答えてくれないんだ。みんなを守ってくれるんじゃないのか。どうして父さんを守ってくれなかったんだ。

「尊さま。お願いだ」

オレが見苦しいまでに取り乱していると本堂の入り口から人影が伸びてきた。

「

！？」

オレは驚きのあまりに口を抑える。

「父……さん」

そこには父さんが立っていた。昨日死んだはずの父さんが照れ臭そうに笑っている。

「私は黎須さまの最後の力で出来た護法天童です。霊力が足りず具現化するのに時間が掛かってしまいました」

「護法天童……」

オレは全身から力が抜けてへたり込む。少しでも馬鹿な希望に期待していた自分がそこにいた。父さんの姿をした護法がオレに近付いてくる。

「大智さん、黎須さまからあなたに伝言を授かっています」

「……………」

「ごめな、大智。父さんが力不足だったばかりにこんなことになって」

オレは戸惑いで首を横に振る。護法のそれはまるつきり父さんだ。父さん、大智のこといっぱい愛してたけどなんかお前には辛いことばかり押しつけてた気がする。霊力のことだって父さんのを受け継いでしまったためだし、そのせいで辛い修業とかするはめになっってしまったわけだし」

「父さん……ねえ　父さん」

語りかけても護法は一方的に話すだけだ。単なるビデオレコダなのだ、これは。

「だがな、もう大智は十分強くなった。これからは自分が生きたいように生きる！父さん死んじまって直接は応援できないけど、不動尊さまと共にお前のこと見守ってるからな。がんばって……以上です」

護法から父さんの雰囲気は薄らいだ。そして護法自身もその姿が

薄らいでいく。

「もう時間です。霊力がないので消えます。これからはあなたが護符のご主人さまです」

「いや、待ってもう少し」

懇願するオレに護法は首を横に振る。

「すみません」

「いやだ。父さん 父さん」

オレは薄らいでいく護法に縋る。

もう少し、もう少しだけそのままの姿でいてほしかった。

「がんばって」

護法がオレを抱き締めた。父さんだ。父さんがまだ残っている。

「父さん、オレ」

護法は煙と消え、一枚の護符がヒラヒラと舞い、やがて冷たい床に落ちた。

それから数日間、オレは本堂で座禅を組み続けた。そして決意する。自分にできることを見付けよう。そして納得するまでやり続けよう。

4

いつのまにか座禅を組んだまま寝ていた。勇太から移した呪いはすでに被い終えた。オレは本堂から出て自宅の居間に向かった。

「あっお疲れ様です」

「やつほ」

風音と風紗がそこで寛いでいた。

「今、何時？」

「11時よ。しかも、日曜の」

とういうことは丸一日以上も籠もってたのか。被ってる最中は時間感覚が薄くなる。

「あなた、黎須さんの子供だったのね」

風紗が云つ。

「そう云えば似てるよね。体は全然ちっこいけど」
うるせ。この女、本質的にいじめっ子か。

「あの、ご飯食べますか？勝手にお台所使わせて頂き作っただんす
が」

「あつうん」

風音が朝食の準備をしてくれる。三日ぶりの食事だ。昔は断食した後のご飯はいつも吐きそうになっていたが、今はなれてそんなことなくなつたのでまだ救いがある。

「いただきます」

焼き魚に味噌汁に卵焼き。どれも絶品だ。普段、護法に飯を作らしているがこいつが料理が下手でろくな食事じゃない。久しぶりに家でこんなすばらしいものを頂きました。

「ごちそうさま。いや、本当に旨かったよ。ありがとう」

「男の人の一人暮らしだとろくな食事を取ってらっしゃらないと思つて、作って正解でしたね」

「はは……」

仰るとおりですがなにげに慇懃無礼だな風音。まあ、明白に無礼な姉よりいいけど。

「そうだ、風紗も呪われていて呪い封じしてるんだろ？」

「えっ？ええそうよ。でも、なんか私の方は別になんともないのよ」
風紗の云つとおり、彼女の方からはいやな気配は感じない。呪い封じが完璧に作用しているからか？

「ちよつと今から被ってみるか。無駄かもしれないけど念のため」

風音に言つと彼女は黙つて頷いた。

「聞説是經 皆大歡喜 信受奉行」

祭壇の上でお経を詠んでみた。弱い霊なんかだつたらそれだけで逃げ出すこともあるのだが。でも風音の場合はそれが効かない。

「はあああ のうまく さんまんだ ばざらだん かん 我、
金剛に帰依す。一切の禍を滅さんと、衆生の業を括り給え！」

真言もダメ。呪咀移することさえできない。

表層的な邪気を括ることができても、呪いの根源的な依代の部分をピクリとも動かすことができないのだ。

やはりこの呪いは被うことができないものなんだ。なぜだっ

「くっ」

「……………」

風音は目を瞑る。平静を装ってはいるが、その心中は落胆していることだろう。

「もう少し辛抱してくれ。オレが必ずなんとかしてみせる」

風音は目を開き微笑んだ。

「よろしく願います」

信じてくれているんだ。オレのことを。絶対になんとかしてみせる。

次の日。風音と風紗を残して学校へ行く。風紗は風音に付き添うと云っていたが、単にずる休みしたかっただけに見えた。

「くそっ、隆盛の奴」

ホントはオレも護法に行かせるつもりだった。でも隆盛に相談にのってほしかつたのにあいつはいつまで経っても迎えにこない。携帯には繋がらず、自宅に電話したらもう学校に行ったとおばさんから云われた。仕方ないから学校まで行って会わなければならなくなつちまった。まだ怒ってるのかよ？

「不破大智くん!？」

「げっ」

下駄箱でハレンチ教師、渡部りか子と出くわす。なんてついてない日だ。

「あれ、今日は上条くんと一緒にじゃないの？これがホントのひとりぼっちね。ぼっちって法師の意味なんですって。知ってた」

「はいはい」

オレは上履きを履きつつつれなく返事をした。それを見て渡部はにつっこりと微笑む。

「あっわかった。喧嘩したのね。寂しそう。うふっ先生が癒してあげようか？ベッドの上で」

うわっキモっ！冗談でも口にするな、悍ましい。

「なぐんてね、半分冗談で半分本気よ」

本気でもあるのか、この脳味噌フェロモン女。もはや危機感すら憶えるわ。

「先生も気持ち分かるわ。一人のときって泣きなくなるもんね。月のない夜とか自分で自分を呪いたくなっちゃうもの」

はいはい、かつてに呪っとけ。オレが許可する　　ん？

「今云ったこともう一度云ってみろ」

「えっ？一人だと寂しいって」

「いや、その後」

「自分で自分を呪う？」

不思議そうに口に出す渡部。

自分で自分を呪う。そんなことあるのだろうか？もし、あるのだとしたら　　。

オレは教室まで駆け出す。

「廊下は走っちゃダメっていつてるのに」

渡部は年甲斐もなくほっぺたをふくらかしていた。もう、勘弁してくれ。

「おい、隆盛」

教室まで着くと、すでに席にっていた隆盛に声をかける。

「隆盛。まだ怒ってるのか？」

オレが恐る恐る訊くと隆盛は立ち上がってにつっこり笑う。

「いいえ。ご主人さまは大智さまのことを怒ってなどいませんよ」

これは護法天童か。じゃあ隆盛はどこに。

「おい、隆盛は？」

「ご主人さまは今朝未明に、大智さまのご自宅に向かわれました」

「なんだって」

全然気付かなかった。

「くそっ」

オレの護法は家に置いてきてるし、欠席になるが仕方ない。オレは家に引き返す。

「よう、大智」

家に着いて居間に入ると隆盛は風音と風紗の三人で楽しそうにお喋りなんかしてらっしゃってたよ。陽気に挨拶してきやがって。

「お前、なに他人ん家に黙って上がりこんでんだよ」

「いやあちよつち捜し物があつてな。あの日別れてすぐからここきて探し始めたけど、なかなか見つかんなくて。ほら、オレ靈力過敏症せいでこの寺に長居できねえだろ？だから行ったり来たりで大変だったぜ」

あの日って、こいつオレん家のスペアキでも持ってたのか？

「オレ、鍵渡してたか？」

「うんや、針金でちよいとして開けた」

「なんてことすんだてめえ！？」

「まあそう怒りなさんな。オレと大智の仲じゃん」

どこの世界にピッキングで家宅侵入して許される仲というのがあるのだろうか？てか、絶対鍵付け替えよ。ミステリとかにでてるドイツ製のとかに。

「そこまでして捜し物ってなんだよ。また家のもんパクするつもりか？」

「ちやうちやう、中国犬なんちって」

ギャフン。くだらん洒落はやめなしゃれ。

「そのことで、話があるからお前の部屋に行こうぜ」

「ああ」

オレたちは居間に風音たちを残して、部屋に向かう。

「あのさ、こないだのことなんだけど」

「ああ、あれ？悪かったな。頭に血が上っちゃまって。すまんかった」

謝ってくる隆盛。

「いや、べつに」

悪いのはオレなんだけど。なんかオレってば『ごめん』が云えない人種なんだよな。

「あのさ、オレ」

「大智の気持ちは分かってるつもりだ」

隆盛は真剣な声で云う。

「なんてのかなあ 唯一の我侭じゃん。オレが大智のことを氣遣うの……正直、大智からしてみれば鬱陶しいかもしれないけどさ」

「……………」

「他には何も望まねえからさ そんなに許してほしいんだ」
なに云ってんだ、こいつ？

「なんかその云い分だと、オレがお前のことアッシとか丁稚とか散々利用してるくせに本命が別にいる悪女みたいじゃん」

「当たらずも遠からずってやつじゃねえ？」

「はあ？」

「だってオレ、大智のこと誰よりも愛しいですし つか毎日毎日、湧き出る欲望を抑えるのに必死みたいなの？」

「……………」

本氣かこいつ ……！！前々から変態とは思っていたが……いや、隆盛のことだ、またいつもの質の悪い冗談ということも いや 待てよ、そういうえば父さんが生きてた頃、隆盛は異常なまでに父さんに慕情を示していたような。それはもう懐くなんてレベルじゃなくて、恋する乙女ならぬ恋する奴隷体質？つまりなにか？父さんが死んだからその息子であるオレに乗り換え

「やめやめ、あんま深く考えんどこ！」

「えゝオレとしてはさらりと流されても面白くないんですけど」
必死で頭を振り現実逃避をしようとするオレに隆盛が非難めいた声を上げる。

だってあんた、これ以上考えると人間不信になりそうですし。

「そつそれで、話つて？」

「ん、オレさつきまで黎須さんの書齋にいたんだよ」

あそこだけ何故か携帯の電波が入らないんだったな。

「呪いのこと調べようと思つて。それでこんな本見付けてさ」

隆盛が一冊の本を渡してきた。『おもしろ霊力大百科』だ

さいタイトル。みゆみゆ社？あまり聞いたことがない出版社のものだな。ゲっ！！著者のところに不和黎須とか書いてある。父さん本とか出してたのかよ。著者近影がやたらと修正してあるよう（ホスト風）に見えるのはオレの気のせいか？

「読んでみるよ」

隆盛に促されオレは適当にペジを捲つて音読する。

「えゝそれが異形のコンドリオゾムムの齎らすものであり、霊には二種類の物質が存在する。それらが互いに作用しあい魂を構成、つまり魂がナノサイズの第三中枢」

「そこじゃなくて付箋のところ」

「ふむ。『霊力のガン化は先に述べた通りだが、これとは別の理由も存在する。それは魂の一部に疾患ができ本人の意志とは無関係に霊力を行使する現象』なっ！？そんなことがあるのか？」

驚くオレに隆盛は頷く。

「風音ちゃんの呪いの正体を感じにくかったのは、それが憑いたものではなく彼女自身の暴走した靈魂そのものだったからだ」

「やはり自分で自分を呪つてたのか。依代の正体が自身の魂なら抜えるわけがない」

だから父さんは一時凌ぎでも効果を防げる呪い封じを二人に教えた。

しかし問題は、

「問題なのはなぜ風音だけ呪い封じが効かなくなつたかだ」

「単に呪いの力が彼女の使う術の防御力を上回つたんだと思うがその理由を」

チャゝチャララゝラゝラゝ

隆盛の携帯が『威風堂々』を奏でる。メルではなくて電話らしい。趣味悪い。

「もしもし。ああ 分かった。すぐつれてきて。はい、いるよ。大丈夫だから」

簡潔に話を切り上げ携帯を切る隆盛。

「大智。御陰婦人からだ。お前が勇太に渡していたヒトガタが動きだしたって」

「ちっ次から次に」

オレたちは慌てて部屋を出る。

「隆盛。祭壇の準備をしろ」

「わかった」

隆盛は頷いて祭壇のお堂へ向かう。

「おいっ！？風音っ！風紗っ！」

「はい」

オレが廊下から呼ぶと風音が居間から顔を出す。

「姉は出掛けましたけど」

「そうか。風音、悪いけど法衣に着替えるの手伝ってくれ」

「ええ」

年ごろの娘に頼むのは気が引けるけどそんな悠長なこと云ってる暇はない。法衣を一人で着てると時間かかるのだ。不器用とか言うな。

「お願いしますっ！」

息を切らして御陰婦人が勇太の手を引いてやってきた。

「さあ、祭壇に。勇太くん、この中にいたら安全だから心配ないぞ」
「うん」

勇太は元気よく頷いて母親と結界の張った祭壇に上がる。すでに発疹はほとんどなくなっていて元通りの愛らしい顔に戻っていた。

「……………」

あれっ？確かに勇太に向かって呪いが送られてるのに、その発信源がわからないぞ。

「隆盛？」

オレは後ろにいた隆盛に助けを求める。しかし、彼も同様に首を傾げていて、

「うゝん。なんでかな、わからんぞ。しゃあねえ大智、水鏡もつてこい。倉にあるから」

オレは云われたとおり水鏡を持ってきて隆盛に渡した。水鏡とは銀の盆などに水を注ぐと鏡の代わりになるという代物。神道系の儀式とかじゃあ使うことがあるのかもしれないけど、オレはこんなもん始めて見たぞ。

「護符貸して。オレの学校行ってるから」

オレは隆盛に護法天童の護符を渡す。いったいこんなもの、何に使うつもりだ？

隆盛は護符を水鏡に浮かべ真言を唱える。

「えゝと　　のうまく　さんまんだ　ばざらだん　かん」

すると護符が消えて水鏡に何かが映り始めた。そうか！護符には霊力を物質化する力があるから、その効力を応用して水鏡をモニターにしたんだ。水は霊力を捕らえやすいし、こうすればぐんと分かりやすくなる。でもなんで隆盛こんな方法を知ってるんだよ？

「なっこれは　　」

オレは鏡に映った人物を見て驚愕する。

「風音？」

そこにはオレんちの居間で寛いでいる風音が映っていた。勇太と婦人に結界で待機するよう言っ、オレと隆盛は風音の下へ。

「どうかしたんですか？二人とも」

オレたちの様子が尋常ではなかったんだろう。風音はぽかんと口を開けている。

「間違いない。やはり風音ちゃんから呪いが発せられているぞ」

「えっ！？どういうことですかっ？」

隆盛の指摘に怪訝に問う風音。

本当にどういうことだ？風音がなんの儀式もなしに勇太を呪えるとは思えない。でも確実に呪いは風音から送られている。

「靈魂が串刺しに」

隆盛がぼそりと呟く。

「え？」

「風音ちゃんの靈魂が同質の靈魂によって串刺しになっている。その一方が勇太に向かっているんだけど」

まったく質の同じ靈魂に貫かれている？しかも、その一方は勇太に伸びていてもう一方。

「……………」

まさかっ！？

オレの頭に、ある最悪な仮説が浮上する。そして隆盛は唇を噛んでいた。彼もオレと同じことを思いついたようだった。

「の凶星よ、我が」

とあるビルの廃墟の中、風紗は棘をポイントにした逆五芒星の中心に跪いて呪文を唱えていた。棘には小動物がそれぞれ串刺しにされている。しかもまだ生きている。生かしたまま激痛を与え続け、苦しみの念を呪いの糧とするために。

「魔力を……………」

「もう、やめるんだ風紗」

オレたち三人の出現に風紗は固まった。

「お姉さまどうしてこんなことを……………」

そう、勇太を呪っていたのは風紗だった。

「憎かったから」

風紗はゆっくりとした動作で立ち上がる。そして、風音に思いきり罵声を浴びせた。

「あんたのことが憎かったからよっ！！」

「……………！？」

風音はわけ分らず口を抑えて首を振る。

「私たちは生れ付き呪われてた。ずっと不幸だったけど二人で支えあって生きてたわ。それなのにあんたのお父さんが呪い封じなんてもんで風音だけ救って」

「そんな、お姉さまだって教えて頂いて」

「効かなかったのよ！」

「っ!？」

呪い封じが効かなかった

「ずっと効いてる振りをしてたのよ。あんたは幸せそうにしてるし、私は厭なことがあってもいつもあんたにばれないように隠していたわ。黎須さんに相談しようと思ったときにはすでに亡くなられていた。憎かった。どうして風音は救われたのに私は救われないの？双子で、同じように呪われていて、ずっと同じだったのに　あの日からあんたは毎日毎日楽しそうにしている」

「ひつ　う　ごめ　な……さい」

風紗の辛辣な告白に風音は両手で顔を覆い隠し謝罪する。風紗は興奮のあまり肩で息をしていた。

そして笑いだす。魂を震え上がらせているような声で。

「ふはははは。そしてついこないだ誰かがネットで教えてくれたのよ。呪いをどうにかする方法を。呪いをあんたに擦り付ければいいってね」

魂の疾患による呪い。そしてこの呪いは恐らく自身の霊力を食らって精神を蝕む代物。本来ならばまともな思考能力を失うほど強力な　。それでもこの姉妹の霊力は疾患が食い尽くせないほど強く、残った霊力でなんとか防御をしていた。だからこの姉妹は昔から少し意識が飛んで不注意の連続を起こすくらいですんでいたんだ。

そして父さんは呪い封じによってその防御力を高める方法を教えた。

風音はそれで救われたが、なぜか風紗には効果がなかった。

『自分だけがどうして……』　そのストレスが更に呪いの力

を加速させたのだろう。そして昨今、靈魂の疾患部位を伸ばし自分の靈力の代わりに風音の靈力を食らわせ、更に精神を蝕む呪いをも彼女に移す方法を風紗は知った。双子で靈力の質がまったく同じだったからできた芸当だ。風音は自分と風紗の二つの呪いを引き受けることになってしまったために呪い封じの防御力が負けてしまったのだ。

「自分の魂を伸ばして風音の魂を貫くには支柱となるべつの目標が必要だった」

「それが勇太くんか」

勇太はただ二人のとはつちりを受け、靈力アレルギー であんなめに。

「そうよっ！」

風紗は血走った目をオレに向けてくる。

「誰でもよかったのよ。ネットの掲示板にあの子を呪ってくれて匿名で書いてあったからあの子にただけ。今度こそ、邪魔させないからっ！！」

「もうやめろっ！」

風紗はオレの制止も聞かずに呪いの儀式を完成させる。

「礎に死をつ！……………えっ、なに？ちよつと。いや……………いやああああああ」

「きゃああああああ」

風音と風紗、二人が同時に苦しみ始めた。

「どうしたっ！？」

オレの問いに戦慄を浮かべて隆盛が云う。

「呪いが返された。勇太の奴、無意識に呪咀返しをやっちゃったんだ」

呪いは風音の体を貫いている風紗の魂を経由している。だから二人ともに影響が出てしまったんだ。

まずい。呪咀返しは元の呪いの何倍もの力になる。このままじゃ二人とも死んじゃう。

「のうまく」

「おいっ！自分に移すつもりじゃねえだろうな。そんなことしたら、お前がっ　　！！」

うるせえ隆盛。このままだまって見てられるかよ！

「さんまんだ　ばざらだん　かん　我、金剛に帰依す。一切の禍を滅さんと、衆生の業を括り給え！」

移せた。疾患部位、依代である魂そのものを移そうとしても無理だが、精神を蝕むという呪いの効果（邪気）だけでも一時凌ぎに代行できた。

二人とも動揺はしてるが苦しみはなくなったようだ。

「おん」

なっ！オレの力でも呪い封じしきれない。

「うがああああああ」

頭が割れるように痛い。思わず手にしていた金剛杵を床に落とし、それを拾おうとしゃがんだがそのまま崩れるように倒れてしまう。針で刺されるような痛みと熱湯を浴びせられたような刺激が交互にやってきて　　。

「ああああああああ　　意識が　　。」

『風音、泣かないで。お姉ちゃんがついてるから』

小さいときの風音？泣いてるのを誰かが慰めている。

『お姉ちゃんが守ってあげるから』

これは風紗の記憶。

『お姉ちゃん。私、今日一度も厭なことがなかったよ。やっぱり呪い封じが効いてるみたい。お姉ちゃんは？』

『うん。私も　　（気付かれてはいけない。折角、風音が笑ってるんだもん。水を注しちゃいけない）』

心の歪みが流れこんでくる。

『法師さまは亡くなって　　もう誰にも相談できない』

閉じこめてはいけない苦しみ。

『お姉ちゃん、手火傷したの？』

『うっん。霜焼けよ、きつと（私が我慢すればすむことだもの）』
軋んでいく。

『風紗さんは協調性に欠けてるんじゃないですか？もう少し妹さんを見習って』

『すいません（我慢しなきゃ）』

責任はやがて脅迫に、

『お姉さま、私料理の大会で優勝しました』『そう、よかったわね（うれしいはずなのになんで私、こんなに惨めなの？）』

目的はその理由を見失って、

『私、お姉さまと同じ高校に通いたいののでランク下げます』

『（あんたなんか、あんたなんか）』

愛情が憎しみに。

「おいっ、大智。しっかりしろ」

「っ！？」

隆盛の声にはっとなる。いつのまにかオレは隆盛に抱き起こされていた。

まずい、このままじゃ精神を蝕まれて死んでしまう。

「くううう　　こんくうはああ……こんごうじよ」

「金剛杵かつ！ほらこれ」

隆盛が金剛杵を拾ってオレの手に握らす。

「はあああああああ」

オレは極限の痛みを堪え、涙で鼻水がつまった声を張り上げる。

「のうまく　さらば　たたぎやていびやく　さらばぼっけいびやく
さらばた　たらた　せんだまかろしゃだ　けん　ぎゃきぎゃき

さらばびきんなん　うん　たらた　かん　まん　恐るべきい

大忿怒うううぞんよおおわれを喰らいてええ……刃となせ

ジャキン

真言を全て唱え終えた瞬間、金剛杵の先から鋭い刃が飛び出てる。他の霊力を食らうオレの霊力を不動尊の霊力で結晶化した降魔の利剣。オレはその刃を自分の心臓に突き立てた。

「大智っ！？なにをやってんだ！！」

オレの行動を狂気と感じたのか隆盛は戦戦兢兢となる。確かに端から見たら気が触れたとは思えないが、これは魔を祓うための最終手段だ。この剣で傷ついても、食らった霊力でオレの霊力が細胞の異常活性を促し瞬時に傷が塞がる。死ぬほど痛いけど。どの道死にそうだし。だが痛みで気絶してしまえばそれでお陀仏になっしまう。

「ひっ　　ひゅあ……はっ　　はっはっのうまく……さん……はっ」

くっ 苦しい。だっ だめ　　。

「がんばれっ！」

隆盛がオレの震えが止まらない剣を握る手に、上からそつと手を被せる。泣いている。それでもその目はずっとオレのことを見ている。戦っているオレを応援してくれている。まるで父さんみたいに

「さんまんだ　ばざらだん　かん　我があ力あ解きい放て」

ぎゅりゅ

剣を心臓から引き抜こうとするが力が入らない。それを察してか隆盛が力を貸してくれた。

引き抜いた瞬間、刃が金剛杵の中に引っ込む。それと同時に心臓の傷は塞がり、地獄の苦しみも一瞬のうちに引いていった。

「大智。大丈夫か」

「ああ。もう大丈夫」

「このやろっ。無茶しやがって」

隆盛がオレの頭を抱える。分厚い胸板がむさ苦しいが今だけは我慢しよう。

「わっ私……」

風紗が全身血塗れになっているオレを見て顔面蒼白になっている。

ここにきて初めて自分のしたことの大きさに気付かされたかのように
だった。

「……………」

そんな風紗に風音が近付く。

スパンッ

風音が思いつきり風紗の頬を叩いた。それまで一度も妹からそんなことをされたことがなかったのだろう。風紗はボロボロ涙を流しながら謝り始めた。

「ごめんなさい……私、ごめんなさい」

「どうして　　どうして相談してくれなかったんですか？」

風音も泣きながら姉に訴える。

「お互いたった一人の家族じゃないですか。一言相談してくれれば、私だって……」

「ごめん、風音」

姉妹は互いに抱き合いながら泣いた。オレは体を起こして寺に戻ろうとする。

「待つて」

風紗が呼び止めてくる。

「私のしたことが許されることじゃないと思うけど。でも、私」

「許すか許さないかは風音や勇太が決めることだ」

オレは少し突放したような云い方をした。疲れ果ててたのもあるけど。

「……大智……………」

そんなオレの肩を隆盛が支えてくれる。

「風音の云う通りだ。辛いなら、助けてほしいなら誰かを頼れ」

「えっ？」

「うちに　　うちの寺に来い。不動尊は頼ってくるものは拒まん。境内で寝泊りしてたらさすがに呪いも封じれるだろ。幸い部屋は腐るほど余ってるしな」

「お姉さまっ！」

風音が喜びの声を上げる。風紗は頭を垂らして呟く。

「ありがとう」

感謝の言葉はいつ聞いても気持ちがいい。

自分にできることなんてそれほど大したことじゃないし、限界もある。ただとできることに全力でぶつかって、感謝されたりするから、ああ、またがんばろうって気持ちになれるんだ。

そうだろ？父さん。

5

その後、風紗は勇太と母親に土下座して謝った。始めのうちは戸惑っていたようだったけど、彼女の境遇に同情の余地があると婦人は謝罪を受け入れるという手紙を後によこしてくれた。

でっ肝心の風紗はというと、

「いったい何年ほったらかしてたのよ！」

本堂を隅から隅まで掃除するよう云い付けると文句ぶうたれながらも結構楽しそうに掃除している。風音や隆盛も手伝ってくれてるし。

「仕方ないだろ。今まで人手がなかったんだから」

「男の人が一人暮らしすると大抵部屋が汚れていることが多いそうですね」

風音。やっぱ慇懃無礼だぜ。

「きちきち動け、日が暮れるぞ」

オレがみんなに発破をかけると隆盛が傍に寄ってきた。

「はは、なんかよかったな。賑やかだし」

「ああ」

「でも正直、大智が風紗のことを受け入れるとは思わなかった」

オレが人間として成長してくれて嬉しいみたいな調子で微笑む隆盛。なんか、失礼くない？それ。

「まっ。オレもこんな力持って生まれたわけだし、風紗の気持ちかわからなくもなかったからな」

あのと看、流れてきた風紗の記憶。あんなもの見ちまったらほつとけるわけないじゃないか。

「そうか」

隆盛がオレの頭をくしゃくしゃと撫でてくる。だから子供扱いすんなよな。

「まあ、あれだ」

オレは顎に手を当てて云う。

「蛇の道は蛇つてな」

「なんかカツコつけてるけど、微妙にことわざのニュアンス間違ってるぞ。それを云うなら同病相憐れむだ」

「うっ……」

赤っ恥じゃんオレ。まっまあ終わりよければ福来たるってことではないや、全ては口マだったけ？

とにかくまた、どこかでご縁があれば。このオレ、不破大智の呪われ屋をよろしくっ！

// C u r s e d x B l e s t //

独りぼつちの夜軍 ナイトレイバトル

暗がりに染まりつ気付いた

強さと重さと

胸に仕込んだ手鏡に ハンドグラス

映り込んで追い込んでゆく

心の脆さと

腐れかけてた

私の声、私の頬、そつと

触れて撫でてる小さな手を感じるわ
罫^{ひび}の数だけ
理由^{わけ}を聞いて、框^{わく}を取ってくれた
あなたの傷にも
救いが来る日を願っている

M y m i n d n e e d e d i t .

リバ ス制作委員会

著・みゆ貴茂

シ ク エ ンス

御陰邸 。

「あはっ……」

部屋でノ トパソコンに向かっていた勇太は、その愛らしい顔に
不似合いな笑みを浮かべて呟く。

「ちよつと予定は狂っちゃったけどね」

勇太はチャットをしていた。

ディスプレイにも同じ言葉が書込まれる。

『乾闥婆 ちよつと予定は狂っちゃったけどね。でも、超めずらお
もしろい呪いに出くわすことができたし、まっいつかって感じ』

『竜 よかったねえ』

『緊那羅 乾闥婆さま無敵っ 』

『乾闥婆 これで暫らく退屈しないで楽しめそう 』

部屋の戸が叩かれ、母親が入ってくる。

勇太はさり気ない動作でノートパソコンを閉じ、母に無邪気な表情を覗かせた。

「勇太、まだ起きてたの。まだ、本調子じゃないんだしそろそろ寝なさい」

「うん」

時刻は九時を回っていた。母は勇太の首筋にお休みのキスをして部屋から去った。彼女を笑顔で見送っていた勇太は、戸が閉まるのを待つてパソコンを開く。

『もう寝なきや。じゃあまた』

勇太はチャットを終え、立ち上がると電気を消して窓の前へ。

「呪われぼっち 闇に染まりて、闇を断つか」

勇太は目を瞑る。

そして陽気な歌を口ずさんだ。

「そんなこと思ってから今夜も眠れない」

つづく

ヒロトカゲゝ腐れかけの肉ゝ

行き過ぎた科学を人は「魔術」と呼んでいた

業深き「魔術」を「呪い」と忌み嫌った

「進化の指針」

彼のものからの

墮落故にと

知る由もなく

ただただ怯えボクらは「呪い」を拒み続けている

たった一つの外典

「呪われぼっち」を除いて

「SALVATION」

闇に魅せられたときに呪われフエイテッドて

抜け出すなんて一人じゃできズず

彷徨い続ける道は孤独ロソリーデイスな日々

きみの視線、妙に気になつて

煩わしい日々の中

雑音に笑えるのは

絆の糸、紡ぐから

縋り付くみたいに

傷ついて、涙、溢れたって
きつとかまわない

魂の叫び、渴れ尽きるまで進もう

目の前に光明、ホーリーライトもつと光明ホーリーライト

罪に溺れずに

この先に望みえる空、エイザー蒼天

T h a t I a m o f t h e t r i b e .

腐れかけの肉

1

「ただいまあ」

「おかえりつ てなにその荷物っ!？」

買物から帰ってきたオレと隆盛。

居間で寛いでいた凧紗と風音は隆盛の抱えている荷物の量に仰天する。紙袋六つに箱が数個。

「大智はあプチ買物依存症だあ」

戯けているがどことなくため息混じりに云う隆盛。

「いいじゃん。自分で稼いだ金なんだし」

「そりやそうだけど、一日で三〇万以上使う高校生ってどうよ」

『三〇万……』

見事にハモる双子。

うう……そりやさ。自分でもちよつとは異常かなあと思うけど、でも月に一回だけって決めてるし、頑張っつて日々生きてるご褒美だもん。

「あつそうだ。二人にお土産買ってきたんだよ」

啞然としている双子に、取り繕うようにオレは云う。

「えっ!お土産?いいの!？」

「ありがとうございます」

二人は驚きつつもとても嬉しそうだ。
よかった土産買ってきて。こんなに感激してくれたら、こっちも嬉しくなる。

「ありがとう……て」

渡した紙袋を開け、その中身を見て風紗は絶句する。

「このジ　ンズ　　ドル　バ……」

そして風紗は風音の方を見て、

「　　ラのスカ　ト　　二つ合わせたら十万くらいするんじゃない……」

「えっそんなにっ!？」

姉の言葉に風音も驚愕する。

「そんなにしてねえって。安売りしてたから二つでせいぜい五万くらいだろ」

「ごっ　五万　　」

「二カ月は生活できますね」

うゝみゆ。どうも金銭感覚のずれが　　。

「うれしいけど　　」

「いんですかね」

戸惑う二人に、

「いいの、いいの。大智は買物してばあって金使っのがストレス発散なんだから」

と隆盛。まあそれはそうなんだが、お前の科白じゃねえだろうよ。
「でも、ほんと。気にしないでいいぜ。恐縮させるために買ってきたんじゃねえし」

オレの言葉にそれでも渋い顔をしてる風紗と風音。

うゝ値段なんか見ずに適当に買ってきたんだが失敗したかな。

「そうはいつでもねえ。ただでさえ、法師さまには居候させてもらってるわけだし」

「それに隆盛さんのお父さまには私たちの後見人にまでなっていた

だいて 至れり尽くせりって感じで申し訳ないです」

「いいの、いいの。とさまは不破家の雇われ弁護士だぜ。黎須さんの遺産ふんだくってんだから」

「……………」

恐縮する双子に隆盛はカラカラと云い放った。

それでオマンマ食わせてもらってんだからちつとは謙虚に生きろよ、隆盛。

「でも、まあホントありがとね法師さま。それにしてもサイズぴったしだけど、よくわかったね」

「ああ なんか隆盛が知ってた」

「えっ？」

隆盛に疑惑の目を向ける風紗。隆盛はピ スをして云い放つ。

「はっはっはっオレの眼力も伊達じゃねえ。二人とも上から80・58・84だ」

「なっ!？」

飛び出してきた数字に風音はきよとなり、風紗は顔を紅潮させ怒鳴る。

「何を根拠にっ! 風音はどうかしないけど私はもつとあるもん」
何が?

「ははっ見た目はな。そりゃあパットを二つも」

「他人のトップシ クレットをっ!」

風紗の放った右ストレートが隆盛の顎にクリ ンヒット。

「妙なスキルで曝すなっ!」

「うげえ うげえ うげえ」

おおっ! 長淵キツクの嵐っ! 自業自得だ、隆盛!

「それで大智先輩は何をお買いになっ たんですか？」

「っ!？」

風音、自分の姉が繰り広げる目の前の惨劇を無視して別の話題に移るかよ!

まあ気持ち分かるけど。このさい、オレも風音に乗っかって脳内

から排除しよう、このドメスティク・バイオレンス。

「ん」とゲムとお　『世界　車窓から』のDVD　BOXに
い　」

「『世界の　窓から』の　そっそんなものが……？」

「冬物の服いっぱいにいGパンでしょ」

「ほんとにいっぱいですね」

「あっほらほら見て見てっ！　ク　ム・ハ　ツの新作プレス」

「へえ意外。法師さま、そんなのいつもしてるっけ？」

いつのまにか暴行が終了していて、話に加わってくる風紗。

よっよかった……。また、この家で人死に出るかと思っただぜ。

「大智は買った端からすぐに飽きて人にやるからな」

ホント頑丈だなあ隆盛。ケロっとしてやがる。

オレだったら最初の一撃で三途の川を飛び越えていただろう。

「それはそうと大智。明日、体育祭の全体練習だからな。体操服ちやんと用意しろよ」

「……体育祭の練習……」

「ああ。それなら私が洗って干しときましたから」
風音が云う。

「そうそう、体操服を洗濯機から出したときにですね、すごく小さかったんで一瞬縮んでしまったのかと思って焦ってしまったんですよ。でも、よくラベルを見たらあのサイズで良かったんですね」

「……」

「ははっ大智の体操服姿はそりや可愛いなのって」
「でしょうね」

「……」

あゝあ……せっかく買物していい気分だったのに　。三〇万
以上かけてストレス発散したのに　。

『体育祭の練習』

その一言で全てが台無しに。

あゝ……ユウウツ……。

＊

この世界は呪われている

どこもかしこも黒で溢れている

古ぼけた電車のホム

事故の多い交差点

夜な夜な何かが徘徊する神社の境内

墓を除けて建てたデパート

滅多に使われない教室

人の心

触れては染まり、退いては消える淡い闇

でも、ほらそつと背中を押せばそこは深淵

藻掻け、苦しめ、抜け出せず

掴んでは切れる糸を求めて

呪われる

呪われる

呪われる

「お早よう！ヒロくん」

ホム　ムが始まるか始まらないかの時間、前の席の御陰勇太^{みかげゆうた}が登校してきて僕に声をかけてくる。

久しぶりに彼の顔を見た。一週間くらい病気で休んでいたのだ。永久に来なくていいのに。

僕は腹の内をこれっぽっちも曝さず御陰勇太の挨拶に応じた。

「お早よう勇太くん。なんか病気みたいだったらしいけど、もう大丈夫なの？」

「うん。ありがとね。心配してくれて」

この顔だ。まるで処世術かのように愛らしさを研ぎ澄ましたこの笑顔に無性な厭らしさを感じる。それなのに御陰勇太はやたらと僕にかまってくるから始末に負えない。

「ねえねえ、実はねボクただの病気じゃなくて呪われてたんだよ」
「えっ！？呪いっ！」

呪い。その単語に僕は過剰に反応してしまった。御陰勇太はニコニコ顔のまま続ける。

「うん。それでね、けっこう危なかったらしんだけど、近所の寺のお兄ちゃんが助けてくれたんだあ」

「へえそうなんだ」

ちっ！よけいなことを。

それに付けても、御陰勇太に関わりたくない一心で情報収集を疎かにしたのは失敗だったな。せつかくこいつの深淵に苦しむ様が拝めるいい機会だったのに。

「近所にお被いとかできる人がいたんだね」

本心から出た言葉だった。そんな奴が近くにいたんじゃ目障り極まりない。

「なんかねえ、呪われ屋とか云ってたよ」

「ふ〜ん」

呪われ屋ふぜいか……なんとか肅清できたらいいけど。

しばらく、御陰勇太が引つきりなしに話し掛けてきて僕はそれを自動的に処理する。

そうこうしているうちに、チャイムが鳴り担任教師が教室に入ってきた。

「おうっ！勇太　もう大丈夫なのか？」

「うん。もう、平気だよ」

担任の問いにわざとらしいゼスチャで応じる御陰勇太。

どうでもいいが、この若い担任、受け持ちの生徒たちのことを名前で呼んでいる。それで媚びているつもりなのか友好を誇示しているつもりなのか知らないが、吐き気がするほど鬱陶しい。

「よかったなあ。ヒロトも心配してたしな」

「ええ」

心配とかしてたっけか、僕。担任から何か云われたりして適当に

対応したんだろうな、きつと。

なんか嘘をつきすぎたせいか、最近では口先と脳とが全然連動していないような気がする。それでも、うわの空とするには適切にコミュニケーションが取れているようで。まるで相手の言葉を処理する機関が脳とは別にある感じだ。

「ほんと！？ヒロくん？」

御陰勇太が嬉々として訊いてくる。そしてまた僕の口は勝手に動く。

「友達だもん。心配するよ」

「へへ」

僕の言葉にはにかむ御陰勇太。

端から見ればとても仲の良い親友同士に映るのか……。糞喰らえだな。

「綾菜とゆりが来てないな」

担任が出席を取り終え、まだ来っていない生徒がいるとぼやいた。

「誰かなんか連絡」

その折り、教室の後の扉が開いて問題の二人が入ってきた。

「どうした？二人とも」

「ごめんなさい。私が寝坊しちゃって」

古手川綾菜が申し訳なさそうに云った。担任は出席簿に何かを記入しながら云う。

「ん、まあいいけど。二人とも罰として、今から先生と郷土資料室に行つて次の授業で使う道具運ぶの手伝え」

「……………」

担任の言葉に遅刻した二人は何やら云っていたが、そんなこと僕の耳には届いていなかった。

郷土資料室……。

あそこは確か。

「ヒロト。すまんがお前も頼む」

「ええ。いいですよ」

担任は案の定、学級委員である僕にも話を持ってきた。
なんとという幸運だろう。

いつか何かの足しになるだろうと、面倒な役職を率先して引き受けていたが、本当によかった。

「はいはいっ！ボクもっ！ボクも手伝う」

澁刺と手を挙げる御陰勇太。

「おいおい、勇太。お前、病み上がりだし無理するなよ」

担任がそう云うと、御陰勇太は膨れっ面をして云い返す。

「えゝ大丈夫だよ。ボク、ヒロくんと一緒にいきたいもん」

「はいはい、わかったわかった。べったりさんめ。あんまりはしやくなよ」

「はい。行こっ！ヒロくん」

「うん」

ちっ金魚の糞が。まあいい、お前も僕の快樂の糧となれ。

「他の奴は静かに待ってるよ。じゃ行くぞ」

担任の引率で郷土資料室へ向かう。その道中、古手川綾菜が僕に謝罪してきた。

「ゴメンね。ぬいとりあり縫取織くん

なんか付き合わせちゃったみたいで

「いいよ、気にしないで」

バカな女だ。担任は端から僕に手伝わせる気であって、お前が遅刻して勝手に巻き込まれただけだ。それにしても哀れだな、河原ゆり。友人の遅刻に巻き込まれた挙げ句、犠牲者一号の仲間入りになっってしまったのだからな。ふふ、まあどの道おそかれはやかれの問題にすぎないけどね。

「ねえねえみんな知ってる？」

御陰勇太が口を開く。少しでも黙って行動ができなタイプだな、こいつは。

「これ噂なんだけどね、郷土資料室ってなんかお化けが出るって聞いたんだけど」

「……………」

そんな噂聞いたことがない。

そういった類の情報は聞き漏らさないよう神経を配ってるが
こいつのでつちあげだろうか？それにしても偶然すぎる。

「なんか蜘蛛のお化けらしくてえ」

「もう、やめてよ。今から行くのに」

「ええ、おもしろいじゃん。そういうの」

それぞれ、固有の反応を示す河原ゆりと古手川綾菜。それが愉快
だったのか更に続ける御陰勇太。

「それでね可愛い子供に取りついて、ムシヤムシヤ食べちゃうって
もう。そういうの口に出したらホントになるんだよ」

「恐いって思っからいけないのよ」

「ボク、可愛いから心配だな。もし襲われたらヒロくん助けてね」
「ハハ……」

ふん、寧ろ化物の加勢してやる。

「おい、お前ら。まだ、ホムルムやってるクラスもあるんだか
ら静かにしろ」

「はい」

そうこうしているうちに、郷土資料室に到着する。

そして、扉が開かれた。僕にとっては享樂の
即ち奈落の扉
が……。

「うわっ」

河原ゆりが鬱気を洩らす。

「やっぱ、お化けがいるかもねえ」

もちろん、そんなものいるわけない。そんなものはいないが
。

「バカ云ってないで、さっさと入る」

担任に急かされ僕らはそこへ足を踏み入れる。

「埃っぱ」

「それにカビくさい」

「日当たり悪いせいだね」

たしかにそこは御陰勇太の話を裏付けるかのごとく陰気な部屋だった。

見るものによつては怖気を誘う土器や土偶などの郷土品。

微かな日光に垣間見られる塵芥の舞い。

目に見えないところで大量に蔓延っているのであろうカビの臭い。だが、それだけではない。

僕には見える。この部屋に確かに存在する深淵の源が。それはまるでどす黒い水蒸気のような　煙よりも重く霧よりも大きな呪われた証し。

僕以外、誰も気付いていない。だから平気で深淵の中に身を置ける。ドブ川に潜り込むようなこの情況で、正気を保てるのはこの僕一人だけだ。

「先生どれ運ぶんですか？」

人が動けば深淵にも流れが生まれる。まとわりついては離れ、口から入れば鼻から出ていく。即ち触れては染まり、退いては消える
淡い闇。

でも、ほらそつと背中を押せば　。

「フッフ　」

僕は手を延ばし、黒い靄を驚掴みにする。
そして塗りたくろう。

僕の周りにいる愚かな輩に。

僕の快樂の餌たちに。

さあ、深淵の宴が始まる。

藻掻け、苦しめ、抜け出せず。

掴んでは切れる糸を求めて。

呪われろ　　呪われろ　　呪われろ　　。

2

「　　うぐう　　」

暑い、きつい、だるい。

なんでこんな炎天下の中、運動場でずっと体操座りなんぞさせられんならんのじゃ。

体育祭とかなくせえ、バカ。

護法天童に任せようと思ったのに、『運動不足だからちったあガンバレ』とか云われて隆盛に護符を奪われるし、いいかげんキレるぞ、オレ！

「先生っ！」

オレは立ち上がり拳手して叫んだ。それを聞き付けた担任の堤が、急いでオレに駆け寄ってくる。

「どうした、不破？お前は選手宣誓じゃねえだろ？」

「ちげえよ」

確かにそんな感じに見えただろうけど。

「オレアぶちキレたぜっ！きつい、暑い、喉渴いた。木陰で見学するからなっ！？もう」

「おい、まだ練習始まって一時間も立ってないぞ。喉渴いたんなら水飲んできていいからもう少し頑張りなさい」

諭しに入ってくる堤。うるせえ、こちとらもうそんな段階すぎたんだよ。

「いやだっ！休むっ休むっ休むっ！！」

「我儂云うな みんなだって我慢してるんだぞ！」

「うい」

怒鳴り付けられて、思わず涙が出そうになる。うぬぬぬぬ。

「だつてさあ。ホントに暑いし、きついし、オレチビだし」

「チビは関係ないだろ？」

「関係あるもん。さっきさあ、下級生に『あつ小学生が紛れ込んでるんじゃない？かわゆい！！』とかバカにされたんだぞ」

「そっそれは……気の毒だと思うが」

「うえーん、スネ毛も生えてない男子高生の気持ちなんて誰も分かんないんだあ。うえーん」

「その態度が小学生並みだぞ、不破」

地団駄を踏むオレに全校生徒の白い目が突きささる。

「くう、こうなったらあ　死なば諸共、全員くたばれっ！のうま

く　さんまん　」

「うわあ、止めるっこの腐れ坊主っ！！」

不動金縛りを使うため、印を結ぼうとするオレの腕を羽交い締めする堤。

「放せえっ！逆鱗に触れたてめえらが悪いんだ」

「誰かあ実行委員の上条呼んでこいっ！？」

「はいっ！」

（間）

「こらっ大智！ちったあ我慢しろ。つつか素人に術使おうとするなっ！！」

くっ保護者を連れてきたか　。だが、そんなことでオレの我侭は止められねえぜ！

「黙れ隆盛！金縛るぞ、こらあ」

「ちっちっちっオレに術はきかんぜよ」

「くっ」

そうなのだ。隆盛の奴、昔、オレの父さんにもらった法具やら、いつの間に彫ったのか二の腕入れてある光明真言の刺青（普段はデピングで隠してある）やらで、やたら靈的防御力が高いでやんの。ちっ、こうなったら別の方法をとるまで。

「だってさあ」

オレはしゅんとなつてみせる。

「日焼けしたくないんだもん」

『そんな理由かつ！』

オレの言葉が聞こえたほぼ全員が罵倒してくる。

違うよ。でもこう言えば隆盛は　。

「おおっ！白いのがいいぜ、大智は！！」
ほらね。

「つつわけで大智を医務テントに運びます、先生」
「はっ？」

周囲が啞然となる。

カッカッカッ！隆盛を操るなんざ朝飯前だぜ。

「ほら、おぶってやる。行くぞ、大智！」

「ハイドゥ隆盛！」

運動場を隆盛の背中に乗って駆け抜ける中

「このバカコンビがあ」

担任・堤教師の憤りとも嘆きとも取れる叫びが背後でこだました。
「ほらっもうすぐつくぞ、大智」

「おう」

「きつと、りか子ちゃんもお待ちかねだぜ」

「げっ」

忘れてた。あのハレンチ教師、渡部りか子は医務班担当だったんだ！

「ちよっ止める」

「車は急に止まらないっ！」

「いや、ちよつと　まずいつて　」

あの女に体操服姿なんて見られた暁には、確実にハラスメントだよ。セクシャルな方向にっ！

「やだやだやだ」

隆盛の頭をボコボコ殴っていると、ピンポンパンポンと校内放送が鳴り、

『二年D組の不破大智くん。至急校長室まで来てください』

と呼び出しがかかる。

「なんだろうな？」

「なんにしてもラッキ。隆盛、そのまま方向転換」
「ラジャ」

渡部りか子を回避でき、オレは隆盛の背中ではっと胸を撫で下ろした。

しかしそれが、これから起こる辛辣な事件の開幕ベルとは夢にも思わず。

あたかも、呪いの真意を思い知らされるかのような悲劇の。

＊

「いいか。これがそれまで使われていた風呂鍬で、ここの木の部分を」

一時間目の社会の授業がつつがなく行なわれている。担任が郷土資料室から運んできた道具やらを掲げて、その説明をしている。

もともと、僕から言わせれば異常は着実に進行している。即ち、資料室に共に向かった四人に擦り付けた闇の靄が彼らの中で膨れ上がっていく。

「これが江戸時代に農業技術の」

ふふふ。それにしても、学校、教室とはなんと都合のいい空間だろう。

昼間にありながら静寂が生まれえ、また単独の声が大勢の耳に届きうる。意識の一点集中。黒板に。白墨に。教師の声に。

それは力場の形成や、儀式の遂行にも似ていて。

「それでこっちの備中鍬を初めとする農具が開発され」

「あつ」

僕の前の席に座っている御陰勇太が小さく声を洩した。彼の体が傾ぐ。

そして派手な音を立て、御陰勇太が椅子から転げ落ちた。

「どうした勇太」

担任が御陰勇太に駆け寄ろうとした瞬間、

「うっがあ」

彼は胸を押さえて倒れこむ。

思わず本音が出た。

「まあ果実もそうだけど。今はそんなこと云ってる場合じゃないよね、ヒロくん」

「なっ!？」

突如、背後で声がする。驚いて後を向くと御陰勇太が怪訝そうに立っていた。

バカなっ! どうして? こいつは最初に落ちたはず。

しかし、御陰勇太の中の靄はすでになくなっていく。

「勇太くんは大丈夫なの? 倒れてたけど」

「うゝとね。消しゴムが落ちて拾おうとしたら転んじやって、頭打っちゃった。たんこぶちゃん」

「.....」

なんてことだ。御陰勇太は端から呪いにかかっていたいなかった

まさか、一度呪われたら耐性とかできるのか? 或いは、先の話に出た呪われ屋がなんらかの処置を?

いずれにせよ、なんて体たらくだ! こいつを誰よりも優先して、突き落としたかったのに.....

「うわっひつどいねえ」

御陰勇太は教室を見回し言葉を洩らす。

どういう意味だ? まさか、僕がやったことがバレてるのか?

「なんでボクたちだけ平気なんだろうね?」

「さっさあ」

素っ頓狂な御陰勇太の雰囲気。

思い過しか?

そうこう、杞憂していると教室の扉が開き隣のクラスの教師が入ってくる。

「どうしたんだ? いったい」

その教師は倒れている生徒たちに駆け寄り僕らに訊ねてくる。

「さあ、突然みんなが」

僕は怯えたように答えた。しかし御陰勇太は、

「先生、これ呪いかも」

平然と口に出す。

こっこいつ

「呪いだと？」

「うん、でもそんなことより早く救急車と人手を」

「あつ　　そうだな。呼んでくる。ちよつと待つてろ」

そう云つて教師は職員室に向かう。携帯電話を持っていなかったのか？それとも気が動転して忘れているのか？

慌てている教師の背中に、

「あと、真鍮高校に電話して不破大智っていうお坊さんに来てもらった方がいいよ」

そう御陰勇太は告げた。

不破大智。そいつが例の呪われ屋の名か。

まあいい。呪われ屋ごときにこの巨大な深淵が払えるのか、見物だ。

「なにこれ？」

いつのまにか廊下に野次馬ができていた。隣のクラスの生徒たちだ。

「うげえ」

「気持ち悪っ」

きやつらの中に不安が騒めく。

いい感じだ。教室中に溢れる靄が野次馬たちにも触手を伸ばし始める。じわじわと、和紙に垂らした墨のように。

ふふ。これでもっと大きくなる。

「らっらっらっらん　らっらっらっらん」

「？」

なに？

突然、御陰勇太が歌を歌い始める。なんのつもりだ

「思いつき駆け出してえ　大きく手を振ってえ」

場にそぐわない、稚拙で明るい歌声。

「どこまでも広がる道はあどんなところだろう」

「！？」

嘘……だろ。

僕は愕然となった。

靄が、野次馬たちに侵入しようとしていた靄が退いていく。それだけじゃない！教室中を支配していた深淵が少しずつ、少しずつ薄らいでいく。

「バカな」

僕は渴いた声を洩らしていた。

せつかく　　せかつく僕がお膳立てした享樂が　　奈落が

呪いが　　消えていく。

「悩んでてもつまらない思い切ってみよう」

ことなくそガキに。アホ丸出しで、人に媚を振り撒くしか能のない腐れに！

「そんなこと思ってた今日も眠れない」

御陰勇太が目を細めた。

勝ち誇っているように感じた。

「――」

僕はなりふりかまわずその場を後にした。

3

なんでも、近くの小学校で呪われことが起こったらしい。それでオレに来るよう要請があったとか。

オレは隆盛に負ぶわれたまま、小学校へと向かった。

現場の教室に着くと、子供たちが泣き喚いたり震えたりしているのを大人たちが懸命に宥めていた。

「あなたが呪われ屋の？」

白衣を着た女性が近付いてくる。恐らく養護教諭か何かであろう。「私は校医の隅田です。たまたま、学校に用があっていたんですが

「例によつて隆盛に云つてゐるし。」

「呪われ屋はオレじゃなくて、負ぶつてるのがそつだよ」

「えっ？」

毎度毎度、懐疑的な目が向けられるし。

「ごめんなさい、てつきり息子さんかと」

『息子さん？』

これは少なからずオレだけじゃなくて隆盛にも打撃を与えたよう
で。

「こんなでかい息子がいる年に」

「けっけっけっ老けてんだよ、てめえは」

ちよっぴり愉快。それにしても、二人とも体操服姿なのにとぼけ
た医者もいるもんだ。

「さてと」

オレは隆盛の背中の上から教室を見回す。

「その藻掻いてるおっさんと、真ん中で叫んでる女の子と、その
横でピクピクやってるのが呪われてるだろ？」

「ああ、あとの子はたぶん三人の呪いにあてられて暗示にかかった
か　とにかく、三人とも不動尊寺に運べ」

「はい」

隆盛が周りの大人に指示を出す。

「あの、暗示つて集団ヒステリ　のようなものですか？」
と隅田女医。

「たぶんな」

「そうですね　そうかもしれないですね。話によると、正気だつ
た生徒が歌を歌つたらみんな少しずつ正気を取り戻していったつて
聞きましたし」

「歌？」

偶然か？それはある意味で、適した応急処置といえるかもしれない。
い。

歌なら恐怖や苦痛に集中する意識を分散させられるだろうし、もともと言葉には力があって更にそれにメロディ やリズムを付けた歌には霊力を行使する力があるともいわれてる。

「誰がそんなことを」

「ボクだよん」

後から声がして振り向くと、そこには先日呪いから救った御陰勇太が立っていた。

「おはよう。大智兄ちゃん、ヨッ イさん」

「ちっちちつ、 ッシイじゃなくて、チヨ ボだぜ。S級海チヨ

コ」

「……………」

オレはいつまでも隆盛の背中に乗っていることが急に恥ずかしくなつて、いそいそと下りる。

「あの勇太くんどうしてここに？」

「だってボクのクラスだもん」

「……………」

ここは五年生の教室 オレ、てつきり勇太は一年生くらいかと思つてた。

「勇太くん。お兄ちゃんとミニマム同盟を組まないか？」

「はは。いいけど、数年後には脱退かな？」

ちつ。暗に『ボクはこれから成長期なのだ』と主張しやがつて「それより勇太、なんで歌つたりした？」

隆盛が訊ねる。勇太は首を傾げとぼけたように云う。

「うゝん、べつに。なんとなく。呪いだつてのは分かったし、歌とか歌つたらちよつとはいいいかなとか思つたのかなあ？」

「……………」

この子、霊力が強いだけでなくセンスもいいのか。

しかし、危ないのも確かだ。ここは霊能者先輩としてびしつと云わねば。

「みゅう、勇太くん。まあ結果、助かったけど。あんま無茶するな

よ。ほら、生びい 生ば 生びい……」

「生麦生米生卵？」

おお！勇太、早口言葉うまいな。

「じゃなくてだな、ほら 」

「生兵法は怪我の基っていいたいんだろ大智は」

ちっ隆盛に云われてしまった。

今、云おうと思ったのに。囁んでたんじゃなくて、勿体振ってたんだい！グスン。

「玄人蹴ともいうよね」

「うっ」

小学生に諺で返された。

「とつとにかく、危ないことしちゃだめ」

「はーい。それじゃあ、ボクちよつと用事あるから行くね。呪われガンバツてね。バイバイ」

そう云い残すと、勇太はとつとどっかに走り去っていった。

「変な子」

オレが眉を顰めていると隆盛がじつと人の顔を見下ろしてくる。

「なつなにな？」

「可愛さゴツツ（訳：二人とも同じくらい胸キュン）」

親指突き出してくるし。

「………」
こっこいつ、やはり変態か！？

＊

「………」
誰もいない廊下。僕は一人黙々と歩く。

騒ぎのため、こんな辺境に目を向けるものはない。幸いだった。

「ふん」

僕は郷土資料室の前で立ち止まる。

さつきまで怒りで興奮していた心も、今はすっかり朽ちていた。僕は服の袖で拳を保護し、資料室の薄っぺらい窓ガラスを叩き割った。割り方に工夫したためそれ程音はしない。

框に残ったガラスを慎重に除き、内鍵を開けて部屋に侵入する。

「ああ」

僕はその場でへたり込む。黒い靄の中に体を埋める。

心地よい。

心が闇と同化する。世界と一つになる。

「そうだ、もつと集めなきゃ」

集めて、もつと多くの場所をこと同じにしなければいけない。

そして、あいつの　御陰勇太のあの厭らしい笑みを消さなければ。

「もつとだ　もつとだ　」

床に這いつくばり靄を掻き集める。

「あえっ？」

闇が　靄が僕の体に纏はり付いてくる。心に侵入してくる。

「うつ　うつ　」

取れない　取れないよう　。

「ああ　うあ　」

呪われる　僕が呪われちゃう。

「はあ　はあ　はあ　」

気持ちがいい……。

「あん　はあん　ああ　」

腐れちゃう　心が　。

「もつとう　うはっ　もつとお　」

呪われる　呪われる　。

たとえ腐れても、それが当たり前だと思えるほどに　。

僕自身が呪われて　僕が全てを呪ってやる。

「アハハハハハ　」

この心地よさ、みんなにも分けてあげるから。

シ ケンス

呪うのが先か、呪われるのが先か。

快樂にのたうち回りながら深淵に落ちていく少年を、隣の棟の校舎から見下ろす視線があつた。

「アハッ」

御陰勇太はその愛くるしい顔に不似合いな笑みを浮かべる。

「ヒロくん　ボクがキミに付きまとうのはねえ」

勇太は舌舐めずりをした。

「ヒロくんが呪われてるからだよ。ずうつと昔からね　アハッ」
唇に付いたお気にいりのアイスでも拭うように。

その日の深夜。

御陰邸の住人はすでに寢静まっていた。ただ一人、御陰勇太を除いて。

勇太は電気を消した暗い自室で、パソコンに向かっていた。

「乾闥婆　という話。どう？おもしろかった？」

「夜叉　人を呪わば穴二つつて奴？」

「天　なんかそれダサくねえ（笑）」

「乾闥婆　ううん。ある意味では夜叉くんの云うとおりなんだ。ただ、順番が逆」

「天　つまり人を呪う奴は端から呪われていると　」

「乾闥婆　そう。もっと大きく云えばこの世に呪われていない人なんていない。命が誕生した時点で赤ちゃんは母親に括られる。質や量はまちまちだけどね」

「緊那羅　さすが乾闥婆さま　サイコ」

「天　ふーん。そんなもんかね。まっいいけど、それよりなんで乾闥婆さまは被ったりしたんだ？やっぱクラスメ　トは見捨てられない？」

『乾闥婆 はは、手厳しいな。確かに趣味じゃないってのもあるけどね。ただ、まだく金剛切り金剛ダイヤモンド・カット・ダイヤモンドを見るにはヒロくんに分があったから。それに、量より質』

『緊那羅 被えば確実にそのヒロって子の心は軋むし呪いは進行する。乾闥婆さまはじつくり一つを育てて吟味するですね』

『乾闥婆 そう。アハッ、やっぱり肉も果実も腐れ掛けが一番美味しいもんねえ』

『天 うわあゝエグ 』

『乾闥婆 アハッ、おやすみ』

勇太はそこでパソコンを閉じ、ベッドに身を沈めた。

「闇に染まりて闇を斬る呪われぼっち 闇に染まりて闇を振り

撒くヒロくん 楽しいなあ」

そして、陽気に歌を口ずさむ。

「そんなこと思ってから今夜も眠れない てか」

つづく

ヒロトカゲく尊き樹く

1

「あふう」

オレはだるい体を引きずるようにして本堂から這い出る。辺りは暗かった。夜目を凝らしながら自宅へ戻り居間にどてんと寝転がる。
「う」と のうまく さんまんだ ばざらだん かん」
小声で真言を唱えると、それに誘われるように護法天童が居間にやってくる。

「お疲れでちゅ。ご主人ちゃま」

「今、何時だ？」

「一時くらいでちゅよ」

丸一日とちよつとか 。 弱かったものとはいえ三人分を一気に引き受けたんだから上出来と云えるな。

「何か変わったことは？」

「え」とでちゅね。今日、風紗しゃんが体調悪いつて学校休んでたでちゅ」

「風紗が？」

「うん。でも、あれたぶん仮病でちゅ」

「.....」

仮病か しょうがないよな。

まだ..... 恐くてたまらないんだ。いろんなことに。時間がかかる。
「お風呂、入る」

*

なんて哀れだ御神木 。

数百年もの間、この地の人間のために御身を捧げてきた優しい優しい国つ神。それが人間たちによって汚されるなんて。

「くっはははは」

思わず笑いが込み上げてくる。寝静まった神社の境内に僕の笑い声が響いた。

「おっと　　ここは私有地だったな」

住人に目覚められては面倒だ。

「さて、解放してあげよう御神木」

僕は汚された神の木に手を延ばす。ぶっとい幹、いっぱい黒い靄が、深淵の源がつまっている。

「呪え、お前の苦しみに気付かなかった全てのものを　　なにっ！？」

争つか　　この僕に……。

黒い靄を奥底から引き出すことには成功した。だがそれを御神木から抜き出すことができない。

まあいい。そんな、汚れきったその身でどこまで耐えられるか、見物だな。

2

「そついえばさあ」

昼休み。鬼灯姉妹と隆盛とオレの四人で学食を囲んでいると、風紗が思い出したように口を開いた。

「不動尊寺って、寺でしょ？なんで、階段下に鳥居とかあんの？」

「……………」

風紗の問いにオレは言葉を失った。

そついえばそつだ。うちって一応、寺なのになんで石段の下に鳥居があんだろ？あそこもオレんちの敷地だよな、確か。

「大智、知らなかったのか？」
と隆盛。

「なっ？じゃあ、お前知ってんのかよ！？」

「知ってる。てか、小学校の頃、不思議に思ってた黎須^{くろす}さんに訊いた」
「……………」

つまり、今まで不思議に思わなかったオレは小学生以下と？

「普通の人なら疑問に感じますよね。口に出すか出さないかは個人差ありますが」

くそお風音 折目正しく追い打ちかけてきやがる。

「で？なんなわけ？鳥居の理由」

「え〜と、たしかなあ」

隆盛はおやつフランスパンサンドを頬張りながら答える。どうでもいいが、その前に四人前の定食平らげといてよく入るな。

「廃仏毀釈って知ってたか？」

「ええ、まあ」

「それほど詳しくはありませんが」

「……………」

なにそれ。知らない。

オレが黙っていると、

「たしか日本史で習いましたよね」

おのれ風音 生温い笑みで優しくバカの烙印押し当ててきやがる。

「みゅ〜う」

オレが打ち拉がれていると、横の隆盛がオレの頭をポンッと叩いて云う。

「風音ちゃん……………ほら、大智だし」

「そ……………ですね。大智先輩ですし」

「知らなくてもしょうがないよね」

「……………」

なんだよそれ。その人だからしょうがないって、どんな理屈だよ。うえ〜ん みんながオラをバカにするじよ〜。

「……………」

いじけてテ ブルに『のノ字』を書いていると隆盛が優しく頭を撫でてくる。

「いじけるなよう。お兄ちゃんが掻い摘んで教えてやるけん」

カカン（拍子木）

また、人のこと子供扱いするし。てか、拍子木どこからだしてきた？

「Anno・Domini1868／黒船来航より十五年」

洪い声だして語り始める隆盛。なんか、アニメのオ プニングみたいだ。

「世は徳川体制より明治という新しい時代へと移り変わっていた。そんな中、維新政府の内部に天皇親政・祭政一致を主張、神道の国教化をはかる動きが生じ、神仏分離令が出される。これは、それまで神仏習合 つまりほぼ仏教とごちゃ混ぜのような状態だった神社から仏教色を取り除くようにとの命令だったのだが、地域によっては曲解がなされ寺院・仏教的文化財などの破壊運動が勃発してしまう。これが世にいう廃仏毀釈であった」

「……………」

うつわ、話難しすぎて途中で眠ってしまうかと思ったあ。それにつけても、隆盛なんかすごすぎくない？

「でっ鳥居は？」

風紗の催促にがらりと雰囲気を変えてくる隆盛。

「さあてさてさて、お立合い」

なんか、紙芝居屋みたいだ。

「そんな時代の烈風に、我らが不動尊寺も例外はなく巻き込まれようとしていた次第でありまして（カカン 拍子木の音）時の和尚はどうしたものかと考え込んで、坊主頭に人差し指クルクル……ポクポクポクポクチュン」

一休さんかよ！？

「しかし、何にも思いつかない。そこに和尚の幼なじみサヨちゃん登場」

だから、一休さんかよ!?

「『あはん、寺がダメなら鳥居を立てればいいじゃない!?!』」

サヨちゃん 何故、ちよつとマリ アントワネット風?

「かくして、サヨちゃんの助言に従い和尚は鳥居を立て『ここはスサノオを祭る神社だ』と云い張りことなきを得たそうな チャンちゃん」

「なんか、すごいんだかアホなんだか分からない話ね」

アホなのは隆盛の脚色のせいでは?

「しかし、ほんとにそんなことで難を逃れられるもんなんでしょうか?」

たしかにかなり胡散臭いな。

「まあ百年以上も前のことだからなんとも云えねえが ともあれ、その後政府は国民教化に失敗、運動の嵐が去るも『まあ、鳥居もめでてえもんだしそのままにしとくか』と今日に至ると」

「嘘臭い話ねえ」

「今思うと黎須さんに担がれたのかもな、オレ」

だろうな。たまあに虫も殺さぬ顔して、冗談云ったりするから始末に終えなかったもんなあ 父さん。

「それにしても、紛らわしいですよね」

「いんじゃねえの」

オレは食後のアセロラジュ スを啜りながら云う。

「日本人なんてほとんどが無宗教みたいなのもんだし……願いが通ればなんでもいいみたいなの 」

「けしからんっ!」

突然、背後より怒鳴り声がある。振り向くと知らない女生徒が一人、怒りの形相で立っていた。

「それが仮にも聖職者の言葉かつ!?!」

長身で、少しきつめだがかなりの美人。故に見下ろされているだけで萎縮してしまう。てか、なんでオレ、見ず知らずの人から怒られてんの?ぶっちゃけ、いじめ?

「不破大智　よもや、貴様のような軟弱そうな男とは……」

「あのどちらさんで？」

オレは、二個目のフランスパンサンドに熱中している隆盛に助けを求めるべく、彼の肩を突つ突く。隆盛はパンを啣えたまま振り向き（認めたくないが、座高が恐ろしく違うためフランスパンはオレの頭上を掠める）、

「うおおっ、C組の高橋千佳子じゃん」

「知ってるのか？」

「ああ。ほら、近所にある玉串神社の娘」

口の中もぐもぐさせながら説明する。

「神社の？」

神社の娘だからオレのこと怒鳴るのか？これもさっき云ってた廃仏毀釈の一種？（百年以上前の話というのを忘れている）

「いやあゝ近くで見ても美人なのな。巫女さん姿が萌えるって評判で」

「貴様っ！私を愚弄する気かっ!？」

隆盛の言葉に牙を剥く高橋。

「してない、してない。綺麗だって讚めてんだよ」

「それが愚弄してると云うのだっ！未熟なれど神事に仕える姿を美人だの萌えるだの綺麗だのとっ!！」

怒っている割に隆盛の賛辞を全て記憶しているとは、あながち満更でもないとみた。

「貴様のような不良にそんな目で見られると思うと虫酸が走る」

「不良？……オレ、不良かな？」

不安気に訊いてくる隆盛。

不良の定義はよく分らんが、まあ事情はどうあれ刺青してる高校生は世間一般では不良だろうな。普段はテ　ピングで隠してるとはいえ。それに。

「銀髪っ！カラコン！不良以外のなにものでもなかるうがっ!？」

「いや、これ自前……」

隆盛はハ　フ・アンド・クオ　タ　（バタ　入りマ　ガリンのこ
とではない）。母親がどうかの白人種で父方の祖父もロシア人だっ
たか？顔はほとんど日本人だからよく誤解されるが、銀の髪も青い
瞳も昔から。

因にオレは純粋な日本人だが不動尊の封印が解けて自身の霊力が
解放されると、瞳が赤く光って瞳孔が変形するらしい（もしかして
先祖が妖怪とかだったりなんかして……）。

そう云えば鬼灯姉妹も茶髪で色白だけど、出生はさすがに訊きず
らいな。

「おまけにチャラチャラ飾りつけよって」

それは父さんの形見……。

オレは隆盛に目をやる。

彼の顔が　。

「校則違反以前に　」

「ほざいてんじゃねえぞっ！」

ガシャン

ブチキレました……オレ　。

目の前にあったトレイやらなんやらを弾みで床にぶちまける。飲
みかけのアセロラジュ　スが零れ床に広がっていった。

赤色　　オレの怒りみたい……。

「人の事情も知らねえで　」

「……………」

高橋千佳子が表情を崩さずオレを見下ろしている。隆盛は目を伏
せた。

辺りが静まり返り、他の奴らの視線が集まる。

居たたまれない気持ちになつて、オレは走つてその場を後にした。

放課後。

その日の午後は体育祭の練習だった。実行委員の隆盛とはあれっ

きりで。

「大智。おいてくなよ」

下駄箱で下履きに履きかえていたら、隆盛が駆け寄ってくる。

「お前、実行委員があるんだろ？」

「式神代行ぶっちぎりっ！」

腰に手を当てふんぞり返る隆盛。何を、威張ってるか知らないが、だめだろそれは？

「いいのかよ？」

「いいの、いいの！やるべきことは全部すましたし。ハッ！オレっ
てばもしかしてスペシャル優秀なのではっ！？」

「はいはい」

オレは適当にあしらい歩きだす。隆盛は慌てて靴を履きかえ後に続いた。

しばらく沈黙が続く。よそよそしい空気が流れていた。あるいは
オレ自身が壁を作っていたのかもしれない。

人通りが途絶えたところで隆盛が口を開いた。

「ありがとな。大智」

「……………」

ざらつとした気がした。

背中越しから聞こえてくるそれは本心からのものだと伝わってくる。

お前にそんな言葉、貰う謂れはない。

「何が？」

わざとらしく云ってみせた。

「さっきのこと……オレのために」

「自惚れるなよ」

オレは早口で答えた。

「あれはオレんちの法具をあの子がバカにしたからであって、断じ
てっ　　うわっ！」

「うん？」

隆盛の方を向こうとオレが振り替えると、問題のあの女、高橋千佳子がこっちに近付いてきていた。

高橋は身を退く隆盛の横を通り越しオレの目の前にやってくる。長身美人なだけあってやっぱりちよつと恐い。

「なっなんなんだよ？」

さつき怒鳴った仕返しにきたとか？

オレは怯えながらも必死に虚勢を張る。

「あれはお前が」

「悪かったな」

「へっ？」

突然の謝罪。表情は堅いままだけど。

「すまなかつたと云っている。さつきは少々頭に血が上がっていてな、愚かしい発言をしたと反省している」

「……………」

なんか　すごいぞ、この女。普通、自分が間違っていたことに気付いてもこんな風に撤回できるものではない。オレ、謝ることすら苦手だし。君子なんたらかんたらってこいつみたいなことなのか？

「お前の云うとおりだ。事情も知らずに見た目や表面だけで判断するべきではなかった」

「はあ、まあいいけど」

「そっちの　えっと」

高橋は隆盛の方に向き直り、暗に名を訊ねる。

「隆盛だ。上条隆盛」

「そうか。すまなかつたな、西郷どん」

「……………」

一瞬固まるオレと隆盛。

ギャグのつもりか？それにしても、無表情だし。いや、でも……。あっえっと、気にしてないでござすよ」

隆盛の中に流れるお笑いの血（？）が辛うじてノリで応える。

「ふっ」

鼻だけで笑った。やはり、ギャグだったかよ。なんか、すごいぞ高橋千佳子。

「えっとそれで、なんか用なのか？」

「私の父がお前に用があるそうだ」

「父？」

玉串神社の娘の父となると。

「神社の神主だ」

「神主がオレになんの用？」

「仕事の依頼だ」

「えっ？」

「呪われ屋　それがお前の仕事だろ？不破大智」

そう云うと、高橋千佳子は歩き始める。

「ついてこい」

「あっああ」

神社の神主が寺の坊主に仕事の依頼？

ミステリアス　これも、廃仏毀釈の一種か？（意味不明）

「ご苦労でした。千佳ちゃん　もう下がっていいですよ」

「はい」

高橋千佳子に案内され、神主さまが待っていた客間に通される。

娘は深々と頭を下げ部屋を後にした。

「さて」

この神主さま、高橋千佳子の父とするにはずいぶんお年を召しておられるような気がする。養子縁組か何かなのだろうか？

「ご足労頂いて誠に申し訳ありません、法師さま。恐れながら、私が当神社の神主、高橋十蔵と申します」

神主さまは控えめな、それでいてはつきりと耳に届く声で云った。しかも、オレの目を見て。初対面で隆盛とオレとを間違われないの

は珍しい。

まあ、この神主さまの霊力を考えれば見分けがついて当然といえ
ば当然だが　こうして面と向かっているだけでこの人が徳の高い
祠官だということが分かる。

「自分は不破大智です。不動尊寺の管理をしておりますが、正式な
仏門というわけではなく、一介の呪われ屋です。こっちは助手の上
条隆盛」

「どうも」

隆盛はさつきからそわそわした感じで、気の抜けたあいさつをか
ます。

神をも恐れぬ奴め！

「本来なら私から出向くのが礼儀」

申し訳なさそうに云う神主さまにオレは手で制する。

「いえ、今云ったとおり自分はそんな立派なものではないですし

それに仕事ならどんなところでも出向きます」

「恐縮です」

「それをふまえて申したいことが　お見受けしたところ、神主

さまのお力は自分より優れていらっしゃるか。果たして自分が役
に立つかどうか」

「御謙遜を」

そう云うと、神主さまはおもむきある皺の一本一本を柔和に深め
る。

「力の量、重さ、各々違いはあれど、上質なるは得難く尊きもの」

「.....」

まあ、そうかもしれないけど　讃められちゃった？

「それで十蔵さん、用向きはなんですか？」

きよろきよろしていた隆盛が本題を催促する。なんか、不躰な感
じ。

「この神社で御祭神とさせていたただいております真榊の尊
つまり、御神木の榊が枯れてしまったのです」

「なっ！」

驚愕する隆盛。

「いつですか？」

「今朝、娘が発見しました」

「まさか」

何をそんなに驚いてるんだろう。

「もう、秋ですし　少し気が早くて枯れたんじゃない　て……」

「……………」

神主さまと隆盛が絶句している。

あれ？オレ、なんかまずいこと云っちゃった？

「あつあの」

神主さまの額に脂汗が　。

「大智……」

隆盛が小声で云う。

「榊つてのは常緑樹　つまり一年中枯れない木の総称だ」

マジ？

「アハハハハ、冗句です冗句！イッツア仏門「冗句なんちって」

「さっき自分で仏門ではないとか云ってただろ？」

黙れ、隆盛。

くそうく、またしても赤っ恥を　。普通知らないって、そんなこと。いいじゃん、知らなくても生きていけるしさ。

生きることは恥をかくことだ！（大智、魂の言い分け）

「そっそれで　枯れたって云うのは病気とか寿命とかじゃなくて？」

「はい、ご覧になってください」

そう云って神主さまは立ち上がった。

「こっこれは　！」

オレは驚愕で思わず後退りする。

オレの両腕なんかじゃ到底足らない巨大な幹。元の姿はさぞや立派な御神木だったのであろう。それが今やみるも無残に枯れはてている。

そして強大で悍ましい邪気が蠢いている。辛うじて、御神木の靈力でそれは押さえこめられているようだが。

「こんなもの、もはや呪い云々の騒ぎじゃないですよ」

オレは呟いた。

「こんなもの一朝一夕でできる代物じゃないはず。気付かなかったんですか？」

「お恥ずかしながら 今日、この枯れはてたお姿を拝見するまで……」

「たぶん、御神木そのものが邪気を封じてるからだ。だから、大智だつてこんなすげえ邪気があるのに目の前に来るまで気付かなかっただろ？」

そう云うことが。隆盛は恐らく薄々感じていたんだ。だからこそ、さつきからどうも落ち着きがなかった。

「いったいどうして？」

「近付くなっ！」

原因を探るべく御神木に寄ろうとしたオレを隆盛が制する。

「あてられるぞ」

「でも」

「オレが調べる」

そう云つて隆盛は二の腕のテ ピングを剥がし、真言の刺青を曝す。

そして右手を翳した。

「光明真言五色光印か……」

「おん あぼぎゃ べいろしゃのう まかばだら まに はんどま
じんばら はらばりたや うん」

隆盛の靈的防御力がどんどんと高まっていく。凄いぞ これ
も刺青の効果なのだろうか？

隆盛はじりじりと御神木に近寄っていく。

「くっ」

途中、隆盛の顔が苦痛に歪んだ。高度な結界並みの防御力を発揮していても、この邪気を完全に防ぐことができないのか？

隆盛が御神木の幹に手を触れた。ジュツと何かが焦げるような音がする。

「無理するな隆盛！」

「しっ！」

隆盛は空いた手で黙るよう口到手を当て、徐に顔を幹に近付ける。

「これかっ！？」

そう唸ったかと思うと、バックステップで御神木から飛び退く隆盛。

「大丈夫か？」

「原因が分かった」

「なに？」

「本当ですか？」

オレと神主さまの問いに隆盛は重厚に頷いた。

「ああ、原因は丑の刻参りだ」

「なんだって！？」

丑の刻参り　丑の刻に五寸釘で藁人形を打つ。あるいは日本で最もポピュラ　な呪いの方法かもしれない。

それがどう関係しているのか。

「この御神木で恐らく万に匹敵するほどの丑の刻参りが行なわれている。釘穴があった」

「なっ！」

「お前も知っての通り丑の刻参りなんてそうそう成功するもんじゃない。だが、微かなりとも怨念だけは釘なんかに入められているわけで、その念が少しずつ少しずつ蓄積していったこんなことになったんだ。これまでは御神木の霊力で押さえられていたが、なんらかの理由か　あるいは御神木そのもののキャパを越えたかで

「そんなっ！神主さまは、丑の刻参りが行なわれているってことを
ご存じでらしたんですか！？」

オレが詰問すると神主さまは眉間に皺を寄せ目を瞑る。

「お恥ずかしいかぎりです。丑の刻参りが頻繁に行なわれているこ
とは薄々感じておりました。これも、身内でやっているような小さ
な神社ですので夜警にそれ程尽力を注げず。警察の方々に警邏をお
願いしたのですが、それでも後を絶たなかったようで。しかし、ま
さかこんな自体を招くとは」

「……………」
神主さまは苦虫を噛み潰す。

「たしかに丑の刻参りでこんなことが」

もともと神社は鳥居などの結界がある故、丑の刻参りなどよほど
戦闘に特化された霊力を持つものでないと成功しないだろう（真に
正式なやり方の文献なんかほとんどないだろうし）。それでもまこ
としやかに語られている伝説が人々の怨念を駆り立て御神木を枯ら
してしまうはめに。

「くっなんてことだっ！こんな立派な 何百年もみんなを見守
ってきた御神様が……………」

「大智 こいつはいくら何でも無理だぞ」

「分かってる！」

こんなもの呪咀移しなんかしたら、呪い封じをする間もなく一瞬
でオレなんか命を落としてしまう。いや、それだけで済むならまだ
いい。下手をすれば、怨念がオレの体を食い破って町中に広がって
しまうかもしれない。

「……………」
なんとかならないのか。こんな素晴らしいものが朽ちるの
を黙って見てるしかないのか？

降魔の利剣で いや、駄目だ。アレは邪気だけでなく不動尊
以外の霊力なら全て喰らい尽くす代物。斬ったら御神木の霊力も根

こそぎ喰らってしまう。

「……………」

どうにもならないのか。

「隆盛」

「この御神木はもう駄目だ。徳の高い祠官を集め然るべき儀式、更に結界を何重にも張り燃やしてしまうしかない」

「そのようにさせて頂きます」

神主さまは深々と頭を下げた。オレもそれに倣う。

「お役に立てませんで」

「いえ、こちらこそ不快な思いを」

「結局、役立たずか？」

高橋千佳子だ。

制服から巫姿になっている。少し離れたところから蔑みの視線をオレに向けていた。

「ふん。呪われ屋などと大層な名目もただの大風呂敷」

「千佳ちゃん、失礼ですよ！」

「ちっ」

高橋千佳子は舌打ちをして走り去っていった。

「申し訳ありません」

「いえ」

彼女の云ったことは本当のことだ。

「あの娘にとってこの御神木さまは親のようなものでして、それを失うことに混乱を押さえきれないのでしょう」

「親ですか？」

「はい。……お察しの通り、私は千佳子の本当の親ではありません」
思った通りか。

「千佳子は今でこそ普通に暮らせるようになっておりますが、子供の頃は持つて生まれたESPを制御する術を知らず」

「……ESP……」

PSPはプレイ・ス ション・ポ タブル。GPSはカ ナビ。

「大智」

隆盛が腰を屈めて耳打ちをしてくる。

「ESPつうのは超感覚的知覚 テレパシ とか靈感とかのとだ」

「……………」

大きなお世話、ありがとう。

「その能力のため、両親から遠い血縁である私どものところへ」

捨てられた子供か 。

「気を付けて接していたとはいえ、本当の両親がない寂しさはなものにも代えがたいものなのでしょう。その寂しさをこの御神木さまが語りかけて慰めてくれるのだと」

「そうですか」

胸が潰れるような気がした。

「さっきの話、本当かな？」

帰り道。先を歩いていた隆盛の背中に訊ねた。隆盛は立ち止まり振り返る。

「話って？」

「木が親 語りかけて慰めてくれる」

「うーん」

隆盛は少し考え込んでから云う。

「色んな可能性があるが、最近の研究では植物にも感情があるっていうし、あれだけの霊力を持った御神木だ。知恵があっても不思議じゃない。千佳ちゃんは特殊なESPがあるわけだし、その声を聞き取ることができるんだろ？まあたぶん、そう云うのが神様とかシヤマンとかの正体ってことだろうさ」

だったら 。

「親だな それは……。親なら救いたいだろうな。何に代えて

も。どんな代償を払っても」

「……………」

隆盛は応えない。ただ真つすぐオレを見下ろしている。

「優先順位とか云うのか　　そういうの」

いつときの静寂。

やがて、隆盛が口を開く。

「何かをすれば、誰かはそれに共感し、誰かは反感を覚え、誰かは何も感じない」

当たり前のことだけど　　。

「真理だな……………」

「人はみんな大人になる。大人つてのはそういうことを考えながら選択して生きていく。たとえ後悔しても、どれが後の最善なのかを考え続けて　　」

オレは隆盛から目を逸らした。そして、相手に聞こえるか聞こえないかの小声で呟く。

「お前は何よりもオレの最善を選んでは。自分のことよりも　　」

「……………」

それは何より父さんの意志を尊重しているということ。

オレの意志よりも　　。

3

「……………」

何もできないのか？何かないのか？あの御神木を救う方法が　　。

眠れない。

オレは深夜テレビを付けっ放しで、居間の畳の上に寝転がっていた。

「うん？」

誰か二階から下りてきた。居間にやってきたが、こいつはどっち

だ？さすがは一卵性、見ただけじゃあ区別つかない。

「あら法師さま、まだ起きてたの？」

風紗か。

「お前こそ」

「ちよっとお腹空いちやって。夜食作るけど法師さまも食べるでしょ？風音のよりはあれだけど、それなりに美味しいわよ」

「ああ」

生返事する。

ほどなくして、風紗が焼きうどんを作って持ってくる。それは、彼女の云う通りそこそこ美味しかった。

「ご馳走様」

「御粗末さまです」

風紗は皿を流しに持っていくと、また戻ってきて居間に座り込んだ。

いつときの間、二人でテレビを眺める。

そして番組の切りがいいところでオレはテレビを消した。

「眠れないのか？」

「あゝ……まあ　ね」

オレの問いに濁したように答える風紗。

「辛いのか？」

「ふふ」

風紗は自嘲気味に笑って、

「まあ　布団に入ってね、目瞑って、自分の馬鹿さ加減に嫌気がさして、みんな同じよねとか強がったりして、がんばらなきゃって前向きになって、どうすればいいのか途方に暮れて、風音はともいい娘だなとか、法師さまには感謝してるとか

遠い目をしてぼつぼつ語る。

「まっ何にせよ、がんばらなきゃね」

「ゆっくりでいいからな」

「……………」

「走ったところで着くのがいいところとは限らない。歩いていれば、綺麗な景色を見ることができてできるかもしれない」

都合のいい云い分。自分は走り続けなきゃ潰れてしまいそうで怯えてるくせに。

「自分のペ スでがんばれ。お前たちがオレに嫌気がさすまでは面倒見てやるから」

「ありがとう」

風紗は俯いて囁いた。

「ねえ、ついでに訊いてもいいかな？」

「ん？」

「云いたくなかったらいいんだけどさ」

今日の昼休み……どう

してあんな風に怒ったのか」

「どうして？」

「法師さまはさ。正直我侬だけど、いつもどこかギリギリのところを弁えてる気がする。それでもあんな風に怒ったのはホントに辛かったんだろうなって思うから」

「……………」

オレは逡巡する。

そして、意を決して口を開いた。

「隆盛が付けてる装飾品、オレの親父の形見だったから。それに、アレはあいつの靈力過敏症の保護のやつだし。そういう、人のデリケートなところを刺激することに頭きた」

「そう」

風紗はほんの少しだけ寂しそうに頷いた。

「……………」

違う。それは建前だ。

風紗はそれに気が付いてる。

「嘘だ。ホントは違う」

「……………」

「ホントはあの時の隆盛の顔にすげえムカついたから」

「うん」

風紗は頷いた。今度はほんの少しだけ嬉しそうに。

「分かってたのか？」

「まあ。だって隆盛さん　普通の人はあんなとき、あんな風に笑わないもの。ちょっとだけ寂しそうで、なのに自尊心で満ちたみたい。その後すぐだったから　」

「……………」

隆盛があんな顔をする理由は知っている。というか、癖みたいなものだ。ホントに辛いくせに、我慢ができたからオレの父さんがきつと讚めてくれているのだと思い描いているのだ。

父さんの口癖　『大智を頼むぞ、隆盛』それを聞いたびに隆盛は嬉しそうに頷いていた。父さんの信頼を得ている隆盛にオレは嫉妬している。

父さんが生きてた頃も、今も、隆盛は心底オレのために生きている。父さんの信頼を得るために。父さんにもオレは嫉妬している。

「……………」

ガキだ、ホントに。

「うゝみゅ」

オレは食卓に顔を突っ伏せた。

「時間がかかるよな。オレも」

「ふふっ」

風紗は心底可笑しそうに笑った。

「お互いこれからみたいね」

「はあ」

ホントにその通りだ。

もうすぐ、父さんの命日がやってくる。

*

深夜、巫女姿の女が朽ちた御神木の前に佇んでいた。

「どうして」

巫女は茫然と苦境を口にする。

「こんなことに」

この巫女、少し変わった霊質をしている。これなら使いものになるかもしれない。

まだまだ、僕もつきに見離されていないようだ。

「もう、どうにもならないのか？」

「そうとも限らないよ」

「えっ？」

巫女は驚きを洩らす。彼女からしてみれば突然、人の声が聞こえたように感じたのだろう。僕が御神木の幹を挟んで彼女の反対側にいるから。

「誰だ？」

彼女はきよきよと声の所在を探す。

「僕が誰かはそう問題ではないよ」

「何？」

「ふん、問題なのは僕がこの御神木の救う方法を知っているかもしれないということじゃないか？」

「救う方法だと？この私を謀るつもりか！？」

さつきまで打ち拉がれていたくせに、人がいると分かったとたん冷徹となるか。ずいぶん勇ましい巫女だな。

「だとしてあなたに何かデメリットがあるのか？」

「何だと？」

「だってそうでしょ？この御神木は何もしくとも、もう朽ち果てるのみなんだから」

「……………」

何かを考えるように沈黙する。

そして、

「どんな方法だ？」

ほら、乗ってきた。

「教えてやってもいいけど」

僕は少しだけ焦らしてみる。交渉においてすぐに要求に応じるのはかえって相手に不信感を抱かせるから。

「何か望みがあるのか？」

「いや、べつに。ただ、覚悟があるのかと思って」

「覚悟だと？」

ふふ、半端にプライドが高そうな奴は操りやすいな。

「そう、覚悟。何かをなすにはそれなりの代償が必要でしょう？」

「……………」

「こと今回のように大変なことになる、やっぱりそれなりの代償が。あなたにその覚悟があるのかと思ってね」

「侮るな！不肖、この高橋千佳子、もとより半端な覚悟など持ち合わせてはおらん」

ほらね。

「ならいい。方法は簡単なことだよ。あなたがこの呪い、祓えばいいだけのことだ」

「ふん、何を云いだすかと思えば」

巫女は嘲る。

「未熟を盾にするのは恥ずべきことだが、これだけの邪気を浄化するだけの力を持っているのなら最初からやっている」

「誰も浄化しろとは云ってないよ。ただこの御神木から祓えばいいと云っているんだ」

「な！？」

「あなたはどうかやら、かなり優れた精神感應能力を持っているようだね。それを応用すれば、この御神木の意識にアクセスして邪気を封じるのを止めてもらう。それで自然と邪気は外に流れ出て御神木はいずれ自然治癒するだろ？つまり救われるってことだ」

「バカなっ！これだけの邪気が放出されれば下手をすれば町中が呪われてしまっぞ」

どうやら知識がないわけではないらしい。

「ははは」

「？」

「そう、もしかしたら町中が呪われる」

なんて素敵なことだろう。

「色んな人が傷つき、大勢の人々が不幸になるかもしれない」

「……………」

「さあ選択の時間だよ。あなたの大切な御神木を見捨てるのか
代償を払って救ってみせるのか」

夜の闇はいろんなものを鈍らせる。

そう、意志薄弱に選択を。

「覚悟を見せてみせてみるがいい」

「うつぐ……………」

巫女の体は震えている。この闇の中において見えるわけがないが、
空気を伝ってありありと感じることができる。

それだけ悩んでいる。悩んでいるということは、交渉の仕方によ
つてはどうとでもなるということだ。

「やはり悩むか。まあそれが普通だね」

「……………」

「猶予はある。明日の三時までに決めてくれればいい。覚悟ができ
たら、そのとき儀式をやってくれ」

「三時？なぜそんな昼間に」

食い付いてきたか。ほぼ、交渉成立だな。

「僕にも色々事情があるんだ。ギブアンドテ クっていうだろ？情
報提供料と思ってくれたらいい」

「しかし、そんな時間だと家のものに止められる」

「大丈夫。僕、眠り香を持ってる。あの神主さまには眠ってもらお
う。なに、心配はいらないよ。お香はそれほど害はないし、神主さ
まほどの霊力があればこれだけの邪気にあてられても死にはしない
だろう。きみはどうかは知らないけど それは覚悟の問題だか

「らねえ」

「……………」

うまくいった。

人の心　　中々、おもしろいものじゃないかよ。

4

「じゃね、法師さま」

「それじゃあ」

鬼灯姉妹と下駄箱で別れる。

「ふわゝあ」

オレは大きな欠伸をした。

「なんだ大智、寝不足か？」

「うみゆ」

「寝不足はお肌によくないぜ」

人の美容にまで気を配らんでも、隆盛。

「あはん？」

こっこの声は　　。オレは恐る恐る振り返る。

出やがったな！変態ボディコン女教師・渡部りか子っ！！」「セク

ハラは愛のワン・ツウ　レッスン」（　キャッチコピ　？）

「おほよう、りか子ちゃん」

「おはよう上条くん。おはよう、不破大智くん？」

「……………」

なんでオレだけフルネーム　　どうでもいいけど。

「ふみゆゝあ」

オレは挨拶する代わりに大きい欠伸をしてみせた。

見るがいい、この崩れた間抜け面をつ！そして、幻滅しろっ！

「ふふっカワイイ欠伸い」

「ああ、可愛さMAXだぜ」

くっ隆盛まで！

恐ろしや、痘痕も笑窪　　こうなったら、鼻糞弄ったり屁をふたりしてみるか？

いや。こいつらなら、だらしないところも素敵とか、フロラルの香りがするとか云いだし兼ねない。

あきらめよう。

「寝不足？ちゃんと寝ないとお肌に響いちゃうぞ！？」

隆盛と同じことを　　。こちら御神木のことが気になって眠れなかったんじゃ。

「しかし、あれだな。りか子ちゃんはいつも元気つつか　　教職とかけっこうストレス溜まんじゃねえの？」

「まあね」

体をくねらせ肯定する渡部。

はい、嘘。この女にストレスがあるなら、日本全国のサラリマシの方々はすでに胃潰瘍で絶滅しているはずだ。

「たしかに、家に辿り着いたときはもうクタクタで死んじやうって感じだけど」

死んどけ。

「半身浴して、歌うったり、ワイン飲んだりしたら干乾びてた心もプルプルリン、生き返っちゃうのよ？」

干乾びときゃいいのに　　。生き返んなよな、たく　　ん？

「生き返る？」

オレはぼそりと呟いた。

「？」

「大智？」

二人が怪訝そうに見下ろしてくる。

「生き返らせればいいんだよ、隆盛！」

「はっ？」

「だから、御神木の霊力を高めてやるんだ。そうすれば、御神木自身がああ邪気を浄化できるかもしれない」

「まあ、理屈じゃそうかもしれないけど実際どうやるんだ？」

当然の疑問を口にする隆盛。オレはピ スをして云う。

「オレが小さいころな」

「今も十分ちつさい」

下からチョップ！

「うげっ」

「黙って聞け！」

「はい」

「オレが小さいとき、熱とか靈力が激減したときとか親父がまじないをしてくれて、それがすっげえ効果あつただけ」

「ほう　　どんなのだ？」

オレは目を瞑り記憶の糸を手繰る。

「うゝん、詳しいやり方は忘れたけど、たしか複雑な印を結んで、レンコンゲンテンリテイなんたらかんたらって呪文を唱えてたような」

「おい、それて伏犠の」

「知ってんのか？」

「いや　　まあ」

齒切れの悪い隆盛。

「ただそれって道教の秘術だったような」

「道教？中国の？」

「ああ、でもなんで道教の秘術なんかを黎須さんが？分わけわかんねえぞ不動尊寺」

たしかに。修験道とかなら密教と道教が交ざってるって聞いたことあるけど、父さんが葬られてるのって密教家だったよな。ほんと分わけわかんねえな、うちの寺。

「とにかく、救える可能性が出てきたんだ。家に帰って文献とかないか調べるぞ」

「ああ」

戻ろうとするオレたちに渡部が、

「二人とも帰っちゃうの？授業は？」

と聞いてきた。まだいたのかよ。

オレは懷から護符を取り出し、

「のうまく　さんまんだ　ばざらだん　かん　　　と」

護法天童を出す。隆盛も同様に。

それを見た渡部は吃驚喜ぶ。

「きやつすごい!？」

カツカツカツ、尊敬しろ。尊敬して跪いて消え失せるがいい。

「いいなあ。ほしいなあ。この　ツチ・　フ」

だつ　己れ、この淫乱。神聖な護法天童おお!!てか、抱き

付いてんじゃねえ!

「お胸、大きくて気持ちいいでちゅ」

護法　　貴様あ!

「オレの顔してそんなこと云うな!」

＊

覚悟はできたか　　御巫女よ。その意志がこの僕に誘導された

ものだと気付かずに。

「ベストポジションだな」

僕はちょうど御神木が臨める位置にあるマンションの屋上から双
眼鏡を覗いた。

巫女は玉串を手に御神木の前。表情は険しいが、まあ大丈夫だろ
う。

「後は御陰勇太がくれば　　」

さつき奴の下駄箱の中に手紙を入れてあの神社に呼び出した。偽
造のラブレタ　だ。ちゃんな手だが、あの万年脳味噌バラ色小僧な
ら有効だろう。

「ほらな　　」

御陰勇太が嬉しそうにスキップなんぞしながら境内に入っていく。
「さて時間だ」

巫女が動く。

玉串を振りながら、祝詞を唱え。

「掛巻も畏き真榊の大神」

僕は巫女の唇に合わせて口ずさむ。せめてもの弔いだ。優しい優しい国つ神よ。

「祓戸大神たちの大前に、高橋の巫女、恐み恐みも」

さあ、祭りの始まりだ。

袂い給え、清め給え、幸はへ給え。

そして、

「呪い給え」

この僕のために。

5

「な、まだかよ」

文献や資料なんかを調べ初めてもう何時間も立つ。いいかげんムカついてきた。

「そう、急かすんならちったあ手伝ってくれてもいいだろ」

「うっ」

あははは、最初の内はがんばって調べてたんだけど、すぐにへばって隆盛にまかせつきりだったりして。

「だってえ、オレ小さい字とか読んできると眠くなんだもん」

「はいはい　ん？」

隆盛が持っていた資料に顔を近付ける。

「あつたのか!？」

「ああ、たぶんこれだ。先天八卦印　八卦霊符などを用い、それに霊的な力を与え、災いを鎮めたり、身を守り、生命を保全する力を増大させたりすることができる」

「それだっ!」

この秘術を使えば或いは御神木自体を復活させることができるか

もしれない。

「しかし、いくら道教に仏教や陰陽五行などの流れを汲み取った部分があるとはいえ、外国の秘術が使えるのか　よしんば、使えたとして道教の印は複雑だからな。よく調べないと」

「うゝみゆ」

「ごちゃごちゃ調べたりするの苦手なんだよな。うゝでもそんなこと云ってる場合じゃねえか……」。

「貸してみ。うゝん、八卦ってことは方位とかも関係してくるのかな？」

「どうだろうな……ただ」

隆盛の言葉が急に止まる。オレは怪訝に思い訊ねようとして、

「どうし　　なっ!？」

オレも異変に気付く。

「邪気が！」

「ああ、これは」

御神木の　　!？

突然、ものすごい邪気の気配を感じた。あの御神木の中で蠢いていたあの怨念の　　。

オレたちは急いで玉串神社へと向かう。

「うっあ、これは」

邪気が神社の境内いっぱいに溢れだしている。辛うじて鳥居などの結界に阻まれているが、いつそれが破られ町中に洩れ出すか分からない状態だ。

「とにかく行こう」

「待て大智」

境内に侵入しようとするオレを隆盛が止める。

「気休め程度だが、結界を張る　　おん　きりきり　ばざら

」

なんだ？その印と真言……高度な結界なんだろうけど なん
で、そんなの知ってたんだよ、隆盛。

「正式な方法じゃないけど、ないよりマシだろ。オレからあんま離
れんなよ大智」

「ああ 」

ほんとこいつなんでもありだな。腹立つの通り越して呆れるぜ。

「行こう」

オレたちは改めて境内に侵入する。

「くっ」

予想以上の邪気だ。心なしか体が重くなつたような気がする。結
界を張らなければ確かに危なかったかもしれない。

御神木に近付くにつれますます邪気が強くなる。隆盛はさっきか
らなにかしらの印を結び真言を唱え続けている。

「あれは 」

御神木の前に高橋千佳子がいた。彼女はひたすら玉串を振り続け、
その度に御神木から邪気が流れ出ている。ESPがどうのこうのと
只者ではないと思っていたが、まさかこんなことをしでかすことが
できるまでの能力者とは 。

「 ¥ \$ ¢ £ % # & * @ \$ 」

「ん？」

なんだ？どこからか、高橋とも隆盛とも違う声が聞こえてきた。

「ゆっ勇太くん！？」

すこし離れたところに御陰勇太が立っていてなにやらぶつぶつ呟
いている。

「どうしてここに？」

「 @ \$ # £ ÷ } x 」

勇太はオレに気付いて、何かを口遊みながら（隆盛たちの声で聞
こえない）ピ スをしてきた。

「 」

嘘っだろ？なんで勇太の周りだけ邪気がまったく通ってないんだ

？数日前にあつたときより更に靈力上がってるし。『男子、三日会ってなかったら目ん玉こすって見とけよ』ってんなアホないや、今はそんなこと気にしてる場合じゃない。

「おい、止めるっ高橋！」

オレの呼び掛けに、しかし高橋は一心不乱に玉串を振り、祝詞を唱え続ける。

「褌い給え、清め給え、幸はへ給え

「高橋

汗だくになり、もはや周りの邪氣にあてられボロボロになっているにも関わらずそれでも必死で御神木から邪氣を褌い続けている。

「くはあ褌い給え、ううあ清め給ええ、幸はへ給ええい

齒を食いしぼり、氣力だけで地面を踏みしめ、戦うために目を剥いている。

救いたいんだ……何としても御神木を 親というものを

。たとえ、どんな犠牲を払っても たとえ、後になってどんなに後悔しても 目の前の たった唯一の存在のために

「おっオレは

怖い

邪氣塗れのこの空間の中で、何かに置いてきぼりに去れたような気持ちになって体が震えてきた。

逃げ出したい。

「オレは

止められるのか 。 親を救おうと必死に戦っているこの女を

止められるのか。

「何のために

オレは何のために戦ってるんだっけ？

「ううう

頭が混乱してきた。

邪氣が 邪氣に 。

「大智っ！！」

「えあ！？」

隆盛？

「どれが後の最善なのかを考え続けて」

「自分が生きたいように生きる」

「オレはお前のことと思って云ってるって」

「見守ってるからな、がんばって」

父さん。

「そう だった」

「お互いこれからみたいね 法師さま」

「全力を尽くすって」

踏張らなきゃいけない 明日の自己満足のために -！

！

「強くなるって決めたんだ！ のうまく さらばたたぎやてい

びやく さらばつけいびやく さらばた たらた せんだまかろ

しやだ けん ぎゃきぎゃき さらばびきなんうん たらた か

ん まん」

火界呪の真言に伴い左手の金剛杵から青と黄、二本の紐状の光が飛び出してくる。

「絹索 すげえ具現化された不動金縛りかよっ！」

驚嘆する隆盛。

「くっ」

だが、力不足だ。本来なら青・黄・赤・白・黒の五本を撚った索条が具現化されるはず でも今のオレの霊力では二本が限界だ。

「のうまく さんまんだ ばざらだん かん 我っあまねく金剛に帰依す。大憤怒尊よっ一切の禍を括り給えっ！」

青・黄、二本の光が境内を駆け回り、邪気をオレの手元に収束させる。

「うっうっ」

邪気を縛り付けることに成功した。これで一時的でも邪気が町に

溢れる心配はなくなったが。

「ちっ」

駄目だ。縛るので精一杯で、身動きが取れない。

「隆盛！」

「ああ」

邪気の蔓延がなくなり結界を張る手が空いた隆盛はオレの指示よりも先に動いていた。

「ちつと痛いが勘弁しろよ！」

「うっ」

高橋千佳子の鳩尾に拳を打つ。高橋は気絶したのだろう、がつくりとなつて隆盛に支えられた。

「なっ!？」

高橋の袂を止めたのに、御神木から邪気が流れだすのが止まらない。

「慣性か！」

隆盛が眉間に皺を寄せ呟く。

慣性？勢いが付いてるからってことか？

「くつまずい」

このままじゃあじり貧、いずれオレの霊力が尽きたらおしまいだ。御神木に押し戻してみるか？いや駄目だ。ただでさえ御神木はすでにボロボロだったんだ。逆流なんかに耐えられるはずない。

『ありがとう……小さき法師』

「えっ？」

隆盛に支えられてだらりとなつている高橋の口だけが動いた。

「まさか御神木？」

御神木が巫女の体を介して語りかけているのか？

『私を救うために懸命になつていただいていること大変有り難いと思う。でも、もういいのだ。このままではたくさんの犠牲がでてしまう。私はもう十分に生きたから』

「なっ？なんでそんなこと」

神様って云ったつてもとは植物　　それなのに人間を庇おうと
いうのか

「どうして人間のために犠牲に？あなたをこんな風にしてしまった
のは人間なのに。種族の違うもののためにどうして？」

オレは御神木に疑問をぶつける。

『そう　　私は人間のためにこうなったのかもしれない。人間の
弱さと強さが私を蝕んだのだ。それは心苦しい。でも、それ以上に
私は人間に愛されてきた。ただの木でしかない私を神と崇めてくれ
た。私がこれだけの霊力と知恵を持てたのは人間が私を尊きものと
祭ってくれたからに他ならない』

「真榊の尊」

『その名も人間が付けてくれた。何百年もその名で親しんでくれた。
そしてこの娘。千佳子は父母とまで思ってくれた。この娘が私を守
ってくれようとしたように、私もこの娘を　　この娘の未来を守
りたいのだ』

「……………」

オレは唇を噛む。

どれが　　どれが後の最善なんだよ！？

「それはあなたの我俣だ。彼女はそんなこと望んでない」

『その通りだ。私の我俣　　聞いていただけるか？』

くそう。

「おん」

邪気を逆流させる。

ピキピキピキ

御神木に輝が入っていく。

「恐るべき大忿怒尊よ！我を喰らいて刃となせ」

右手の金剛杵から刃が飛び出す。

「のうまく　さんまんだ　ばざらだん　かん　　金剛尊よ！」

これでいいのか？本当にいいのか？

『ありがとっ』

御神木の声。穏やかで、なんか父さんみたいだ。

「我が力を解き放て」

オレは刃を御神木に突き立てた。

ビシバシビキ

邪気が消滅した。御神木の霊力も。

ビシ

縦に大きく輝が入り、やがて御神木はバラバラになって崩れ落ちた。

すでに生命を保全する力は失われていたんだ。霊力だけでその身を支え続けていて、それも今、オレの手で消え失せた。

「……………」

木の破片が散乱する中、夥しい数の錆びた釘が姿を現す。

これが、人間の犯した愚考の象徴。

こんなもののために。

「ご　御神木さまは……………」

高橋千佳子が目をさます。崩れ落ちた御神木を目に、彼女も同じように地面にへたり込んだ。

「うつ　うつ　うわあ　」

嘆き。予想していたこと。それでもオレの胸は潰れそうで…………。

「ちくしょう　うつ　ちくしょう　」

彼女の涙を前にして、『もしかしたら救える方法があったかもしれないのに』などとは口が裂けても云えなかった。

*

「ちい」

離れたマンションの屋上から全てを傍観していた僕は軽く舌打ちをした。

「まあいい」

町中が呪われるという大望は消え失せたが何百年も生きた国つ神

が呪いで朽ち果てる姿を拝むことができたのだから。

「それより問題なのは」

御陰勇太。奴の霊力だ。

あれだけ強大な呪いの直撃を喰らってもびくともしない防御を展開できるとは　　もはや呪いそのもので御陰勇太を葬るのは難しいか。

「厭」

僕は崩れ落ちた御神木の残骸に着目する。

「あれを使えば或いは」

フッフ、これからだ。待ってるよ、御陰勇太。

呪われる　　僕の快樂のために。

シ ケンス

深夜の御陰邸。

いつものように勇太の部屋にはキ　ボ　ドの音が静かに鳴り響いていた。

『乾闥婆　ていう話。どう？おもしろかった？』

『夜叉　御神木が自ら犠牲にしてねえ。ちよつと感動かもね』

『緊那羅　うんうん』

『天　オレはどっちかっていうと町中呪われるつてのが見たかったかな』

『乾闥婆　まあボクもそれはちよつと興味あつたけどね　さす

がにあれだけの邪気が蔓延しちゃったら　みんな肅正されちゃうだろうからねえ。町ごと』

『天　蠅の王に？それとも「進化の指針」かよ？』

『夜叉　はつきり明記しないでくださいよ。恐れ多いですよ』

『天　悪い悪い』

『乾闥婆　まあなんにしても、まだまだ楽しめそうだよねえ。ヒロ

くんで　それじゃあおやすみ」

勇太は静かにノ　トパソコンを閉じた。

そして、椅子の背にもたれ掛かり天井を仰ぐ。

「遊んでいるけど本懐をふざけているわけじゃないんだよ」

独り言だが、まるで何かに語りかけているように勇太は云った。

「蠅の王は尻尾をつかませない。アシハラは香神と共に見事に裏切ってくれたし。黎須の息子にいたっては使いものにならないからねえ　。だからこうやって遊んでたら彼女の方からひょっこり現われるかも知れないだろ？」

少しの間。まるで相手の応答に耳を澄ませているように。

「うん　大丈夫。僕は裏切りはないから　　進化の指針」

金神さま」

勇太は目を瞑る。

しばらくして、

「うーん、まあ呪わればうちが使いものにならないってのは嘘だったりなんかして。そんなこと思うから今夜も眠れない」
いつものように口遊んだ。

つづく

ヒロトカゲゝ生える腕ゝ

1

登校中、突然風紗の足が止まった。不審に思い振り返ると彼女は下を向いてなにやらぶつぶつ云っている。

「どうした？ 風」

「うるさいっ！」

オレの呼び掛けに俯いたまま怒鳴る風紗。風音の問いにも、

「どうなさったんですか？ お姉さま」

「ほっというっ！」

癩癩に答えた。よく見ると風紗の体は小刻みに震えている。根源的な絶望に曝されながら、それでも押し潰されまいと耐えているかのように。

「いったいどういうことだ？」

「大智、これは……」

「ん？ ああ、そうか……」

隆盛の指摘にオレは気が付く。

この辺り、かなり微弱ではあるが邪気の気配がする。それに触発され風紗の中の呪いが爆発的に増大したのだ。

「おん あばぎや べいろしゃのう まかばだら まに はんどま

」

オレは光明真言を唱え周辺の邪気を浄化する。

すると風紗は正気に戻ったらしく、

「わっ私」

顔面蒼白になってオレの顔を見た。

「ごめんなさい 私」

声が震えている。呪いの責任まで自ら背負いこもうとして。

「私……ごめん」

「お前が謝る必要ない」

オレは風紗に寄り彼女の震える手を取る。

「お前が悪いことなんて一つもない」

恐らく風紗の方が風音より繊細なところがあるのだろう。だからこそ呪い封じに綻びが起こりやすい。たった二人だけの家族、その姉としてのプレッシャーからか。

「ここにいる全員、風紗が頑張ってることちゃんと知ってるから」
「うん」

風紗は小さく俯いた。

「今日はもう帰って休もう」

オレは護法天童を出してから、そのまま風紗と二人で寺に引き返す。

「……………」

それにしても最近なにかおかしい。

呪いの吹き溜まり、邪気、負の霊力の淀みとでもいうのか、そういった場所は昔からあったが、最近それが急増している気がする。

小学校でのこともそうだ。

高橋千佳子を言葉巧みに誘導したという子供の声。

御陰勇太。偶然か？それとも。

*

「なるほど　これならどうにかできるかもしれない」

僕は「YUA」からの返信メールを読んで呟く。

そして、僕も相手にメールを返す。

《いつも、ありがとう。ほんとうに感謝しています》
文字ではいくら返しても足りないほどに。

僕は「YUA」が何ものかは知らない。一年くらい前、見ず知ら

ずの彼女から僕にメルが届いた。

それは僕の力の使い方を教えてくれた。そう、今日の僕があるのは彼女のおかげ。僕に生きる希望をくれた。

《いいんだよ。私もヒロ君からの感謝、うれしい》

少しだけ胸が疼く。

《どうして、僕にこんなに親切にしてくれるんですか？》

《そんなの決まってるよ。ヒロ君だから……それが一番の理由だよ》
《僕だから？》

《そう　じゃあまた何かあったらメルちょうだいね！×××》

《ええ、必ず》

静かにパソコンを閉じる。

「ふふ……」

そして僕はバケツいっぱいに入った御神木の残骸の一片を手にとった。

「神の亡骸。たとえ霊力を失っていても依代としては十分ということか」

待っている御陰勇太。すぐに貴様を地獄の底に叩き落としてやる。

2

数日後。

「なっなんじゃこりゃあ!？」

美術の時間、オレの喫驚が教室中に響き渡る。

課題を提出するように云われ、収納式の画板から絵を取り出したのだが。

「……………」

いったいゼンたいこれはなんなのだ？たしか、課題は自画像だったはず。なのに画用紙には黒い線みたいのが所狭しと描かれているだけだ。

こここのところなにかと忙しくて、護法天童の奴に任せていたのだ

が。

「ああ、それか。なんか『眉毛のドアップでちゅ』とか云ってたぜ」
後に座っていた隆盛が教えてくれた。ご丁寧に護法の声真似までして。

「眉毛のドアップ」

オレは今一度、画用紙を食い入るように見つめた。

たしかに、この靡いてるような黒い線は見事なまでに毛の質感。

しかも、オレの体に生えているこんな短い毛は眉毛でしかないのだが……。

「うゝん、これだとチン

」

「死ねっ！」

オレの放った画板ハリセンが隆盛を黙らせる。

みなまで云うな！こいつといい、渡部りか子といい、どうしてみんなで品を下げるようなことをっ！？

「どれ、見せてみる」

美術教師の相原がオレの眉毛画を手にとって見る。

「左眉だな」

「区別が付くのか？

「先生」

画板攻撃にもびくとしなかった隆盛（ホント無駄に頑丈）が相原に告げる。

「そいつはシュルレアリズムの極致ってやつだぜ」

「ほう」

出たよ、シュルレアリズム。なんか変なものをとりあえずシュルと云って誤魔化そうとするこのご時勢。芸術の冒涇じゃねえかよ？

「自画像という課題に対して、あえて被写体の特徴から外れた箇所をクロズアップして描く。つまりこれは、外面的表現をとっぱらい、より深い内なる自己を表現しようとした大智の渾身の作だ」

ものは云いようだな、おい。

「ふむ、たしかにシュールレアリズムと呼べなくもない。いや、寧ろアバンギャルドと云うべきか？」

なんか納得してるし相原。

そんな大層なもんじゃないだろ、それ。

「先生、描き直したいから少し提出期限待ってください」

「なんでだ？」

「だってえ」

こんなもので評価点付けられてたまるか。オレは不器用ながらも美術だけは頑張つて5を取ってきたんだ。2とか3とかが並ぶオレの通知表の唯一のオアシスを護法の奴のせいで枯らされてたまるもんか。

「まあ、待つてやらんこともないが」

「ホント？」

「その代わり条件がある」

条件だと？なんだ？これが渡部とかだったら『私と
して』とかとんでもないこと云いだすんだろうが。

「放課後オレのどこ来い。話はそのときだ」

「みゆ」

オレは不安を覚えつつ返事をした。

*

「いい天気だねえ」

「秋雨前線はもう南下したらしいからね」

休み時間、特にすることもなく外をぶらついていた僕。そして、いつものように御陰勇太が僕に付きまっっている。

「あつ和毅くんだ」

御陰勇太は校庭の隅で絵を描いていた相原和毅を見付け彼に駆け寄る。相原和毅は一学年上だが御陰勇太と家が近所で仲がいいらしい。

「ん？おう、ゆうはか」

相原和毅はそう云って口に加えていた絵筆をパレットの上に置く。彼には両腕がない。

幼い頃、事故にあつて切断してしまつたらしい。だからこそ彼は往年の芸術家がそうしたように、口に絵筆を加えて絵を描いているのだ。

「相変わらず凄いねえ和毅くん。ボク普通に描いたつてこんなに上手に描けないよ。ねえヒロくん？」

「うん。真の天才はハンデなんて関係ないんですね」

「はは、そりゃ讚めすぎだつて」

そう自嘲気味に笑うと、相原和毅は立ち上がり足を使って器用に道具を片付け始める。

「もう、やめちゃうの？」

「あゝなんか最近調子悪くてな。ブランクつて奴かな？」

相原和毅は画板や道具を、残つた短い腕の脇下に挟んだ。

「まっ芸術家にはつきものだ。それより、今日お前んちに遊び行つていいだろ？格ゲ の新作やらせろよ」

「うん」

「じゃあ、後で」

相原和毅は教室に戻つていった。そんな彼の背中を見送りながら御陰勇太は語る。

「ホントに凄いんだよ和毅くん。足でコントロラ 操作してるのに、ボクいつつもゲ ムで負けちゃうんだ」

「へえそれは」

たしかに凄い。

「大したもんだね」

しかしそれは彼が望んで得た力ではない。不遇のため自然と身についたもの。身につけなければならなかったもの。

「ほんといい天気だねえ」

御陰勇太は呑気そうに蒼天を仰ぐ。

「うん」

本当に雲一つない空だ。吸い込まれそうなくらい深い青がどこまでも広がっている。

相原和毅はそれを画用紙に収めようとしていた。どんなに欲しくて手を延ばしても、掴み取ることはできないものの象徴を。

そう人は家にある鳥なんて望まない。科学で作れる花ならば思い描くこともない。

もっと別の 夢想の中にあるもの。ありえない願望に苦笑しながら、それでも虚しさは拭うことができず。

だからこそ、付け入る隙ができるんだ。

そうだろ？相原和毅よ。

3

「で、条件ってなんっスか？」

放課後、絵の提出期限を延ばしてもらう条件を聞きに職員室の相原のところまでおもむいた。少し不安感があつたので隆盛にもついできてもらっている。

「実はな」

相原は腕を組んで話したず。

「このところなんか変でな。べつに体の調子は悪くないんだが、家に帰ると異様なほど早く眠くなるし寝起きも悪くなって」

「更年期じゃないですか？」

「んな歳かよ！」

こりや失敬。

相原はまだ二十代後半くらいである。

「それで病院に行ってみたんだがどこも悪くないって云われて

で、今日通り掛かりの一年の生徒に呪われてるかもしれないからお前に見てもらえと、なぜか怒鳴られるように云われてな」

「通り掛かりの一年？」

「ほら、最近転校してきた双子の
風紗か。」

「確かに風ちゃんが云うなら呪いかもな。風ちゃん敏感みたいだし。
どれどれ」

そう云って隆盛が相原を霊視する。

「ふむ、たしかになんか感じるな。なあもしかして調子が悪いの先生
だけじゃねんじゃねえの？」

「ああ、なんか家族全員同じ感じでな」

相原の答えを聞き得意げに頷く隆盛。

「やっぱな 恐らく家自体が呪いの影響下にあるんだ」

「どういうことだ、隆盛？」

隆盛にオレは問う。

「遠距離型の呪いには二通りあるのはお前も知ってんだろ？」

「ああ、そうか」

そこまで聞いてオレも納得する。

一口に呪いと云っても種類も意味も様々だが、術執行者が誰かを
遠距離から呪う場合、隆盛の云うとおり大まかに分けて二通り存在
する。

一つは対象者の縁のものを手に入れたりして、霊力の感知、怨念
を送るルトの確保、目標の絞り込み（たぶんこの間、話題に出て
たESPだとか靈感だとかが関係するんだろう）そういった手順を
整えた上で相手に術を叩きつけるという方法。これはまさに遠距離
用の戦闘術であり、風紗などのよほど強い霊力とセンスを持ったも
のにしか成功不能なものだろう。

それよりは比較的簡単な方法として、依代を用いるものがある。
怨念を込めた依代を相手に送り付けるなどし、その依代のテリトリ
内のもの、あるいは条件をクリアしたものに対して無差別攻撃を
しかける呪いだ。依代にしたものがある程度霊的効力を持つものな
ら成功しやすく、効果範囲が広いためにかなり質が悪い。

「依代を探しださなきゃなんないのか。結構めんどくさ」

「依代が目に見えるものとは限らないしな」

そう、音とかに紛れてる可能性もある。サブリなんとか効果つてやつ。そんなんだったらお手上げかも。

「まあ一つ頼む。ちゃんと報酬は払うから」

「いいです。安月給の教師に正規の報酬払ってもらうのは気の毒な
んで」

「はつきり云つてくれるな……」

苦笑いする相原。

さすがに先生相手に成功報酬50万とか云えないって……。

「その代わり、提出期限延ばすのOKしてください」

「まあべつにいいけど あの眉毛画でいいと思うんだがな」

「……………」

まだ云うか。

「ん？」

相原に連れられオレと隆盛は彼の自宅を訪れる。

そこは何の変哲もない中流住宅の一つ。しかし、玄関を潜ったところ
で妙な違和感を覚えた。

「フンフン、フンフン」

オレは犬のように鼻から息を吸い込む。べつに特に変わった匂い
がするわけではない。

「けどなんか、」

「どうした大智？」

「いや、なんか空気が気になるっていうか」
「どうにも云い表せない。」

「ん？フンフン」

「なんか臭いか？」

隆盛や相原もオレに倣う。

「これは」

隆盛が何かに気付いたらしく目を見開いた。

「もしや　おい、あんま吸うな。いったん外に出るぞ」

そう云って隆盛はオレの手を引っ張って玄関から出る。相原も首を傾げながら着いてきた。

「どうした上条？」

「先生、この家の空気、毒で汚染されてるかもしれない」
「毒っ！？」

隆盛のいきなりの発言に喫驚するオレと相原。

「どういうことだ隆盛？」

「ああ。呪いつてのの大半は毒を使ったペテンだろ？でも、中には毒を巧妙に使った呪いというのも存在するんだ。例えば目標にまったく致死量に及ばない程度の毒を盛り、呪いでその免疫機能を狂わせショック死させる。こうすれば死因を誤魔化せ確実に呪い殺せる。まあ今回のケ　スガ死に至るものかは分からないが、大智が空気に違和感を覚えたんなら毒が漂ってる可能性がある」

確かにオレは不動尊の霊力が減って自身の霊力が増えたと細胞の異常活性が起こって感覚も鋭敏になるけど。

「でも、毒ってなあ」

「いや、毒などそんなに珍しいものではないだろ」

相原が云う。

「そこらに生えてるような植物だって根元に毒があって食べれば腹を壊すものもある。芳香剤の中には思いっきり吸い込めば頭がクラクラするものもあるし、シックハウス症候群などまさに毒の家だ」
「とにかくだ。依代がなんらかの毒を発しているとみて行動したほうがいいだろう」

たしかに危険性があるんならそれを見越して行動したほうがいいけど。

「でも、どうすんだよ？」

「とりあえず近くのコンビニでマスクを買ってくる」

「マスク？」

オレは隆盛の言葉に耳を疑う。

「コンビ二で売ってるマスク程度でどうにかなるのかよ？」

「最近のマスクは性能いいんだぞ。それに先生が死んでないんだから、大丈夫なんでないの？」

そう云い残し隆盛はコンビ二に走って行っただ。

「上条は細かいのかアバウトなのか分からん奴だな」

「あいつ変態だから」

昔から天才と変態のすることは常人には理解できないものだ。

そうこうしていると、玄関の扉が開き一人の男の子が姿を現す。

「なんだ和毅、帰ってたのか」

「兄ちゃんこそ早かったんだね」

中学生位だろうか？ずいぶん歳の離れた兄弟である。いや、そんなことより一瞬気付かなかったのだが、この和毅って子の両腕ない。

「……………」

オレが放心していると相原弟はオレを見て相原兄に訊ねる。

「兄ちゃんこの子、誰？」

「オレの生徒だ」

「ええっ 兄ちゃんって小学校の先生だったっけ？」

ちっ毎度お馴染みの精神攻撃め！

「オレ、高校生なんだけど」

「えっ？小六のオレよりチビなのに？」

「……………」

くっ最近の小学生は発育がよろしくて恨めしい。

「こら和毅、人様のコンプレックスを抉るなよ」

「あつわりいわりい」

あんまり謝られた気がしないんですけど。

「兄ちゃんオレ、友達のところ遊びに行ってくるから」

「ああ。あんまり遅くなるなよ」

「うん」

そして相原弟は去っていった。

「あんまり気にしないでくれ。ああ、あつて気はいい奴なんだ」

「いいですよ。馴れてるし」

「ハハ……」

相原は自嘲気味に笑う。

そしていつときの沈黙が生まれた。

『……………』

やがて相原が口を開く。

「あいつの腕な。三歳の頃、事故でああなったんだ」

「そうなんですか」

「トラックの重荷が崩れてきて、その下敷きに」

「……………」

相原は目を瞑っていた。なにかを堪え忍んでいる顔だ。

こういう時、なんて言葉をかけたらいいんだろうか？ 所謂いえば父さんは、救いを求めてきた人に対して『大丈夫だよ』と声をかけていた。するとみんな癒されたように泣いたり笑ったりしていた。でもそれは言葉の力ではなく、父さんの力だ。オレにはとてもできない。

まただ……。なんか穴が空くような。

「お待たせ！」

隆盛がマスクを持って戻ってきた。

少しほっとした。

それでも、いつまでもこいつに頼り続けている自分に嫌気もした。

*

「あつ和毅くん」

相原和毅が御陰勇太の部屋を訪れる。

「相変わらず広いなこの家は。玄関からここまでトメさんの案内がないと迷うぜきつと」

「はは」

「おっ今日は縫取織くんも来てるのか？」

「どうも」

座椅子に座っていた僕を見て、相原和毅が声をかけてくる。

「お前ら学校ではいつも一緒にいるのに家に来たの初めてじゃないか？」

「そうなんだよ。ヒロくん誘っても来てくれないんだよお」

「ごめん、勉強とか忙しくて。でも、今日は気分転換しようかなって」

「ふん」

ふん、今日はお前の観察だよ、相原和毅。

そろそろアレの効果が始める。それを見て最終調整をしなければならぬからね。

「ねえ早くゲムしよっ！まずはボクと和毅くんね」

「ああ」

相原和毅はスリッパを脱ぐとウエストポーチから足でウェットティッシュを取り出し足の指を器用に拭く。そして、床に置かれたTVゲームのコントローラに足を構えた。

「レディ GO！」

ゲームが始まった。

ほう、聞きしに勝るとはこのことか。足の指がちょっとした不器用な人間の手先より巧みに動いている。

これほどの能力を持ちながらそれでも普通に憧れるか……。

それが人の業。呪いそのものだな。

4

「うっ」

唸る隆盛。

確かにこの家は呪われている。にもかかわらず小一時間も搜索し

ているのに依代を見付けだすことができない。

「法具を外して霊視するか……」

隆盛のしている霊的防御力を上げる法具。逆を云えばその遮断作用が霊感を妨げることとなる。

でも、

「やめとけよ」

霊力過敏症 外界の霊力に過剰反応してしまうアレルギー 症状。それが隆盛の霊感の高さの起因であり、霊的防御力を高める必要性を齎らすもの。

「気分悪くなるんだろ？」

「そうだが」

「他の方法を考えるぞ」

そう云ってオレは通学バックを漁る。

「先生、家族何人ですか？」

「四人だが？」

人数分のお札を取り出し、相原に渡した。

「とりあえず今日は帰ります。依代を見付ける方法を考えて改めて搜索を。その間はしっかり空気の入れ替えして、マスク着用。家にいるときはこのお守りをそれぞれ身につけていてください」

「わかった。すまんな手間をかけさせて」

指示を聞き入れる相原。

オレたちは適当な浄化処理をすませて暇を告げた。

「オレ、玉串神社に寄って帰るけどお前どうする？」

帰り道、オレは隆盛にそう訊ねた。

「千佳ちゃんのお見舞いか？」

「ああ」

御神木が崩壊してから数日。高橋千佳子は大量の邪気にあてられたため自宅療養している。正直、会いづらい。だからといって逃げるのはよくないと思う。

「そつえばESPの中には探查能力を持つものもいるらしいぞ。」

千佳ちゃんに訊ねて頼んで見るか？」

「どうだろ……。」

「その時の雰囲気です。」

「ケ スバイケ スか。よし、オレも行く。」

「……………」

高橋の家に行くと神主さまが出てきて客間に通された。しばらく待っていると、巫女姿の高橋千佳子が茶請けの乗った盆を持って現われる。

「……………」

高橋は黙って台の上に盆を置いてからオレたちの正面に座る。菓子は美味しそうな興しだった。

「どうも」

ペコリと頭を下げる高橋。オレはなぜか心臓がドキッとして慌てる。

「あの、その、えっとお」

「もう、体はいいのか？」

オレがどぎまぎしていると、横にいた隆盛がさらりと加減を訊ねた。

「ああ、もう大丈夫だ。明後日は学校へ行こうと思う」

「よかったな」

「ありがとう」

隆盛の笑顔に高橋もほんの少しだけ頬を緩めて応じた。

「……………」

なんか居たたまれない。オレは思わず目の前の興しに目を落とす。

「口に合えばいいが」

「えっ？」

一瞬だけ高崎の言葉の意味が分からなかった。少しして自分が興しを物欲しげに見ていると彼女に解釈されたということに気が付き

恥ずかしくなる。

「あついただきます」

言い訳するのも却っておかしい気がしたので興しを口に放る。

「美味しい」

甘さがサクサクと口に広がる。凄く美味しい。でもどこか今の気

分とは違う気がした。

「そうか、よかった」

何か云わなきゃ。

「あの」

「ん？」

「その、えっと」

でも、何を云えばいんだろう？具合は今、隆盛が訊いたし、励ま
しは脈絡ない気がするし、ここは時節からか？なんか白々しい。

「不破大智」

「はっはい」

高橋に名を呼ばれ思わず背筋を伸ばす。

「これまでの無礼、許してほしい」

「えっ？その」

高橋はオレに深々と頭を下げた。

「その、やめ」

「.....」

彼女は頭を上げオレの目を真つすぐと見つめてきた。真摯な眼差
し。オレは思わず目を逸らす。

「その　オレ　あの.....」

「自分があればどこまでに弱い人間だとは思っていなかった」

「.....」

「御神木が突然枯れ混乱した。救えるかもしれない法師がいると父
に聞き嫉妬した。完全な八つ当たりだ。自分が恥ずかしい」

「そんなことない！」

思わず声を荒げハツとなる。

「そんな　　ことない……それだけ大切なものだったんだから焦るのは当然だ」

「すまない」

高橋千佳子の顔が見れない。彼女はどんな顔でオレに謝罪しているのか。

「その　　ほんとに大丈夫なのか？もう」

オレの問いに高橋は少しだけ考えてから口を開く。

「辛くないと云えば嘘だ。朝起きてもう二度と御神木を目にすることができないと考えると憂鬱でしかたない。父にも心配掛けた。人を傷つけた。元に戻ることはない」

「……………」

「それでもこうして自分の身を按じ見舞ってくれるものがいる。失ったものは大きくとも得るものも確かにあるのだと、そう自分を鍛え直そうと思っている」

大丈夫なわけではない。辛くて胸が張り裂けそうなのだと伝わってくる。それでも彼女の言葉に偽りはないと思った。

結局、能力云々のことは訊ねられないまま神社を後にした。

「強いな、あいつ」

帰り道、オレはポツリと呟いた。それを耳にした隆盛は少し考えてから云う。

「さあな。ただ、そう見えるのは彼女がより強いなにかに支えられているからじゃないかな」

「より強い何か？」

「例えば神主の　　十蔵さんだっけ？あの人優しそうだったし、色々懸命になってくれたんじゃないか？」

「そうだな」

「それに大智だって

」

オレ？

「真実を告げないという選択で彼女を守ってる。もしかしたら救えたかもしれないなんて知ったらさすがに、まだ立直れてなかったか

もしれない。そうやって人から守られて、見えない何かに支えられて、初めて人は強くなれるんだ」

強くなる　　支えられて……。

「……………」

オレはいつのまにか泣いていた。隆盛が後からオレの頭を撫でる。

「大智。ごめん」

顔は見えない。彼も泣いているような気がする。

「ずっと支えて上げられなくて。ずっと独りぼっちで寂しい思いさせて」

「……………」

そんなの　　仕方　　ない……。

「謝んなよ。そんなのお前のせいじゃねえじゃんか」

「……………」

雫がぼたりとオレの髪を濡らした。

5

父さんが死んだ後、隆盛の家の者がオレを引き取ってくれと申し出てくれた。そしてオレは一カ月くらいの間、隆盛の家にやつかいになった。

なるほどと思った。隆盛という人間は、たしかにこの家で生まれ育ったのだと。

暖かい、針の縫う隙間もないほど温もりで溢れている。おじさんもおばさんも優しく、兄妹たちも明るく接してくれた。悲しみを忘れていられる時間が多かった。

あの日、オレが倒れるまでは　　。

原因不明の意識混濁が続いた。結論としてオレが不動尊の霊力で自らの霊力を封印し続けなければならぬ体質なのだというに行き着いた。更に不動尊の霊力はオレや呪われた者には浄化作用として働くが、正常な人間が長く曝されると悪影響を及ぼすという事

が最善だとか御託を並べて、自分の寂しさを紛らわそうとしてんだ。まるで、ペットかなにかを拾ったように……。

「ホントにそっくりですよこれは」

「どれどれ」

風音の称賛。風紗はオレと絵の中のオレを交互に見比べる。

「ふーん、確かに」

「継続はなんたらってな。暇だったから、ずっと……」

思い出した。一人でいるときに絵を描くことを勧めてきたのも、絵の描き方を教わったのも隆盛にだった。

「でもさあ」

風紗がオレの両頬を人差し指でくいつと引き上げる。

「笑ってるほうがいいよ。法師さまは」

絵を見る。画用紙の中のオレは死人のような顔をしていた。

「なあ」

「ん？」

「やっぱいいや……」

危なかった。もう少しで変なこと訊きそうになった。

オレのこと好き？とか。

「よしよし、いい子いい子」

風紗がオレの頭を撫でてくる。

「子供扱いすんなよ。隆盛じゃあるまいし」

「ううん。法師さまはまだ子供よ」

きつぱりと云われてしまった。

「私たちもね」

自嘲気味に笑う風紗。風音に目をやると、眩しそうに笑っていた。

「隆盛さんは子供らしくないですけどね」

「はあ」

ため息。見透かされてやんの。

思えば、どうして僕は御陰勇太に拘っているんだろうか？

奴が特別な存在だからか？

厭、違う。

たとえば奴がどんな力を持っていようと、世界の理に関わるものだとしても、僕はなんの興味もない。たしかに御陰勇太の力はすごいのだろう。でも、それがなんだっていうんだ。

僕はただ、他人を呪い自分が呪われ続けていたいだけ 奴に構う必要はない。

なのになぜ？

「肉は腐りかけが

」

「果实もそう

ヒロくんと一緒

ほんといい天気だね

えへへ」

「友達だもんか

」

そうだが 奴が僕に構うから。奴が僕の心に触れようとするから。

僕は一人で十分なのに。この腐れ切った世界に友なんていらなし、そんなもの存在するはずがない。ただの馴れ合い。それが分からないくずどもばかり。

僕は呪いと共にいられればそれでいい。それだけで満たされる。

「御陰勇太」

お前が僕を友と呼び続けるかぎり、僕がお前を殺す。

「待っている

」

もうすぐ完成だ。

6

「ねえ法師さま、起きて！」

オレを呼ぶ声がある。

うるさいなあ。

「だから鮪にマヨネズかけてもトロの味なんかしないって云ってんじゃん、パパ！」

「なに理由分かんないこと云ってんのよ 法師さまに電話が掛かってるから起きてって云ってるんでしょ!？」

「いてっ」

頭に鈍い衝撃が走る。それで自然と目が開くオレ。目の前に風紗が立っていて、オレになにかを突き出してくる。

「ほら 電話よ。早く出て」

「んゝ、もしもしパパ？やっぱトロは本物がいいと思うんだけど」

『もしもし？お前、寝呆けてるな？オレは相原だ。美術の』

「あゝそう」

『昨日のことなんだけどな、アレもついいから。なんか体調も戻ったし、たぶん呪いつてのも大げさだろ？』

「みゆう」

『悪かったな、手間とらせてよ。あつ絵の方は今月中でいいから。じゃ』

「んゝ、胡瓜に蜂蜜でメロンだね。それはなんとなく許せる」

「ねえどんな話だったの？」

風紗がオレに訊ねてくる。

「みゆう、親父がね。味伝説を試してみようって……アレ？」

徐々に頭が覚醒し始める。

「えゝと、相原が 昨日のこともういって……どういうことだ？」

オレは慌てて上半身を起こし、相原に電話しようとする。

だが。

「オレ、アイツの電話番号知らねえし」

「今どきナンバ ディスプレ じゃないもんねえ、この家」

「うっ」

だってさあ、色々機能が付いたら訳分かんなくなりそうじゃん。「ちっしやあねえ。ちよつと家まで行ってくる。留守番よろしく」

「分かったわ……って」

ボクサ パンツにTシャツにナイトキャップの寝巻スタイルのまま出掛けようとするオレを尻紗が制する。

「面白いほど、寝起き悪いよね法師さま」

「うゝみゅ」

オレは赤面しながらナイトキャップを外した。

相原の家に向かう途中、

「ん？あれは」

公園で相原の弟の和毅を見かける。

絵を描いていた。ない両腕の代わりに口や足を使って。

オレは和毅がどんな絵を描くのか気になって近付いた。

「ほう」

オレは和毅の絵を見て思わず感嘆する。

空を中心とした風景画。画用紙はほぼ青一色で塗られていた。ただ、一言に青といってもその多彩さは舌を巻く程で、とても水彩絵の具だけで表現しているとは思えない。

「おお」

和毅はオレに気が付き口の筆をパレットにそつと置いた。

「チビ太兄ちゃんか」

「勝手なあだ名つけんなっ!？」

「へへ」

和毅はニツと笑う。

腹は立つがあまり憎めないのは

「巧いな、お前」

「そう？」

「ああ、青一つでこんだけだせりや立派なもんだ」

「……………」

和毅は表情を消し自分の描いた空を睨む。そして首をゆっくりと

上げ天を仰いだ。

「でも　　なんか違う気がする……」

ボソリと呟く和毅。

オレも和毅と同様に絵と空を見比べた。

「ああ、そうか」

「えっ？わかったの」

オレの言葉に和毅は驚いた。

「今、ちよつと理由があつて感覚が鋭くなってるから。これ真上を見て描いた絵だろ？」

「うん」

「だから中心が真上になるからここが一番青が濃くなる。で、上に太陽があると仮定すれば上側が光で少し白っぽくなるとして、あとは外向きに青が薄くなっていくだろ？でもこの雲の描き方だと右側に太陽がある」

和毅はオレの指摘にはつとなる。

「ほんとだ　気付かなかつた　　」

「ほとんど空だけだと目を作りにくいし、こんだけ力入れて描こうとすれば時間が経過するからな。まあ普通の絵だったら、こんなこと気付かないだろうけど、色の再現が半端じゃないから微妙な違いも気になってしまつんだろ」

「はあ。なんかここんとこ調子悪くてさ、バカだよなあ。集中できてねえよ」

和毅は呆れたように半分しかない腕を上げてみせる。まあ、家族全員呪いのせいで体調悪いようなこと云ってたからしょうがないだろうけど　　ん？半分

「腕が伸び　　」

昨日見たとき、和毅の腕は半分もなかったような気がする。

「っ！！」

和毅が顔面蒼白になる。

そして、

「和毅くんっ!？」

彼は画材道具を置いて走り去っていった。
なんなんだよ、いったい !?

「腕が伸びた？」

わけが分からない。オレは混乱する頭で、隆盛の下を訪れた。

「ほんとなんだっ!! 昨日は四分の一くらいしかなかったのに、今は間接のところくらいまであった」

「うむ」

考え込む隆盛。

「腕が伸びる。つまり再生することだが、実際問題なくなつた腕を再生させることは不可能だろう」

「でも」

「まあ聞け。いいか、人間の細胞分裂つてのは胎児のときを除いて、指なら指に腕なら腕にしかないもんなんだ。だから、もし腕の長さが変わっていたんなら、それは再生したというよりくつつけられたと 胎児? そうか……」

「隆盛？」

隆盛は何かを思いついたように立ち上がって、自分の部屋の本棚から分厚い本を引っ張り出してくる。

「これかもしれない」

「ゴ レム？」

隆盛から差し出されたペ ジの頭の文字を詠む。

「ゴ レムってドラ エとかに出てくる土人形の？」

「ああ、そうだ。ゴ レムの語源は胎児。ユダヤ教の尊師が使役する泥人形のことだが」

「おいおい、俺の見たのは泥なんかじゃなかったぞ」

「いや、ゴ レムの起源は『旧約聖書』で神が楽園の泥から最初の人間アダムを創造したという逸話によるものだ。つまりアダムは神

の分身　それらを総合的に考えると、ゴ　レムとは子宮を必要
としない即席クロ　ン人間の製造法。和毅とかいう子の場合、それ
を部分的に行なったとすれば　「
なんか話が誇大妄想っぽくなってきているような。
「クロ　ンだとか神とか、んな一昔前に流行ったSFじゃあるまい
し」

オレが呆れ果てていると隆盛は苦笑する。

「おいおい、霊能者ってのは魔術師の末裔だろ？魔術ってのは恐ら
く行き過ぎた科学のことだからな」

魔法と一緒にされてもな。

「ここで議論していてもしかたがない」

とにかく、オレたちは相原の家へ行くことにした。

*

さて、仕上げに入ろうか。

昨日は誰かさんの作った護符のせいで予定外に術が発動してしま
ったが　まあいい、それもすでに修正済みだ。

「うつつあ　　がああ　　」

相原和毅は悶え苦しみながらどこぞの塀に凭れ掛かる。

「腕がぁ腕がぁ」

相原和毅　　お前があくまでも失った腕を求めるといふならく
れてやる。

だが代償はいただく。手にした腕を使って御陰勇太を抹殺しろ。

「ああああああああ　　」

ぐりゅぐりゅぐりゅ

腕が生える。厭、正確に云えば僕の作ったゴ　レムが相原和毅の
細胞を模倣して誕生しているのだ。

後はゴ　レムに仕込んだ依代を通して、相原和毅　　お前を操
り人形にするだけだ。

相原の家を訪ねるオレと隆盛。和毅の残していった画材と絵を相原に渡すと彼は苦笑した。

「あゝあ、へったくそだなあ」

「ええ、調子が良くないって云ってましたからね」

「……………」

相原は絵から目を逸らし外方を向く。

「呪いです。その影響が一番受けているのは和毅くんじゃないですか？」

「……………」

「黙ってればオレが気付かないとでも思ってるんですか 和毅さんの腕！昨日、何があったのか話してください」

相原は口を押さえいつときの間躊躇していた。オレはそんな彼を睨み上げ、隆盛は後ろでなにやらぶつぶつ云っている。

「昨日の夜」

やがて相原は観念したように小声で話し始める。

「お前から貰ったお札を和毅に渡したとたん和毅が腕が痛いと言いだして……そしたら、腕が生えてきて」

「……………」

「和毅を問いただしたら、数日前に誰からか分からないけど『腕、欲しくない？』ってメルがきて、『欲しい』って返信したら次の日塗り薬がポストに入ってて、それを腕に塗ってたらいずれ腕が生えるって」

「それであんたはあの子の腕が生えるからラッキー とでも思ったのか！？」

相原はオレの言葉を受け目を瞑る。本当は耳を塞ぎたいのだと云わんばかりに。

「呪いって分かってたんだよね？危ないものかもしれないって分か

つてたんだよな？それなのにあんたは　　」

「しかたねえじゃねえかつ！！」

相原の叫び声。オレは思わず体を硬直させる。

「あいつの腕が生えてくるんだ　　少しばかりのリスクがなんだ
つてんだ」

「先生　　」

「和毅の腕は　　オレのせいになくなったんだ！」

「っ！？」

「あいつの面倒を見てなきゃならなかったのに、友達と遊ぶのに夢
中になって、ちよつと目を離れたすきに事故に巻き込まれて　　」
相原が頭を抑えて崩れていく。

オレは今日、生まれて初めて大人を下に見たかもしれない。

「腕がなくて、惨めな思いもしただろう。どうしてオレだけって苦
しんだだろう。だからあいつの腕がもとに戻るなら、オレは悪魔に
だって　　」

「あんたそれでも大人かよっ！？」

ちくしょう　　。どこの誰の呪いか知らないが、こんな惨す

ぎる。人の心の傷を決るみたいにして。

「あんたが罪の意識を感じるのは分かる。和毅くんが腕を欲しがっ
たことも　　どんな思いで、この青空を描いていたのかも」

オレは地面に落ちた、和毅の描いたちぐはぐな蒼天を指差す。

「誰だつてありもしない偶像に憧れることはあるんだ。それが手に
入れることができなくて寂しい思いをすることだつて！！だけどっ
！たとえ、手を伸ばして青空が手に入らなくても、それでも心の中
に青空を描けば空を飛ぶことだつてできるんだつて！それを子供に
教えてやるのが　　そうやって励ましてやるのが家族つてもんじ
やないのかよ！それが、大人の務めじゃねえのかよ！？」

「うつうああ　　くう　　」

噎び泣く相原。

「くそ」

父さんのようにはどうしてもいかない。それでもオレは。

「なあ大智。呪いの症状、眠くなるって云ってたな」

それまで一人の世界にいた隆盛が、深刻な顔でオレに訊ねてくる。
「ああ、副作用かなんか？和毅の腕に塗った薬が風呂に入ったときとかに気化して他の家族にも影響が出たか？」

「いや寧ろそっちがメインじゃないのか？」

「えっ？」

隆盛の言葉にオレは混乱する。

「どういう」

「腕を餌にして　しまった、ここ勇太んちの近くじゃねえか」

「勇太くんは和毅の友達」

と相原。

「どういうことだよ隆盛！？」

「術者の目的は相原和毅を操って勇太を殺すことだっ！！」

「なっ！？でも、掲示板のアレはすでに削除したんだろ？」

そう、風紗の事件の後『勇太を呪う』よう掲示板に書き込まれていた文面は隆盛が管理会社と交渉して削除させていた。

「消す前に風ちゃん以外の誰かが見てたか。いずれにせよ、アレを書いた奴が誰か分かってないわけだし、ネットの掲示板なんて世の中には五万とある。もしかた勇太が誰かに狙われているとしたら

勇太がここんとこやたらとお前の周りに現われることもこれで説明が付く」

「じゃあ」

隆盛の言葉に息を飲む。

勇太が危ないっ！！

*

もともとゴ　レム自体、僕の云うことを聞くようにできている。
後は御神木を利用して作った依代を通して精神支配を強めれば、相

原和毅は簡単に僕の操り人形と化した。

「ふん」

もともと他の霊力を自由にできる能力を持つ僕にとってこんなことは朝飯前だ。

『よう、勇太』

相原和毅を御陰邸に向かわせた。インタ　フォンで呼び出させると、御陰勇太はなんの疑いもなく玄関から顔を出してくる。

『どうしたの、和毅くん？』

ニコニコ顔で相原和毅に近付こうとする御陰勇太。しかし、途中で来て奴は相原和毅の異変に気が付き足を止めた。

『しまっ！？のうまく　しっちり　』

遅いっ！

御陰勇太は何かの術で応戦しようとしてきたがすでに後の祭りだ。

『ぐがあ』

相原和毅の放った跳び膝が御陰勇太の鳩尾に入った。

「首だっ！首を絞めるー！」

僕の命に従い胎児なる腕が御陰勇太の首を締め上げる。

『くうあ　』

強烈な握力に顔をピクピクさせながら、それでも御陰勇太は何かの印を結ばうと腕を動かそうとする。

なんて奴だ。普通なら気絶してもおかしくないのに、逆に仕掛けてこようとするととは。

「腕を取れ」

首を右手のみで握らせて、左手で御陰勇太の右腕を押さえ付けさせる。

『うがあ』

もう奴になす術はない。

「これで終わり　あれは……」

ちっ、いいところで　。

＊

「和毅っ！」

御陰邸のアプロ　チで和毅が勇太の首を絞めている場面に出くわす。

やはり腕が完全に生えてる。おまけに隆盛の云う通りになつてしまった。

「やめろっ 和毅！」

「待ってください」

和毅の下へ駆けようとする相原をオレは制止する。

「和毅くんは誰かに操られている。近付いたら危険です」

「どうする大智？」

隆盛の問い掛け。

依代を使つた呪いを呪咀移しするのは難しい。依代を破壊するしかないのだが。

「取り敢えず不動金縛りで縛る」

金剛杵がないのは痛い、寺に取りに返っている時間はない。俺は代わりに羅索印を結んで真言を唱える。

「のうまく　さらば　たた　　うぐっ！」

「大智っ！？」

体の力が抜ける。

俺は思わず跪いてしまった。

「まずい」

こここのところ術の使用頻度が高くて不動尊の霊力が足りなくなつてしまった。このままじゃ　　。

＊

呪われ屋の出現に、またも邪魔が入るかと思つたがなんのことはない。呪われ屋は先日のお神木の件で力を使い果したのか、術を使

えずにいるようだ。

「ふん。相原和毅、そのまま御陰勇太の首を折ってしま

『うおあああああああああああ』

なっ！？

突然の呪われ屋の咆哮。

『大智っ！！』

いつも呪われ屋にくっついていてる巨漢が奴を止めようと肩に手を当てる。だが、

『ぬん』

呪われ屋の細腕が一振り、巨漢を後方に薙ぎ倒した。

あれだけの体格差でこんなことが可能なのか？

厭、それよりあの呪われ屋の瞳。

燃えるような紅に、しかも瞳孔が野性の獣のごとく縦に潰れている。

「瞳孔を構成する虹彩は筋肉だ。なら、筋肉組織を急速に変質させる術……厭、まてよ。これはまさか

第二次性徴不全かっ！？

あの孤高の天才ト ルーシン博士がかかっていたとされる、細胞の異常活性を促す原因不明の先天性失陥。 それなら奴の体が異常に幼いのも、突然の異変も納得ができる。

「だからといって奴の霊力は空のはず。この状況を打破する術など使えないだが

『うああああああああ』

呪われ屋が相原和毅に体当たりする。相原和毅は吹っ飛び御陰勇太から離れた。

「力任せにきたか？よもや依代を

馬鹿なっ！？ゴレムの腕とはいえ、すでに相原和毅の肉体と同化を始めているそれをもぎ取るつもりかっ！？ 「応戦しろっ！」

「大智、やめろっ!!」

隆盛の悲痛の叫び。オレにそんなことさせたくなくて、でも、もうこれしかないじゃないか。

「うぐあ」

頭の中の血が巡りすぎて気がおかしくなりそうだ。

「つああ」

和毅の腕が彼に馬乗りになっているオレの首に伸びる。

「ぐあ」

物凄い握力。勇太はこれで首を。

もう、方法がない。呪いの依代を　この腕を　壊すしか。

「ぐう」

残酷かもしれない。痛いかもしれない。

それでもオレは呪いを　この子を救わなきゃ。それが、オレにできる唯一のことだから。

みしめしめしめし

オレの首を絞めているその腕を両手で掴み擦じり上げる。

「うがああああああ」

和毅の絶叫が耳に。

だめだ、力を抜いちゃ。今やめたってどうにもならない。

ばきばきば

骨が碎ける音。

ぐしゅ

『うあああああああああああああ』

相原と和毅の声が重なって耳に届く。

血の臭いが普段の何倍もの感覚を有するオレの嗅覚を貫く。それは工事現場の鉄洪のごとく。

「ああああ

ああああ

ああああ

」

もう一本の腕が失った腕を求め、オレの首から和毅の血塗れの腕に。

和毅から切り離された腕は断末魔を上げているかのように、地面の上をびくびくと跳ね続けている。

ごめん。せつかく生まれてきたのに。

「ぬあああ」

残った腕も……。

みし　　ぼきば　　ぐしゅ

「あああああああああああ」

和毅の叫び。痛みか、それともせつかく手に入れたものを失った嘆きか。

オレの意識は答えを出せぬまま急速に遠退いていった。

*

「やってくれるじゃないかよ」

武者震いが止まらない。

呪われ屋、不破大智　　御陰勇太の前にまずは貴様をどうにかしなければならぬようだな。

シ　ケ　ンス

勇太の病室の戸が叩かれる。勇太に付き添っている母親が応対するとス　ツを着た男が入室してきた。

「警視庁の常磐というものです」

男は名乗ると警察手帳を翳す。

「昨日の件でお話をお伺いしたいのですが、できれば息子さんと二人にしてみえませんか？」

「えっ？　ですが」

刑事の唐突な要望に母親は戸惑う。

「大丈夫だよ、ママ」

首に包帯を巻きベッドに横たわっている勇太が母親に進言する。

「なにかあったらすぐ呼ぶから」

「そっそう？じゃあ」

母親は渋々病室を後にした。

「悪かったね態々来てもらって」

勇太が刑事に云った。その声は喉を潰された後遺症のためか若干
囁れている。

「首より腕の方がいかれちゃってさ、メルうてないんだよ」

「乾闥婆さま、お勞わしく存じ上げます」

神妙な顔で勇太を氣遣う刑事。それはまるで悠久に仕える主人を
前にしているかのように。

「先日の呪われになったときも、心配で氣が氣でありませんでした」
「ありがとう」

勇太は屈託のない笑みで応じる。

「呪われぼっちに接触するためと、ヒロくんを挑発するために、掲
示板に僕を『呪って欲しい』って書き込んだはいけど、まさかあ
んなに強い呪いに襲われるとはね　　はは、最近の女子高生も侮
れないよね。まっおかげでレベルアップできたけど」

「……………」

「それに思ったとおり、ヒロくんはあの女と繋がっている。確信が
持てなかったから泳がしていたけど正解だったみたいだね。ゴレ
ムを作るためには人工細胞「キザン」が必要だ。今、純粋な「キザ
ン」を保有している人間は限られているから」

人工細胞「キザン」　　故ト　ル「シンラ博士が生み出したと
される、簡単な電圧操作でその遺伝子から細胞の形まで自由に想像
することができる夢のような代物。かつてはそれを用いて人造人間
を創造する構想まで持ち上がったが不幸な事故とテロ紛いの事件に
よって、人工細胞「キザン」表舞台から消失した。

「それでは」

「ふふ」

勇太はほくそ笑む。

Y u A 五年前、ウイルス性の「キザン」を散布し、この国 いや、この世界にリプルリバ スを 未曾有の混乱をもたらした女。

「恐らく二人に直接の面識はない。パソコンだよ。ヒロくんのパソコンをハッキングしてそこからあの女の取り憑いた先を捜し出すんだ。彼女が自由に行動できる力を付けてしまっ前にね」

「畏まりました、ではお大事に」

常磐は勇太に丁寧にお辞儀をしてから踵を返す。

勇太は彼に聞こえない程度の小声で、

「これで面目はたった。後は呪わればうちとヒロくんの直接対決を好きなだけ観戦してもいいよね そんなこと思うから今日も眠れない っ」と

至福を噛み締めた。

つづく

ヒロトカゲゝ消える僕ゝ

1

目が覚めると本堂に横たわっていた。

起き上がると思ったより体は軽く、幾分爽快でもある。本堂の戸を開けると、太陽はもう西に傾きかけていた。

「大智」

自宅に戻り居間に顔を出すと、風紗と隆盛が座っていた。

そして思い出す。なにがあつたのか。そして、自身が血塗れであつたと。

西日で……気付かなかつた。

「大智先輩大丈夫ですか？」

台所から現われた風音が呆然となっていたオレを案ずる。

「今、お風呂沸かしますから」

そう云つて彼女は風呂場に向かつた。

「お茶飲む？」

風紗が訊いてきた ので頷き、オレは上座に腰を下ろした。

「隆盛 」

恐い……だけど、訊かないわけにはいかない。

「勇太ちゃんと和毅くんは？」

恐る恐るした問いかけに隆盛は大きく頷く。

「安心しろ。勇太は命に別状ないし、和毅の方も傷ついたのはほとんどゴレムの腕だけで、本人はゴレムがくっついてた部分の薄皮が剥がれた程度で大事ないから」

「そうか」

それを聞いて少しは救われた。

「はい、お茶。熱いから気をつけて」

「ありがとう」

風紗が湯気の立った湯呑みを目の前に差し出してくれる。

「ねえ訊きたいことがあるんだけど、あそこに籠もってる間って、まあ食事は取らないにしてもトイレとかどうすんの？」

確かに気になることだろうな、それは。

「あそこにいるときは代謝力落とせるからする必要なくなるんだよ。冬眠してるのと同じ感じになるんだ」

「くっはっはっは」

行き成り隆盛が笑いだす。

「なんだよ？」

「くっくっ十回くらいおもらしたことがあるよな」

「ばらすなよっ」

くっそー隆盛めっ！風紗も思いつきり笑ってくれるし。

「しかたないだろ！前の日、水分取りすぎたりして突如、仕事が舞い込んできたときとかだったんだから」

「ふはは、で？今回は大丈夫だったの？」

「ああ、寧ろ喉カラカラだ」

そう云ってオレはお茶を啜った。

「そりゃそうでしょうね。丸一日籠もってたら」

「丸い一日っ 今日は何日だ？」

てつきり数時間だと思っていた。オレは慌てて訊ねる。

「二十四ですよ」

風呂場から戻ってきた風音が答えた。

「明後日はいよいよ体育祭ですね」

体育祭なんてどうでもいい。

二十五日、明日は。

「親父の命日……」

風音と風紗がはっとなる。

「じゃっじゃあお墓参りに」

「オレ、行ったことない　墓の場所も知らねえし」

関西のどこかの寺にあるらしいが……。行く気になれない。まだ、気持ちの整理がつかない。

「大智」

隆盛は月命日さえも、学校を休んで墓参りにいつている。

「オレ、今回はやめとくよ。お前のが心配」

「行けよ」

「でも」

「行けばいいだろっ！」

「……………」

また、あの笑い方　忍びを幸とするような。

「ちっ」

くそっ！

気が付けば目の前の湯呑みを引つ掴んで隆盛に投げ付けていた。

ばしゃ　ジユウ

「きゃ」

風紗の悲鳴。

「お前のそういうところが大嫌いだっ！」

仁王立ちして隆盛に罵声を浴びせ、オレは逃げるように自室に引っ込んだ。

「うう」

蹲ると血で黒ずんだシャツが目に入る。

「ちくしょう、ちくしょう……」

苦しい　悔しい　。湧き出る感情をどうすることもでき

ずに、オレは畳の床を殴り付けた。

「くそっ」

「大智先輩、入ります」

風音の声。そして彼女はオレの部屋に入ってくる。

「……………」

顔を上げることもできず、オレは床に縮こまり続ける。

風音は何も云わない。その代わりに彼女がオレの横にそっと腰を

下ろす気配が伝わってきた。

「隆盛は悪くないのに」

オレは懺悔でもするかのように呟いた。

「オレが弱いから、勝手にイライラしてるだけなのに」

そう、八つ当たりだ。

「大智先輩……」

「オレ、強くなりたい。誰にも迷惑かけないように。誰の力も借りずに、しっかり生きていけるように」

風音の手がそっとオレの背中に触れる。優しく、包み撫でるように。

「もし、そうになったら寂しいですね」

「えっ？」

ぼつりぼつりと風音は云った。

「だって好きな人から頼りにされなくなるのは、きつと悲しいことだから」

「……………」

「私も姉も隆盛さんも大智先輩のこと好きだから 支えられたり、支えたり、ずつとしていきたいんです」

「かざ」

オレは顔を上げ風音を見上げる。風音はそんなオレに微笑みかけてくれた。

「そして、それは不動尊さまと共に先輩のこと見守ってくださいている黎須さまも同じような考えでいらつしやると思いますよ」

「親父……」

父さんが今でもオレのこと。

「くっ」

「ごめん、父さん。オレ、まだ父さんの死を受け入れることができない。けどもし、みんなに支えられ少しだけ強くなって、いつか乗り越えることができたなら、そのときはちゃんと挨拶にいくから」

それまで待っていてください……。

「これか……」

パソコンに向かいながら僕は呟いた。

第二次性徴不全　　今は幻の人工細胞「キザン」を生み出した故ト　ル「シンラ博士がかかっていたと云われる原因不明の奇病。とかく細胞の異常活性に伴う成長プログラムの逸脱が起こり、見た目にすぐわない筋力を持つ、大人になれない人間が誕生するらしい。中には脳の活性も起こり、博士の天才ぶりをそれに位置付ける説もあるが　　あのバカそうな呪われ屋を見たかぎりでは眉唾だろう。」「よもや霊力失陥だとはな　　」

原因不明だというのも頷ける。

今の科学技術で霊的構造を認識するのはまだ難しいだろうからな。

「しかし、自分も呪われている人間が呪われ屋とは　　」

風邪ひきの医者に風邪を見てもらうような滑稽さがある。

恐らく普段は別の霊力で封印してあるのだろうが　　。

Y u A　はもつと詳しく知っているだろうか？

近況報告がてら訊ねてみるか。

「メルしょ　　ん？」

突然、パソコンがフリ　ズした。

「ハングアップ!？」

そして次々とファイルが開いていく。まるで、何かを探しているように。

まさかハッキング?ファイアウォ　ルを突破したのかっ!?

「くそっ!電源を　　切れないっ!ステルスが潜伏していたのかっ!？」

目的は　　僕のパソコンからメルが送信される　　Y u

A　　かよ!?

ハッ力は　　Y u A　のパソコンに侵入するために僕経由でハッ

キングしているのだ。

「バッテリーを」

プスン

ディスプレイがブラックアウトする。

「クラッキング……」

システムがほぼ全滅した。

しかも Y u A からの攻撃で。

Y u A がウイルスを送り付けてきたのだ。ハツカ 諸共心中
するように。

まさに蜥蜴の尻尾きり。僕を切り捨てた。

真っ黒になったディスプレイに力チ力チと文字が浮かぶ。

《a p a r t i n g x x x》

別れのキス 捨て科白のつもりか。

「うぬあああ」

バキッ！

2

次の日、隆盛は早朝から墓参りに出掛けたらしい。

オレの方はなんとなく腐った気持ちをかかえ居間でずっとテレビ
ゲームをやっていた。

「あつ隆盛さんからメルだ」

同じく居間でパソコン（隆盛のお古）を弄くっていた風紗が云っ
た。

「『お土産なにがいい？』だってさ」

「八橋」

オレの速答に風紗は首を捻る。

「行ったの京都じゃなくて和歌山じゃなかったかしら？」

「和歌山？じゃあ蜜柑かなあ」

「まだ早いわよ。収穫できるの」

「それもそうだな　じゃあ、なんか他にあったか？」

「和歌山ラ　メンとかなかったかしら？」

「さあ、あっても持つて帰れねえだろ」

「そうよねえ」

二人で考え込む。めんどくせえ。

「もう、なんでもいいよ」

「『なんでもいいです』って」

メルを返す風紗。

「なんでもいいとかいつてさ、ネ　ム入りのキ　ホルダ　とか買ってきたりして」

「うわっアレ貰ってもあんま使わねえよなって　もう、話し掛

けるから事故っちまったじゃんか」

レ　スゲ　ムでコ　スアウトしてしまう。

「うわっ人のせい？」

「うっ」

「てか、法師さま朝からゲ　ムしすぎ。体に悪いわよ」

「風だつてパソコンずつとやってるじゃねえか」

オレの指摘に顔を引きつらせる風紗。

「……だって、今までずつと学校でしかやれなかったんだもん。せ
つかく隆盛さんに大ちゃん弍号機（パソコンの愛称）をもらえたし
思いつきりできるから。この家が今だに光じゃないのが気になるけ
ど」

「……………」

嬉しそうにパソコンを撫で回しながら風紗は語る。

「パソオタ」

「ムッ法師さまこそゲ　マ　じゃない」

「……………」

沈黙。

「パソコンがそんなに面白いかね」

「ゲ　ムなんてガキくさいわよ。実際、小学生みただけど」

「何をっ！」

「何よっ！」

「ハイハイハイ」

睨み合うオレと凧紗の間にどこからともなく現われた風音が割り込んでくる。

「二人とも今からお掃除するので表で遊んできてくださいね」

『えっ！？』

菩薩のような微笑みにオレたち二人は家を追いだされてしまった。

「風音は家事オタクだな」

玄関前で佇んで呟くオレ。

「いやいや、それがね」

凧紗は声を潜めて云う。

「ほら、こないだ引越してきたときに、あの娘のダンボール開けたんだけど、そしたら物凄い本がいっぱい入ってたさ」

「もの凄い本？」

「どんな本だ？」

「うん。私の口からはちよつと」

思い出したのか顔を赤らめる凧紗。ますます気になる。

「あゝそうねえ……きつと、隆盛さんとは趣味があつたろうとだけ

」

「みなまで云うな」

何となく想像がついた。

「あの風音が……趣味、疑うな」

「ねえ」

秋風がどこか冷たい。

「これからどうする？」

「ああ、オレ病院行くかな」

「勇太くんたちのお見舞い？」

「ああ」

凧紗は少し考え込んでから云う。

「じゃあ私も行く。勇太くんにもう一度ちゃんと謝っておきたいし」
「そうか」

オレたちはとぼとぼと病院に歩きだす。

「見舞いの品、何がいいかしら？お花は買つとして、果物とか？」

「そりや当然。」

「ケ キに決まってるんだろ」

「自分が食べただけじゃ？」

「……………」

ちっバレたか。

和毅の入院している病室を訪れる。彼は大部屋の一番端のベッドに座って窓から空を見上げていた。

「あつチビ太兄ちゃん」

和毅がオレに気が付く。

「チビ太云うな！」

「へへ、見舞いにきてくれたんだ」

「ああ」

和毅は思ったより元気そうに見えた。それでも両腕に巻いた包帯が痛々しい。

「こんにちは、和毅くん」

凧紗が挨拶する。すると和毅はにやけて訊いてくる。

「ういつスって、ねえねえ何？この可愛い姉ちゃん、彼女？」

「ちがつ」

オレが慌てて否定しようとする、凧紗はしれつと云う。

「法師さまの嫁候補の一人よ」

「嫁っ！？」

「ちなみに、私の他あと二人いるわ。ああ、一人は婿候補だったかしら」

それはもしかや隆盛のことかよ、オイ。

「なんだか知らないけど、兄ちゃんモテるんだな……以外と」

「……………」

否定はしないがあまり嬉しくない。だってほぼ変態だもん、その人たち。自然と渡部りか子の顔が脳裏に浮かんでくる。

「お土産にケ キ買ってきたわよ。お姉ちゃんが食べさせてあげるね」

「わおーラッキー！あーむ」

風紗はフォークでショトケ キを和毅の口に運ぶ。和毅は大口を開けてそれを頬張った。

「うっめ。しかも、こんな美人からのご奉仕って、たまには入院してみるもんだな」

ニコニコ顔で云う和毅。

今し方、独りで空を眺めていた表情とのギャップ なんか力

ラ元気みたいで複雑な気持ちになる。

「あんま、ムリすんなよ」

「ん？」

「だからさ、そうやって平気そうな顔するなよ」

「はっ」

和毅は失笑するように片方の頬を引き上げた。

「あん、男がぐだぐだ愚痴零したり、人前で泣いたりできるかよ」

「……………」

よく人前で泣いて、愚痴零してるオレっていったい……。

「だいたい、オレは腕なんかなくったってよかつたんだ。まっ生えればめっけもんって感じで送られてきた薬付けてただけだし」

嘘だ。本当はそんな簡単な言葉で一蹴できるような思いのほずがない。

子供は子供なりのプライドがそう云わせているだけだ。

「寧ろ、オレの兄ちゃんの方が落ち込んでよ。チビ太兄ちゃんからも励ましといてよ」

「ああ」

「あゝむ、むぐむぐ」

兄への配慮。そして和毅は嬉しそうに風紗の手からケ　キを口に
する。

頑固ものだな。潔すぎるほど。

いや、そうならざる得ないのだ。明るく振る舞って、人から嫌わ
れないように。

それが和毅の生きる術。

ない腕の代わりに、人よりも多くの他人の手助けが必要な生き方
をしなければならぬものの。

たとえ屈辱に苛まれようと、平気な顔を貫く。それが自分の誇り
なのだと云いきかせ。

強い。強くなければ生きていけないのか？

オレには　オレだったら　。

「もう、行くのかよ」

ケ　キを食べさせ終え、少しの間談笑してからオレたちは和毅に
暇を告げた。

「ああ、勇太くんの方も見舞ってやらなきゃなんねえからな」

「勇太か」

和毅の表情が消える。

「あのさ　　今度、勇太に会いにいくのにオレに付き合って欲し
いんだけど」

目を伏せながら和毅は云った。

自分の意志ではないにしろ、勇太を傷つけてしまった罪悪感。一
人で会いに行くには心細いのだろう。

「ああ、退院したらうちに来い」

オレの言葉に和毅はほんの少しだけ縋るような目でオレを見た。
だがそれはすぐに強気なものに変わって、

「オレはチビ太兄ちゃんじゃなくて、風姉ちゃんに云ったんだけど
？」

とクスクス笑いながら云った。

「あつそ」

「へへ」

和毅は照れ臭そうに笑った。

どうやら口が減らないのも性分のようなのだ。

「あつ大智兄ちゃん。風紗姉ちゃん」

勇太の病室を訪ねる。さすがに金持ちだけあってVIPルームと呼ぶべき個室だ。

「よく、風音と見分けつくな」

オレが感心して勇太に云うと、横にいた風紗がジト目でオレを見る。

「法師さま、風音と私、見分けつかないんだふうん」

「あついや　その　」

見分けて欲しいならどっちか髪切れ、とは口が裂けても云えそうにない雰囲気だ。

「霊力の質は同じだけど、若干配分に違いがあるからね」

ほら、勇太も見た目じゃなくて霊視で見分けてる。ってか、そんな微妙な違いが分かるんだ、勇太。なんでオレの周りには、本業のオレよりも霊感が鋭い奴ばかりなんだ？

「勇太くん……体、大丈夫？　私　」

風紗は謝罪の言葉を選んでいる。大変なことをしてしまったという自覚があるからこそそう軽々と言葉が出てこないのだろう。

「もう、気にしないで風紗姉ちゃん」

「えっ？」

勇太が風紗の言葉が出るより先に柔らかに許容を示す。

「僕もママももう風紗姉ちゃんのこと悪く思っていないから」

「でも……」

戸惑う風紗に勇太は首を振ってみせる。

「人が人を傷つけるときって、無知すぎることに追い詰められてし

まっと思わず行動してしまうときに原因があるもんでしょ？」
そうかもしれない。

無知だと人の気持ちを計りかね、知らず知らずに誰かを傷つけることがある。感情を操作する方法を知らないということも。

そして心身に余裕がなくなれば、おのずと何かを攻撃してしまうものだ。

「前者は無知の知を怠ることに、後者は追い詰められた状況によりよい回避行動をとろうと努力しないことにその罪がある。でも、風紗姉ちゃんは無知の知を知らないほど愚かではないし、苦境に耐えようと必死で努力してきた。僕はそんな状況で過失を犯してしまつて、それを後悔して懺悔している人を責めれるほど偉い人間じゃないもの」

「……………」

大変感動的で素晴らしいお話ですが、

「勇太くんホントに小五かよっ!？」

オレは思わず思いつきりつつこんでしまった。

「へへ、前世の記憶かもねえ」

へらへらして云う勇太。冗談に聞こえねえよ、おい。

ん……………この子、やっぱり怪しいよな。

「なあ勇太く……………」

ガラガラ

オレの言葉にかぶって病室の戸が開く。ランドセルを背負った男の子(でも、やっぱりオレと同じくらいの背丈)が入室してきた。

「ヒロくん、お見舞いに来てくれたの? 嬉しいなあ」

「うん」

勇太にヒロくんと呼ばれた子は柔和に微笑んで頷く。凄く優しそうな子だな。

「こんにちは」

ヒロくんと目が合いオレは彼に挨拶する。

「はじめまして」

ヒロくんは丁寧にお辞儀をしてきた。なんだろう、気品があつて、
勇太とはまた一味違った人を引き付ける魅力がある子だ。

「……………」

あれ？でもなんか……。

「呪い……」

風紗が搾り出すような声で呟いた。

やはり、そうだ。この子、呪われてる。

「ごめん、今日はもう帰る」

「ちよつまっ」

ヒロくんはそう云うと引き止める間もなく慌てて病室から出てい
った。

「勇太くん、今の子」

「ヒロくん？僕の友達だよ」

「呪われてたけど知ってた？」

「うん」

平然と頷く勇太。

「いつから？この間、キミのクラスの子が呪われたときに見落とし
てた？」

「ううん。もつと前からだよ」

「じゃあ、なんでオレに教えてくれないんだよ。友達なんだろう！？」

「うゝん」

オレの問いに考え込む勇太。

「なんだろ。呪いって云つても誰かに攻撃受けてるんじゃないかと、
邪気にあてられてる感じだし、それにさヒロくんあの状況を甘んじ
てるんだよね」

「甘んじてる？」

「そう、好きで呪われてるんだ」

「そんな奴いるわけじゃないか！？」

好きで呪われてる奴なんかいてたまるか！

「だからね。えゝと……そうっ！リストカット症候群

そんな

感じ!!」

「リス　？」

なんだ、それ？

「手首を切ることが快感でやめられない人のことよ」

風紗がオレの心の声を聞いたがごとく説明してくれる。

「自殺願望者って何か？」

「いや、そうじゃないのよ。自傷行為っていうの。自分がね今生きてることとか、自分と世界の関係とかが実感なくなつて　痛みとか流れる血とかで、自分取り戻せた気になつたり　どうしようもない破壊衝動を人にぶつけてしまふんじゃないかって恐くなつたりしたときとかにやつたり　血が抜ける感覚とか、首閉めて血が頭に上っていく感覚とかが気持ち良くなつて癖になつたりするの」

「そんな奴　」

いるのか？そう続くオレの言葉。だが、風紗のその口から出てきた言葉に絶句する。

「私もそうだったから」

「っ!？」

「私も風音に呪いを移そうと決意するまで、どうしようもなくてやつてたから　」

胸がざわざわする。心が感情で押し広げられて破裂しそうだ。

「今は　」

怖い。

「今は違うんだろ？」

肯定してくれ!

「大丈夫よっ!今は違うわ!今は辛くてもその気持ち分かってくれる人たちがいるから」

「.....」

ほっとした。安心と脱力が同時に訪れる。

「ほら、健全じゃないから　治さなきゃならないことだろ？」

「そう?」

聊か責め立てるように詰問するオレに逆に勇太は訊きかえしてくる。

「そんなに健全じゃないこと?」

「だってそうじゃないか!」

「でもさ、そう決め付けられるほどみんな健全なの?」

「えっ?」

「たとえばさ、携帯電話を忘れてしまって、いても立ってもいられなくなる人とか結構いるでしょ? 『キミがいなくちゃ生きていけない』とかプラトニックかさにきて、恋人に依存する人とか。夫に相手にされなくなってドロドロに子供にかまってダメにする青い鳥症候群。ゲムとか漫画とかにはまって現実見ようとしない人。そうそう、買物依存症とかもあるよね」

「っ!」

『大智はあプチ買物依存症だあ』

隆盛の言葉が頭に響く。

「そういうのってさ、人口比率の問題とか、折り合い付けてなあなあでなんとかやっていくとかさ、みんなそうやって生きていつてるんじゃない? 健全じゃないとか『病氣』とかレッテルはってさ、そんなに傲慢になれるほどみんなちゃんと生きてるの?」

「そう だけど」

そうかもしれないけど。

*

思わず逃げ出してきてしまった。

「.....」

どうせもう御陰勇太には僕のことを見透かされている。逃げる必要はなかったようにも思えるけど.....。

「アイツの前で醜態はさせない」

御陰勇太にみつともないところを見せるわけにはいかないんだ。

「待つて！」

病院を出てトボトボ歩いているところに、背後から声をかけられる。

振り替えるとあの呪われ屋が僕の方へと走ってきた。

「……………」

改めてみると奴は凄い霊力を纏っている。神々しく黄金に輝いて見える。だが、それは奴の本来の霊力ではない。どこからかその荘厳な霊力を調達し、自身の呪われた霊力を押さえているのだ。

他の霊力を取り込み操る、そういった意味ではこの呪われ屋と僕は似ているのかもしれない。ただ、その使い道も、その必然性もまったくもって別のところにあるが。

「はあはあ キミに……キミとちょっと話がしたいんだ」

呪われ屋が肩をせいぜいいわせながら僕に云った。

「話ですか？」

「うん」

どうせくだらない話だろう。

でも、気晴らしにはなるかもしれない。

この似非坊主に人の心と向かい合うことがどういうことなのか、存分に教えてやる。

*

勇太の言葉に空恐ろしくなった。

呪い それが人の中に渦巻く感情の産物であり、自分を支配する精神の脆さの証明なのだと改めて気付かされる。

オレは爆発しそうな感情を行動に代え、勇太の病室を飛び出してヒロくんのもとへと走っていた。

「いいですよ。そのベンチでお話しましょうか」

「ありがとう」

よかった。

ヒロくんは快く承諾してくれた。

「オレ、不破大智ってんだけど」

「縫取織ヒロトです」

なんだろ。

凄く聞き取りやすいっていうか、この子の声を聞くと、さっきまで動揺していた気持ちが落ち着いてきた。

確かにこの子の体の中に邪気の坩堝を感じる。それでも不安定の中の安定というか、ぐちゃぐちゃに積み上げられた荷がかえって均衡を保っているような、そんな高揚する感覚を覚える。

やはり勇太の云う通りなのか？

「オレ、こう見えてお坊さんの端くれでさ」

「ええ、知ってますよ。勇太くんに聞きました。呪われたときに救ってくれたって」

「うん……それで、云いにくいんだけど」

「僕の呪いが分かるんですね」
核心をつかれどきとする。

「勇太くんが何か云ってましたか？」

「あつえつと」

なんって云ったらいんだろう？

「その キミが呪われている情況に甘んじているって」

「その通りです」

爽やかに首肯するヒロくん。

「あの、今はキミに特別な症状は出てないみたいだけど」

「ええ、僕は周囲の霊力を取り込む体質なんですよ。最近は正常な霊力のところって少ないじゃないですか。だから自然と邪気が体に溜まるんです。でも、抵抗があるからか、多少ストイックになる程度です。寧ろ精神安定に役立つるように思ってますよ。そういうの共生っていうんですかね。ほら善玉菌みたいな感覚ですか」

「……………」

邪気を逆に利用　もしそれが本当だとすればそれほど悪い情況ではないのかもしれない。だけど。

「うん。キミの云ってることは分かるんだけどね。　。霊力の制御って結構大変なことだろ？だから、今はよくても急に豹変して大事になるかもしれないから……オレの云ってること分かる？」

「ええ、分かります。僕のこの呪い、お兄さんがどうにかしてくれると」

「そうなんだ！やっぱり危ないから」

理解してもらえた。勇太があんなこと云うから心配してたけど、ちゃんと話せば分かるじゃないか。

「お兄さんは優しいですね」

「えっ？いやそんな」

讃められた。なんか嬉しい。

「でも余計なお世話です」

「っ！？」

「さっきも云ったけど僕はこの状況を甘んじているんです。後の災いが心配されても、僕はこの状態が気に入ってるんです」

「だけど」

オレは狼狽える。分かってもらったと思った矢先のこれ。やっぱり一筋縄ではいかないのか？

「気に入ってるかもしれないけど、危ないのに何もしないのは間違ってるだろ！？」

「お兄さんは潔癖性なんですね。それはとてもいいことだと思います。でも、僕はきれいなものを糧としていけるほど恵まれてないんです」

「どういうこと？」

「呪い　好きなんです」

ヒロくんは変わらないの笑みで囁いた。

「好き？」

「狂ったもの、醜いもの、呪い　好きなんですよ、僕」

「……………」

ほんの少し恍惚を顔にするヒロくん。

「狂ったものが好きって あの、オレ分らないけど…………それ
はなん ？」

疑問が次々浮かんでるのに言葉にすることができない。

「気持ちがいいんです。そういうの肌で感じると」

「気持ちがいい？」

どうということだ？わけが分からない。

「お兄さんには理解できなくて当然です。可哀相に」
可哀相、オレが ？

「ふふ、第二次性徴不全 これがお兄さんの体を支配している
呪いの名前です。ご存じでしたか？」

「第二次性徴……………」

「まさか自分の体が正常だなんて思ってたんですね？」

それは ！

「ふふ、その年にもなってマスもかけなくせに、自分が不能だと
気付かないはずがありませんもんね」

「今、そんなこと関係ないだろうっ！？」

怒鳴り声を上げてしまう。

恥ずかしかった。なんで、会ったばかりの子供に人のそんな体
のことまで 。

「関係ありますよ」

「っ！？」

「お兄さんはこの呪いのために大人になれない体です。つまり、一
生快樂というものに無縁です。そんなお兄さんに僕の気持ち、悦を
手放せない人間のこと、理解できないでしょう。そして、人の性癖
を他人にとやかくいわれるとどういう気分になるか、これで分かっ
たでしょ？」

頭になる敵意。近くを通る車の排気ガスが妙に鼻に付く。

あれ？なんでこんなことになったんだ？頭がごちゃごちゃして、

気持ち悪い。

*

ふん、滑稽だな。

呪われ屋のくせに、僕が言霊にのせてお前を呪っていることも気付かないなんて。

「ああ」

呪われ屋は文字通り頭を抱えている。いいざまだ。

「呪われてるのを助けたいのに　　助けたいだけなのに　　な
んでこうなるんだ？」

ふん、お前のような弱者が軽々しく僕に触れようとするからだ。

「そもそも、なんでオレの体のこと」

「和毅さんの一件ですよ。あなたのあの異変を見て気付いたんです。過去に症例がありますからね」

「あっそっか」

「さて、ここからが問題です。僕があ的事件の被害者でもなければ、目撃者でもないとするれば」

「勇太くんを呪ってるのはお前か……」

呪われ屋は驚愕というより、自身で云っていることの半分も理解していない感じで呆然となっている。

「ご明察　　といっても、これだけヒントを出して気付かない方がおかしいですけど」

「間違っている」

呪われ屋は声を震わせて云う。

「こんなの間違っている」

「いいえ。間違ってますよ。なぜなら人を呪ってはいけないという法律はないんですから」

「法律？」

「ええ。四年前、この国で爆発的に特殊能力を持つものが増える事

件がありました。それから呪いは抽象的な恐怖から、現実の驚異となった。でも、この国を動かしている薄鈍の大人が危機感を覚えて、法ができるのは恐らくあと数年はかかるでしょう」

「そんなことじゃない、モラルの問題だ」

呪われ屋は心の苦痛に顔を歪めながら、それでも僕を説き伏せようとしてくる。案外しぶとくていじめがいがあるな。

「じゃあ、訊きますけどなんで人を呪ったらいけないんですか？」

「人を傷つけることも、自分を危険に曝すこともよくないことだろ！？」

「そうですか？では、あなたは人を傷つけたことはないんですか？」

「それは」

顔面蒼白にして口籠もる呪われ屋。

「あなたは今生きている情況に誰一人として犠牲を出していないのだと、胸を張って云えますか？」

「それは それは云えないけど。自分から傷つけようとか思ってるわけじゃなくて……だってそれは」

「そう、故意じゃない。不可抗力というやつです。でもそれは未必の故意を誤魔化している言い訳にすぎないでしょ？」

「未必の故意？」

今日々の高校生はそんなこともしらないのか。

「ええ。罪を意図的に望まないにしろ、自分のしたことからなにか問題が発生するかもしれないと思いつながら、そうなっても仕方ないと認めて行動する心理状態のことです」

「……………」

「分かりませんか？つまり、人は理想を語りながらも、生きるために何かを犠牲にしなければならないと認めている。その諦めが社会に不協和音を生み出し、罪と呼ばれる事象が発生していることも知っている。そう犯罪は発生しても仕方ないとみんな思っているんですよ。社会の歪みをどうにかできるほど人は強くないから」

「あうっ」

やっと理解したか、この脳 りん。

「自分たちを脅かす犯罪者は、過去や現在や未来、人類の未必の故意のツケだということです。これこそ呪いの連鎖とは思いませんか？」

「呪いの 連鎖……」

「こういうことありますよね。一つ大きな事件が起きると立て続けに同じような事件が起こるなんて。アレはね、メディアという媒体が誰かさんの背中を押しているんです。自分と同じような境遇の人間を知って、感染してしまうんです、心が。そう、テレビや新聞やネットが呪いの依代となっているんです。自殺者や犯罪者を助長させる呪い」

「はあはあはあはあ」

呪われ屋の息遣いが荒くなっていく。壊れるがいい。脆弱な人間の癖に僕に楯突いたことを悔やみながら。

「ああ」

「そうだ、テレビといえはなにか大惨事が起きたとき、片方の脳では被害者を哀れみながら、心のどこかで死者の数がどんどんとカウントされていくことに少なからず興奮を覚えることありませんか？ 酷いとか口では云いながら、自分より可哀相な人たちを見て高揚する。そういう感覚に近いと思うんですよ。僕が感じている気持ち」

「うぐう」

呪われ屋は吐き気をもよおしたように口を押さえる。

「同情と哀れみは優越を得るための糧であり、奉仕と救済は支配を得るための手段です。人は善という行為を以て他者を掌握し、愛という甘美な言葉で他人を縛る。教育は洗脳、執着は暗示の賜物。それが呪い。そう、この世界は呪いに満ちている」

「呪いに……満ちてる？」

「そうです。霊力の多い少ない、故意か未必の故意かの違いはあっても、誰しも呪いに手を染めている。なのに何故、その情況を楽しんでいるという理由だけで僕が間違っているんですか？」

「僕が……間違っているんですか……」

呪われ屋は鸚鵡返しに僕の言葉を反芻すると、がっくりと項垂れた。

「……………」

ふふ、落とせた。が、これは一時的な衰弱で終わるだろう。僕のみ力だけではこれが精一杯だ。黄金の霊力がギリギリのところで防いでいるしな。

でも幾分憂さ晴らしにはなったかもしれない。

僕はベンチから立ち上がり、

「もし、僕の問いに納得の行く答えを返せたときは　お兄さんの救い手に……素直に応じましょう」

「……………」

答える気力も失った呪われ屋を残してその場を後にした。

3

箸が進まない。風音の作ってくれた料理は今日も絶品だというのに。

「……………」

オレは二・三口大根の煮付けを口に運んでから、銜え箸で固まっていた。

「あの、お口に合いませんか？」

風音が心配そうに訊いてくる。

「あついや、そうじゃなくて　ちよつと食欲がないんだ」

あの子の言葉が全身にこびり付いている。食道を塞ぎ、胃を縛り付けているみたいだ。

「何かご心配なことでも？」

「いや　」

なんでもない　　そう言い掛けると、
「法師さまっ！ー！」

風紗が箸をテブルに叩きつけ怒鳴った。

「ウジウジするくらいなら、言葉にしてよ！吐き出さなきゃ溜め込むタイプでしょ、法師さまは！？」

「ごっごめん」

あまりの迫力にオレはたじろぐ。

「どうせあの子になんか云われたんでしょ？あの後からだもん。法師さま沈んでんの」

「うん」

「何、云われたの？」

こんなこと、風紗に云うべきだろうか？でも、オレ適当に誤魔化すとかできないし。

「なんで人を呪ったらいけないのって訊かれた」

「っ！？」

「あの子だった。和毅くん呪って勇太くんを殺そうとしたの」

「そうだったの」

そう驚きを洩らす風紗の顔が見れない。

「オレ、人を傷つけるのはよくないだろ？って云ったんだ。そしたら」

「そしたら？」

「そしたら、あんた人のこと傷つけたことないのかよって云われた」
「……………」

「その後、色々なんか云われて、全然わけわかんなくなっ
あの子が云うにはみんな多かれ少なかれ呪ってるって……それなの
になんで自分だけが間違っているんだって　オレ、答えられな
いよお」

涙が止まらない。

和毅は男は人前で泣いたりできないと云った。

自分でも薄々気付いていたけど　今日、きつぱりとあの子に

『お前は大人になれない可哀相な人間』なのだ宣告されてしまった。

オレは大人に　男になれない。

だから、ずっと弱いままなのか？

「うつぐ　うつ　ぐす　」

食卓に響くのはオレの嘆きだけ。

ときが死んだような時間が流れる。

「私は　」

やがて風紗がときを復活させる。

「私は　私も、なんで人を呪ったらいけないのかとか分からない
い」

風紗は喉を震わす。

「決して呪いを肯定するわけじゃないけど。でもね、もしあのとき
風音のことを呪わないで、一人ですっと悩んで苦しんで、行き着く
先が自殺とかだったりなんかしたらって思うと」

風紗は涙を吞んでいる。自分が泣ける立場ではないと。

「風」

姉が妹を呪った。風紗はそのことをずっと悔やみ続けている。だ
がもし、風紗が苦しみの末に自ら命を絶っていたとしたら、それは
風音にそれ以上の嘆きと罪の意識を背負わせていたことだろう。

「私はすごくいけないことをした。いくら懺悔してもそれは償いき
ることはできない。だけど今、そう思える自分は誇りたい。私がこ
んな風に思えるようになったのは法師さまに出会えて、法師さまが
私を救ってくれて、今このときも私の横に座っていてくれるから。
それだけは決して揺らがないう実だから」

「うつぐうつ　」

毎日、毎日、生きてて不安で　自分のやってきたことが正し
いのか分からなくて　これから先、どうなっていくのか全然見
えなくて　それでも、そんな言葉を貰えるオレは　。

「うつぐ　……それが　ひつ……オレの答えだ……」

ああ、オレはあの子を　ヒロくんを救いたい。ただ、それだ
け。

「姉さん、大智先輩　ありがとうございます」

風音が深々と頭を下げた。

*

壊れたパソコン 自らの拳でひしゃげたディスプレイの前に
佇む。

何もすることが思いつかない。

夜が……長すぎる。

「くそお」

Y u A 世界で唯一信用がおける人間だと思っていたの
に。

《突然だけど、こんにちはヒロくん。私はY u A。特殊な霊能力を
持つキミにプレゼントをあげるね》

彼女からの初めてのメルを思い出す。

《キミは選ばれた人間だから 》

彼女はいつも僕を讃えた。

《ヒロくんには私がついてるよ》

いつも優しくかった。

《大好きだよヒロくん》

僕を必要としてくれた。

《恐がらないで。キミの気持ちを世界中に分けて上げてるだけだから》

なのになんでっ！

「……………」

苦しい。もう、この手があなたに届くことはない。

「ちくしょう」

呪われろ、呪われろ、呪われろ！

「呪い……そうだ、今日奴の見舞いに来ていた女」

あの女の体、どす黒い靄で渦巻いていた。御神木の呪いには劣るものの、あれを僕が有効に使えば大量の人間を呪うことができる。

「ふふ」

僕は机の引き出しを開け、通販で手に入れたスタンガンを手にする。

ジイ

迸る閃光。

誰にも僕の呪いを否定なんかさせない。させるものか。

4

「オツハ　今日は運動会日和だな」

隆盛がハイテンションでオレのことを迎えにきた。

「お前、実行委員なんだから先に行かなくていいのかよ？」

「式を先にやってるから全然オツケー！それより土産買ってきたぞ。これで機嫌治せ」

「これはっ！？」

「まさかっ！！」

隆盛から手渡された土産を手にし驚愕するオレと風紗。

『ペナントっ！』

そう、三角形で和歌山とか刺繍されてあつて壁に飾る代物。

予想を遥かに超えた　貰っても微妙な気分になる土産物　を拵えてきたよ、この男。

「さすがね、隆盛さん」

「ああ一筋通った変態だ、こいつは」

オレと風紗がぶつくさ云っていると後ろで見ていた風音が感嘆の声を上げる。

「うわぁ素敵なペナント。ちょうど居間の壁が寂しいと思ってたんですう、助かりましたね」

心底目を輝かしている風音。

てか、飾るんだ　コレを。

「そうだろ、そうだろ」

風音のコメントに大きく頷く隆盛。

「ほら、この蜜柑の刺繍がまた秀逸で」

「ええ、ホントに。そうだっ！柑橘系の香水を染み込ませてみたらいいかもしれません」

「おおっそいつはエレガントだな！」

なんか二人で盛り上がってるし……。

そうか……隆盛と風音　二人は周波数が同じなんだな、電波の。

『ただ今より、第四十九回・真鍮高校体育祭を開始します』

ポンポンと打ち上げられた花火の音。古くさいスピカからパチンコ屋の開店したときよろしく派手な曲が流れ、運動場に集う生徒や観客の拍手が鳴り響く。

「……………」

そんな活気ある情景をオレはテントの中から眺めていた。

連日の疲労を考慮に入れ、結局オレは医務用テントで見学することにしたのだ。

それはつまり、

「ふふ、ラッキ　ね！キミと一緒に過ごせるなんて。不破大智くん？」

渡部りか子が一日横ににいるという情況なわけで。

「いいか！？」

「？」

早くも躍り寄ってこようとしている渡部にオレは凄む。

「オレに指一本でも触れてみる！絶対、スクハラで訴えるからな！？」

「スクハラ？」

「校内でのセクハラだっ！今、結構問題になってるんだからな」

「うん。スクール・ハラスメント（学校内での嫌がらせのこと）で

しょ。知ってるけど、まさかキミのお口からそんな高等な単語が出てくるなんて……」

首を捻る渡部。くそっバカにしゃがって。

「上条くんの入れ知恵ね」

「うっ」

その通りだったりなんかして。

「ビンゴだよん。りか子ちゃん」

隆盛がピ スしながら医務テントにやってきた。渡部はいい年こいて膨れっ面して、

「もうっ！ いけずう」

今にもプンプンとか云いそうだ。

「はっはっはっ目が届かないところでオレの可愛い大智にちよっかい出されてもかなわんからな」

「誰がいつお前のものになったんだよっ！」

「このう照れ屋さんめ」

隆盛が椅子に座っているオレの頭を撫で繰り回す。ああ、もう鬱陶しい。

「何しに来たんだよ、お前」

「ああ、そうそう。走ってるときとかにさ、邪魔になるから法具を預かってもらおうと思って」

そう云って隆盛は手にしていた法具を外した。

「大事に」

キーン

「ん？」

派手な音を垂れ流していた運動場のスピカがハウリングを起こしたと思うと急に音楽が止んだ。その代わりにジイ ジジッとノイズが入り始める。

「変だな？」

「ああ、妙 うっ！！」

突然、隆盛がうめき声を上げ頭を抱えて膝を付く。

「どうし　　っ!？」

「うつ　　うあが　　ぐう　　」

訊ねる間もなく隆盛は地面に崩れ落ちた。

「どうしたんだよ、隆盛っ!？」

ジィ　ジジッ

ノイズが頭蓋に響く。

「うつ」

頭が微かに痛い。

ガタッ

「渡部っ!」

渡部が椅子から崩れ落ちた。気絶したようだ。いや、渡部だけじゃない。視界に映る人間全てがバタバタと倒れていく。

「くっ」

この感覚。以前体験したことがある。

「……風……」

*

「うつうつん？」

女が目を覚ます。

「こっここは？」

「体育館倉庫の中ですよ」

声を掛けると女は斜め前の跳び箱に腰掛けている僕を見上げる。

「あなたは？」

「動かないほうがいいですよ」

チリチリ

立ち上がるうとする女にスタンガンを見せ付けた。

「……………」

「それにしても、都合よく一人きりでいるところに出くわせてよかった」

僕は女に近付く。彼女は怪訝そうに僕の顔を見上げるだけに止まっていた。怯えているのだろうか？

「うん？おかしい」

黒い靄が見えない。昨日は確かにこの女から溢れんばかりの邪気を感じたのに。

「あなた、昨日呪われ屋と一緒にいた人ですよね？」

「それは私よ」

「っ！？」

背後から声がした。振り向くところにいる女と同じ顔をした女が入り口に立っている。

「お姉さまっ！」

「姉？双子か」

「そう。あなたが用あるのは私の方でしょ」

確かに。昨日、見かけたのはそっちの女の方だ。辛うじて押さえられている邪気が今にも溢れださん勢いで体の中に渦巻いている。

「妹は放してくれないかしら？」

「そうですねえ」

僕は姉の方を警戒しつつ、妹にスタンガンを押しつけて思案する。

「さっさとしなさいよ」

「っ！？」

「あんたに協力してやるから、妹を放せつつってんでしようが！」

ほう、意外なことを云う。

「あなたには僕がして欲しいことが分かってるんですか？」

「呪いたいでしょ？私の呪いを使ってみんなを呪いたいんでしょ？勇太くんの前に法師さまのことをどうにかしたいから」

「……………」

大した靈感だ。全てお見通しか……。

「あなたはそれでいいんですか？呪いに利用されて」

「はん。可愛い妹に二度もそんなもの喰らわせられるよりましでしょ？火傷とか残らないでしょうね？」

「服の上からでしたから、それは大丈夫と思いますけど……」

この女、妹のために僕の呪いに加担するというのか。

「本当にいいんですか？」

「いいって云ってるでしょ。あんたさ、私が勇太くんのこと呪ったから、それに触発されて勇太くんのこと狙い始めたんでしょ？」

「っ！？」

こいつが先に御陰勇太を呪った張本人？

ほんとかつ！？

厭、これだけの霊力があれば確かにあいつにも通用する呪いをかけられたかもしれないが。

「さんざん失敗していい加減ストレスたまってるでしょ。だから、お姉さんが協力してあげようって云ってるのよ」

「お姉さま」

妹が心配そうに声を洩らす。

そういうことか。

「あなた、あのバカな呪われ屋がなんとかしてくれと計算してるんですね？」

「はん、カスが」

視線を逸らし毒突く姉。分かりやすい。

「ふっ強がって　あなたが奴のことをとことん信頼しているのは分かりますよ。でも、あなたと僕の共同の呪いをどうにかできるほど果たして彼は強いですかね」

「さあどうかしら？ただね、法師さまはあなたのことを救いたいんですよ。あの人はね呪われた人も呪った人も両方救いたいっていうところでもないお人好しだから」

ただのバカだと思うが。

「で、あんたのこと救うためには、あんたが全力出きって、それを法師さまが受けとめるしかないと思うわけ」

「一利ありますね」

面白い。ほんとに面白い。

あの糞弱い呪われ屋がこの僕を受けとめられると？

「行つていいですよ」

僕は妹に押しつけていたスタンガンを離した。

「お姉さま……」

「何も云わないで、風音。あなたは法師さまのところへ」

妹はいつと時の間、辛そうに姉を見ていたが、やがて小さく頷き
駆け出した。

「さあ始めましょうか？」

僕は女の黒い靄の中心、胸の中に右手を翳す。

「ええ、法師さまがきつとあなたを救ってくれるわ」

女はにつこりと笑つて僕の頬をそつと撫でた。

5

「隆盛……」

「うがぁ」

隆盛だけ明らかに他の人間たちとは症状が違う。殆どのものが氣
絶しているにも関わらず、苦しそうに藻掻いている。

靈力過敏症か……くそっ！法具を外してしまっていたから。

「これしろ」

オレは隆盛の腕に法具を填める。

「はぁはぁはぁ　　すっすまん」

肩で息をして礼を云う隆盛。法具で防御力を高めても、一度起こ
った発作はすぐにはひかないか。

どうしたのか、この情況。オレも辛うじて防げているとはいえ、
頭がチリチリしてるし。

「不破っ！！ここにいたか」

「高橋っ！」

高橋千佳子が生徒席の方からやってきた。

「なにごとだ、これは」

いつものように険しい表情で訊ねてくる高橋。

「呪いだ」

そう呪い。しかも、理由は分からないが風紗の呪いが広域放射されている。

「それは分かるが」

「それよりお前はなんともないのか？」

高橋は偉く丈夫そうにしているが。

「あ？これは精神を蝕むタイプの呪いだろ？私は普段から、他人の心を覗かないように精神防壁を張ってるから防げているのだろう」

そうか、こいつ特殊なESPがどうのって云ってたな。

「とにかく呪いの根っこを探さねえと」

「大智先輩っ！！」

風音が駆けてくる。

「風音っ！風はどうしたっ！？」

「それが」

風音は泣きながら縋り付いてくる。

「落ち着けよ！」

「はい。私がスタンガンを持った少年に襲われて……それで、姉が身代わりに」

「スタンガンを持った少年？」

あの子か……。

「どこにいる？」

「体育館倉庫の中です」

「そうか。高橋、風音を頼む」

オレは辛そうな風音を高橋に預けた。

「もし、これ以上酷くなるようなことがあればお前は神主さまを呼びに行ってくれ」

「それはかまわんが……一人で大丈夫か？私にもなにかできることが」

高橋はあの御神木の邪気の中でも生き残れることができたほどの

実力の持ち主だ。手伝ってくれれば心強いが。

「いんだ。あの子は　ヒロくんはオレが救わなきゃ。きっと、
風紗もヒロくんもオレのことを待ってるだろうから」

「そうか」

高橋はほんの少しだけ頬を緩め頷く。

「お前、見た目と違って男らしいやつだからな」

男らしいか　　どうだろうな……。

「胸張って行ってこい」

「ああ」

そうだ。胸を張って　　オレはヒロくんを救いたい、それだけ
だって風紗が気付かせてくれたんだ　　呪いに埋もれた二人のも
とへ向かうんだ。

＊

「くっ」

この呪い　　頭が吹き飛びそうだ。

「はあはあはあ　　」

女の呪いを僕の体を通して広域放射したのはいいが、呪いの威力
が強すぎて、僕までおかしくなりそうだ。

この女は普段からこんな呪いを抱え込んでいるのか。

「はあはあはあ　　けっこう……はあ　　きついでしょ　　」

呪いを吐き出す感覚が快感なのか、女は悦びに顔を歪めながら囁
いた。

「ふふ、こう見えて丈夫なんですよ」

「はあ意地っ張り。はあ……そういうところは法師さまと　　は

あ　　いい勝負　　」

「風紗っ！」

やっと来たか。

「はあはあはあ 法師さま はあはあ」
 「ふふふ」

ヒロくんは薄笑いを浮かべ、風紗の胸を鷺掴みにしている。風紗は顔を赤らめて息を上げてるし。

「なんかエッチいな」

「バカ云ってんじゃないわよ!!」

オレの素直な感想に怒号する風紗。

うゝん云い得て妙だと思っただけ。

「法師さま はあ 後は はあ まかせ た

……」

「呷っ!!」

風紗はがっくりとその場に倒れこんだ。

「ガス欠ですね。でも、これだけあれば十分だ。僕がしっかりとコントロールすれば、学校中の人間の脳味噌を徐々に、しかし確実に破壊することができる呪いです」

ヒロくんは相変わらず穏やかな体で語っている。

「ヒロくん……」

「さて、お兄さん。昨日の僕の問いに、納得できる答えを用意してくれましたか？」

『どうして人を呪ってはいけないのか?』その答えを用意することはできなかった。

「オレ、頭よくないからキミを論破することはできないよ」

「でしょうね」

ヒロくんは嬉しそうに頷く。

「だったら僕は僕の道を突き進むのみです」

「ああ、オレもオレの道を突き進むのみだ」

「それでいい。これが正しいカタチです」

ヒロくんの目が剃刀のように鋭くなった。

「僕もお兄さんも大局に見れば間違っていない。だが決して相成れない。ならば真っ向から対立するしかないんです。そう、戦いこそ太古より培われてきた生命の掟。正義を計るための正当なる手段だ」
「いいや。それは違う」
「なに？」

オレの反論にここで初めて彼の歪む顔を見た。

「だってオレはキミと対立しているとは思わないから」

「それは面白い意見です」

「そうかな。キミはそうやって強そうな言葉を並べているけど、本当に強いんならそんな必要ねえじゃんか」

「っ！？」

「理論武装するのはホントは繊細な証拠。キミが強がれば強がるほど、オレの目にはキミが『助けて、助けて』って云ってるようにしか見えないっ！」

そうだ。あのとき勇太が云っていた。苦しみの末に人を傷つけてしまうと。だったら、人を傷つけてしまう人は、一番に助けを必要としている人のはずだ。

「助けてやるっ！ぜってえヒロくんを助けてみせるから！！」

「そう　ここまでバカとはね……」

そう呟いてヒロくんは両腕を上げる。

「自分の甘さを後悔して死んでください」

オ　ケストラの指揮者のように彼の腕が動いた瞬間、

「うがぁ」

周囲に立ち籠めた風紗の呪いの邪気がオレに集って襲ってくる。

「あがぁ」

「ははは、痛いでしょ？苦しいでしょ？僕を救うなんてお兄さんにはできないよ」

ヒロくんの高笑い。頭が　カチ割れそうだ。

「うぐうあぁ　」

「お兄さんの次は、御陰勇太だ。あの鬱陶しいガキを血祭りに上げ

「てやるから」

「うがぁ」

[illegible]

「あははははははははははは」

アレ？

歌が聞こえてきた……。

異様なほど勝ち誇つた笑い声の合間を縫うように。

古びたスピカから頭の中に入り込んだ異物の芯から

「あははははははははははは」

男の子のか細い歌声が

ブランドに合わせた

もっと小さかった頃、

友達の『バイバイ』が

とても厭だつた

これはヒロくんの心か！？

あの日の夕日とか

レンジで暖める

ご飯が物凄く不味くて

これは風紗の呪いの作用！？

帰り道に聞いた

むやみに笑い声が聞こえてくる
テレビにむしように腹が立った

流れてくる、奥底に眠っていた孤独が。

あの人の声

急に恐くなってお母さんに
『帰ってきて』って電話したら
謝られて電話は切れた

うう。

町に溢れてる

お母さんもお父さんも
家の口　ンを払うために
遅くまで働いているらしい

涙が止まらない。

色も旋律も

でも僕は知ってる

お父さんは日曜日に

趣味のゴルフに行っていて

お母さんは臍繰りで

高いバックを買っている

寂しい、寂しいよお！

喜びと悲しみを

僕は家やゴルフやバックより

価値がない人間なんだと思う

違う！違うっ！！

僕にくれたの

四年前くらいから

黒い靄が見えだして

去年、あの人が

僕に力の使い方を

教えてくれた

呑まれる ヒロくんの悲しみに
。

その戸を叩き

黒い靄を掴んで近所の犬に

塗りたくったのが最初だった

犬は数日苦しんで死んでいった

だめだっ 呑まれちゃ！

帰らぬ、ただいま

最初は恐くて泣いたけど

落ちて着いたら気持ちいい気がした

俺は今でも父さんに支えられている！隆盛に助けて貰ってる！

縋り付く

それが呪いだとか気付かされ

みんな呪われればいいと思った

風紗や風音はこんな俺のこと必要だつて云つてくれた！

人形さえも

御陰勇太に懷かれるのは

本当は嬉しかったのかもしれない

でも、それを認めたら

僕がとても寂しい人間だと

気付かされるから

今度はオレが、こいつのことを
！

壊して行つたの

だからいらない

惨めだとか、そんなの

厭だから

ブランコにさした

あの日の夕日とか

帰り道に聞いた

あの人の声

救つてやらなきゃ情けねえじゃねえかよー！！

つづけた邪気を。

「うつつつつ」

ヒロくんが小さく声を上げた。

「消える」

「えっ？」

「僕が消えちゃう」

「どういう意味だ？」

「僕が消え」

ヒロくんは何かを手繰り寄せるように天に両腕を翳す。

「いやっ消える、僕が」

爪先立ちになり、

「僕が消えちゃ」

やがて少年は崩れ落ちた。

「おん」

邪気を封じ、ほどなくしてオレの意識も消えていった。

8

目が覚める。辺りは暗かった。

空気に広がりを感じる。

ここは本堂だ。

「くっ！」

オレは慌てて本堂から出る。居間に灯る光を目指し駆けだす。

「どうなった！？」

「大智」「大智先輩」

隆盛と風音が座っていた。隆盛はオレに疲れた笑みをみせて答える。

「ああ、体育祭は中止になったけど、お前のおかげでみんな助かったよ。風紗は検査入院してるが」

「あの子は？ヒロくんは」

「あの子は」

隆盛はオレから目を逸らして口籠もった。その行動から吉報は期待できないと悟る。

「どうなった？」

恐る恐る訊ねるオレ。隆盛は深いため息を吐いて、

「あの子は今、意識混濁状態にある」

「意識……混濁？」

その意味が把握できなく聞き返す。ただ、よくないことだということとは分かった。

「なんだよ、それ！？」

「昏睡まではいつてないが、いまいち意識がはつきりせずに外界と交流できない状態になっている」

「どうして そんなことに……」

オレはその場に崩れた。

「大智先輩っ！」

オレの傍らに風音が寄り添ってくる。

「なんで」

オレ、また間違ったのか？救えなかったのか？

「まだ詳しくは分からないが、医者の話によると、或いはあの子は数年前からあの状態だったのではないかって」

「どういう？」

「これはあくまでオレの見解だが、あの子はとうの昔に心を閉じていたんじゃないかな。本当は鬱病だか統合失調だかの精神失陥によって脳の機能はすでに衰えていたんだ。そこにあの子の体質で邪気が寄せ付けられて、停止している脳に刺激を与えていたんじゃないだろうか？」

「じゃあ、あの子の人格と違っていたものは実は呪いによってできたもので、本当の人格はすでに壊れていたということですか？」

「人格という程でもなくても、脳機能の補正では大部分をしめていたんじゃないかな」

「……………」

「寧ろ 役に立っているんですよ」あの子の言葉を思い出す。
そしてあの「僕が消えちゃう」。

「もしかして、オレのせいで」

オレが彼の意識を支えていた邪気を取っばらったから！

「そんなことないだろ？あの子は確実に歪んでたんだ。あのままだ
つたらたくさん犠牲者を出していたんだからな」

「じゃあなんでっ！？」

慰めてくれようとしている隆盛に激昂をぶつけてしまう。

「なんであの子はああなっただよ！まだ、小学生の子供が心閉じ
ちまうまでにつ！？」

「さあな、その答えを導きだすには情報が少なすぎる。ただ云え
るのはあの子がもともと邪気にあてられやすかったことが要因の一
つではないかということ」

隆盛は目を瞑った。心に蓋をして堪え忍ぼうとしているかのよう
に。

「あの子の両親が病院で事情を聴いたとき、父親は『お前がちゃん
と見てないからだ』と母親を罵り、その母親は『そんなはずない。
ヒロトがそんなことするはずない。そんな子じゃない』と懇願する
ように周りに否定し捲っていた。ベッドの上で意識を朦朧とさせて
いる息子を抱き締めることさえせずにな」

「ああ」

オレは頭を抱える。

あのとき流れてきた、あの子の感情。

寂しさで一杯だった。

とても頭のいい子で、周りの人間の状況をちゃんと理解していた。
それでも自分の感情を表に出す力が未熟すぎて、どうしたらいい
か分からず藻掻いていた。

誰も気付いてやれなかった。

「うつくっ」

「」

また涙が流れる。

救えない　　救えない　　力が……オレに力がないから。

「大智、あまり抱え込むなよ。お前はよくやった。なっ？」

「そうです。それに、あの子はこれからよくなっていくんです。その切っ掛けを与えた大智先輩は素晴らしいことをしたんですよ」

二人が寄り添ってくれる。

「……………」

足りないんだ。力が　　時間が　　！

「それでも　　」

オレは握った拳に指がめり込んでいくほどに力を込めて床を殴り付ける。

「大智？」

「それでもオレは　　」

ありがとう。

今日は　　今だけは思いっきり泣いておこつ。

明日からはまた、誰かのために　　、

「オレは呪われる　　」

〃 人のカタチ 〃

ブランコにさした

あの日の夕日とか

帰り道に聞いた

あの人の声

町に溢れてる

色も旋律も
喜びと悲しみを
僕にくれたの
その戸を叩き
返らぬ、ただいま
縋り付く人形さえも壊していったの

そばに寄り添った
脱け殻をとおし
遠くに置き去りにした
心が疼く
どうして僕なの？
キミに問い掛ける
背中にふれた唇
あなただから、と
その夜、夢見る
笑ってる僕の
明日、取れた人形の首を治そう

リバ ス製作委員会／みゆ貴茂

シ ケンス

『申し訳ありません、乾闥婆さま』

受話器^{ゴシ}に聞こえる常磐刑事の声に勇太は軽い失笑で応える。

「はっ」

勇太の目は病室に設置されていたテレビに走った。

《先日、警視庁のコンピュータ 百三十二台がシステムダウンした事件で、今日警視庁はサイバ テロの可能性も視野に入れ捜査本部を設置することを》

「いや、こっちこそ悪かったよ。大変そうみたいだけど」

『はい、防ぐ間もなくクラッキングされてしまいました』

「しょうがない、しばらくは様子をみよう。それじゃあ」

勇太は受話器を置くとクスクスと笑い始める。

「どうでもいいってね、そんなこと。僕は呪われぼっちとヒロくん
の対決見れて大満足だし（病院抜けだして見ていた）、ああ早く腕
治らないかな。みんなに報告したいよう」

ベッドで嬉々と足をばたつかせる勇太。

「まっこれでヒロくんもまともになるんだろうし、よかったよね
えゝそんなこと思ったらいつか夢の中へゝ」

つづく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5205d/>

呪われぼっち

2010年10月13日14時43分発行